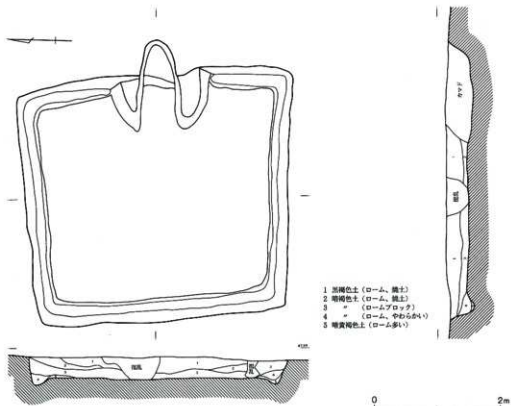
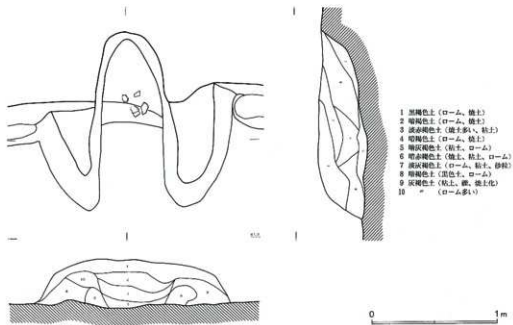
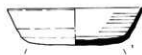




第87図 23号住居跡



第88図 23号住居跡カマド



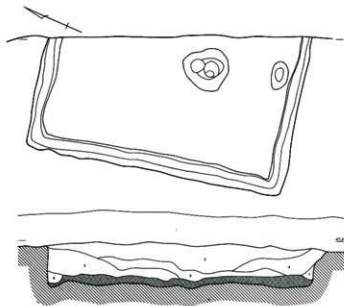
0 10cm

第89図 23号住居跡出土遺物

24号住居跡

Z-15・16グリッドに位置し、カマドを含めた東半部は調査区外に及んでいる。16号掘立柱建物跡と北西コーナーで重複しているが、本住居跡が新しい。全体の規模やプランは不明だが、西壁長は4.2mで深さは50cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁溝が巡っている。ピットが2穴穿たれているが、覆土からは本住居跡に伴うものでなく、奈良時代以後の新しい時期の遺構であろう。

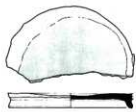
遺物は少なく、覆土出土の須恵器環2・瓶1個体と土師器甕の破片4片だけである。2は長頸瓶の底部を利用した転用硯で、胴部を打ち欠いて調整したもので、中央部は摩滅して緩い窪みとなっている。胎土から搬入品であろう。



- 1 暗褐色土（表土層）
- 2 灰褐色土（ローム、壁土、やわらかい）
- 3 暗灰褐色土（ローム多い、壁土）
- 4 暗灰褐色土（壁土、ローム）
- 5 暗褐色土（ローム）
- 6 暗灰褐色土（ローム多い）
- 7 暗灰褐色土（ローム多い）

0 2m

第90図 24号住居跡



0 10cm

第91図 24号住居跡出土遺物

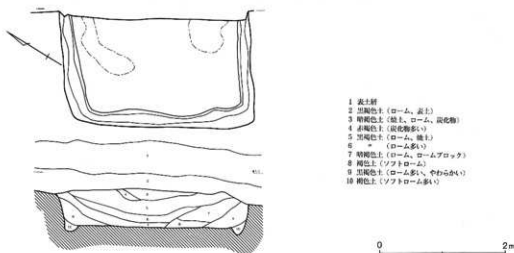
24号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏			(6.4)	CEH	II	5	底部	中層、RBb
2	転用碗		1.5	13.1	DEG		5		中層、長頸瓶胴部を打ち欠いて調整

25号住居跡

台地が南に傾斜を始める AA-16グリッドに位置するが、カマドを含めた東半部は調査区外に及んでいる。西壁長 3 m の小型の住居で、確認面からの深さは 60 cm を測る。表土からの断面を観察できたが、住居の覆土が確認面より盛り上がるようで、堆積状況も斜面下部からの流入を見ることが出来る。床面は平坦な貼床で、部分的に堅緻な範囲が点在する。壁溝は確認部分では巡っている。

出土物は個体識別で、須恵器坏 1、土師器坏 2・甕 2 個体である。



第92図 25号住居跡



第93図 25号住居跡出土遺物

25号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	13.2	3.5		AEH	I	3	100%	床
2	甕	(23.6)			ABE	II	4		

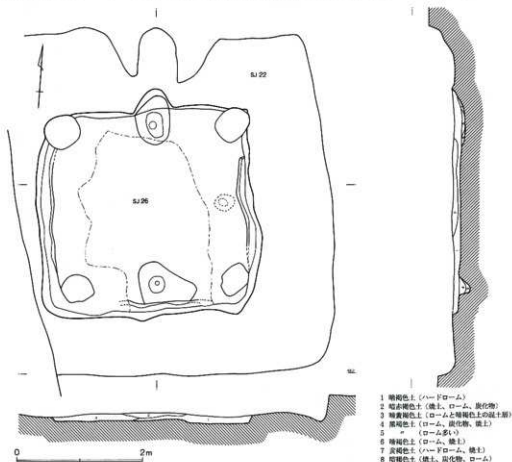
26号住居跡

22号住居跡の床面内に、主軸を同じくしてすっぽりと納まり、22号住居跡の4本の柱穴が本住居跡の各コーナーに位置している。埋め戻しの後、全面を22号住居跡に床面を貼られ、深さは10cmほど残存していた。規模は南北3.25m、東西3.5mの方形を呈するが、壁のラインが乱れる部分も見られる。床面も凹凸があって安定しておらず、貼床下のため全体的に硬いが、特に中央部に堅緻な範囲がある。壁溝は床面が不安定なため、部分的にしか確認できなかった。カマドに面する南壁下に周堤帯を有する小ピットがある。

カマドは北壁中央部に構築されており、22号住居跡のカマド焚口下にあってこれと連続したような位置にある。焼土や炭化物の堆積が残る程度で、大部分が削平され特に堅緻な床面が貼られている。

残存部が少ないので遺物は少なく、1のように22号住居跡出土土器と接合した例もある。3は環状の鉄製品である。

以上の調査状況から、22号住居跡は本住居を同軸上に拡張したものと考えられる。本住居の各壁を約1m延長し、コーナーに柱穴を穿つ、計画的な拡張の様相を看取することができる。



第94図 26号住居跡



第95図 26号住居跡出土遺物

26号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.9)			DEH	I	5	40%	RA
2	甕	(26.0)			ABDEF	II	4	15%	

27号住居跡

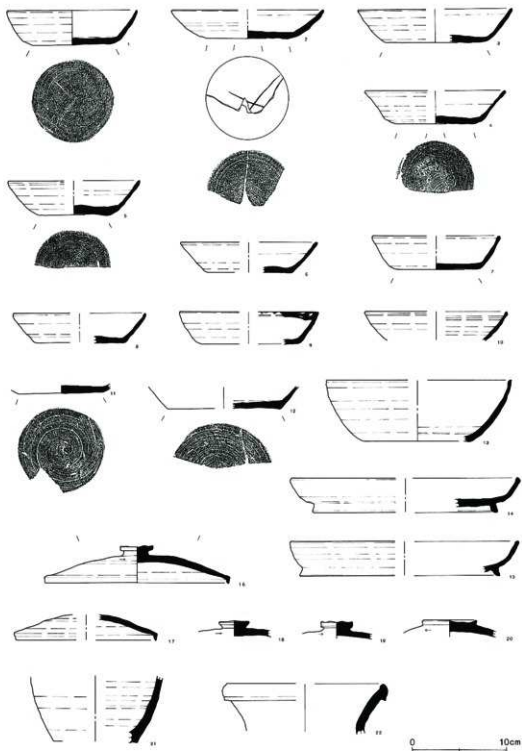
緩斜面部の AD-16グリッドに位置する大型住居であるが、人家が上にあったためブロック塀や給排水施設で攪乱が激しく、ようやく全体のプランと規模が把握できた程度であった。カマドは焼土の分布状況から、おそらく北壁にあったと考えられ、主軸は真北を指す。規模は東西8.9m、南北6.4mを測り、攪乱を受けていない最も残りの良好な部分で深さは50cmである。床面は部分的にしか残存していないが、平坦な貼床で堅緻である。壁溝も東西壁で確認できたが、南壁は削平され壁の立ち上がりだけを検出できた。柱穴は各コーナーとその中間に各1穴の6本柱穴で、深さ50~90cmを測り、貯蔵穴は南西コーナーにある。南西コーナーの柱穴近くには、炉跡状の焼土が2カ所検出された。

カマドは攪乱により破壊されていたが、写真撮影のための清掃時に北壁の外側で僅かな焼土の分布が認められ、カマドの痕跡と考えられるであろう。位置的には北壁中央に相当する。

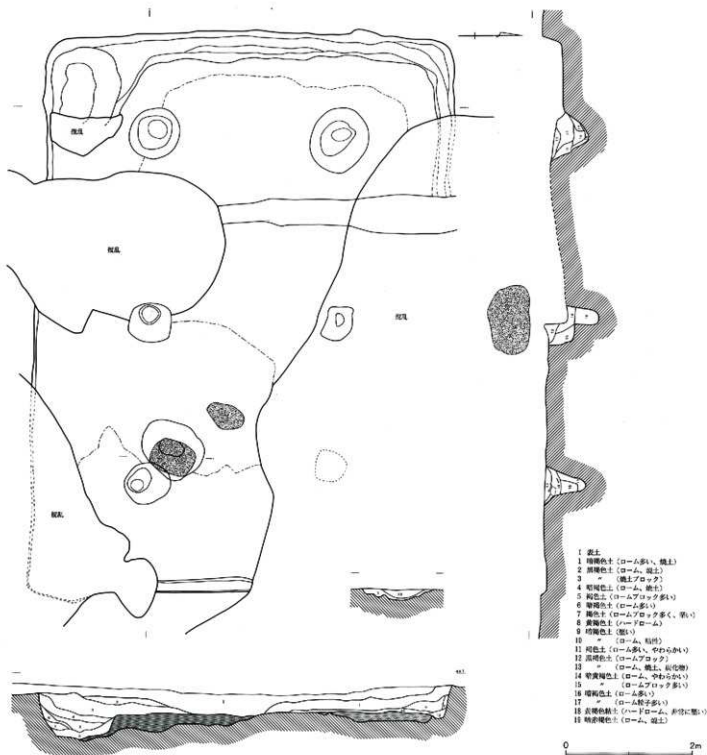
出土遺物は攪乱内を含めて多く、特に須恵器の比率が目立っているが、攪乱・削平で出土地点が不安定な遺物が多い。個体識別では、土師器は甕2個体と坏の小片で、須恵器は坏34・盤5・蓋5・甕3個体である。



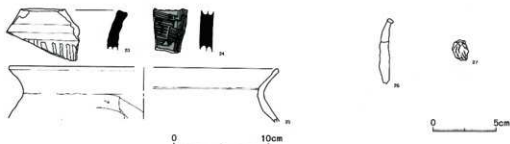
27号住居跡柱穴内
土器出土状況



第96图 27号住居跡出土遺物 (1)



第97図 27号住居跡



第98図 27号住居跡出土遺物(2)

27号住居跡出土土器観察表

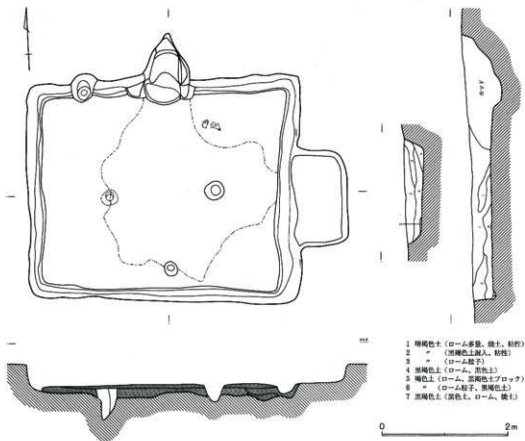
番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	13.6	3.7	8.8	ABDEH	Ⅱ	4	90%	RA
2	坏	(16.0)	3.0	8.6	ACDEH	Ⅲ	6	30%	RBa、ヘラ記号
3	坏	(16.2)	3.4	(10.2)	BDEH	Ⅰ	5	30%	R
4	坏	(14.8)	3.5	8.2	BDEH	Ⅰ	7	35%	RBa
5	坏	(13.9)	3.6	(8.8)	ABDEH	Ⅱ	7	35%	R
6	坏	(14.4)	3.2	(9.0)	CDE	Ⅱ	6	15%	R
7	坏	(13.5)	3.6	8.5	BDEH	Ⅰ	5	25%	R
8	坏	(14.0)	3.1	(9.2)	BDEH	Ⅰ	6	15%	R
9	坏	(14.7)	3.35	(10.4)	DE	Ⅲ	6	25%	油煙
10	坏	(14.8)			BEH	Ⅰ	7	25%	
11	坏			9.0	A~EH	Ⅲ	4	底部 90%	RA、ヘラ記号
12	坏			(12.0)	A~E	Ⅲ	7	20%	R
13	碗	(19.6)	6.45	(11.5)	BDEH	Ⅱ	7	13%	床下
14	高台付甕	(25.8)	3.15	(19.5)	A~EH	Ⅱ	7	8%	
15	高台付甕	(24.4)	3.65	(22.4)	ABDE	Ⅰ	6	13%	
16	蓋	19.5	3.8		BDEH	Ⅰ	7	100%	R
17	蓋	(14.9)	(2.7)		ABEH	Ⅱ	9	25%	
18	蓋				BDEH	Ⅱ	7	つまみ部	
19	蓋				ABDEH	Ⅱ	6	つまみ部	
20	蓋				ABEH	Ⅱ	5	つまみ部	
21	鉢		(7.05)	(8.8)	AEH	Ⅰ	7	10%	
22	甕	(16.8)	(5.4)		ABEG	Ⅰ	6	33%	
23	甕	(24.0)			ACDE	Ⅰ	6	口 縁	
24	甕				ACDE	Ⅰ	7	胴破片	外面タタキ目
25	甕	(28.4)	(5.5)		B~E		4	口 縁	

28号住居跡

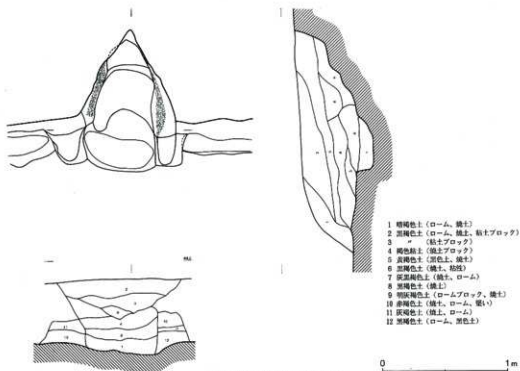
AD・AE-14グリッドに位置し、北壁で25号掘立柱建物跡の柱穴を切っており、東には29号住居跡が接している。主軸方向はほぼ真北を指し、規模は東西4.35m、南北3.5mを測り、東壁に幅150cm、奥行き90cmの張り出し部がある。深さは最深部で40cmである。壁は急角度で立ち上がるが、暗褐色土を掘り込んでおり、床面近くからロームとなっている。壁溝はカマドを除いて、張り出し部前も巡っている。床面は褐色土と黒色土を混合した貼床で、平坦でカマドから床面中央そして張り出し部にかけて堅緻である。ピットは2穴あり、貼床下からも床面で確認できたピットの1つと対になる位置で1穴検出された。

カマドは北壁中央に構築され、全長112cm、焚口幅55cmでロームと黒褐色土の混土層を袖部の芯としている。4層は天井部の崩落層で、褐色の粘土を使用し、内壁は煙道まで熱を受けて焼土化している。

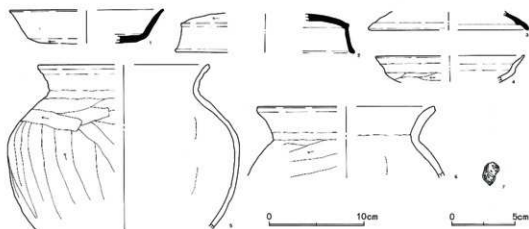
遺物は覆土中からも多く出土しているが、斜面上方からの流入と考えられる。個体識別では須恵器環3・蓋3・甕の破片が数片で、土師器は環3・皿3・甕1・壺2個体である。他に桃の種子が出土している。



第99図 28号住居跡



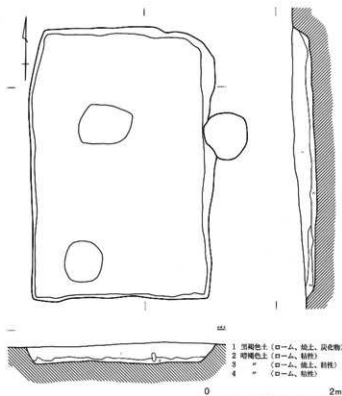
第100図 28号住居跡カマド



第101図 28号住居跡出土遺物

28号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(16.2)	3.5	(10.4)	DEH	II	5	40%	堅緻
2	蓋	(18.9)	(4.1)		BDEH		5	20%	ロクロ左回転、L、カマド
3	蓋		(1.7)	(16.8)	DEH	II	6	5%	かえり
4	皿	(15.8)	(2.8)		DEFH	I	4	10%	カマド
5	壺	(18.0)	(17.5)		ACEF	II	4	12%	
6	壺	(18.8)	(7.5)		CEH	I	4	25%	



第102図 29号住居跡

29号住居跡

28号住居跡の東に隣接しており、27号掘立柱建物跡に切られている。遺構確認時点では確認面が暗褐色土であったため、プランが明瞭でなく一般的構造の竪穴住居跡を予想して調査を進めた。しかし、遺物は多量に出土するがカマドが確認されず、柱穴や堅緻な床面も検出できなかった。

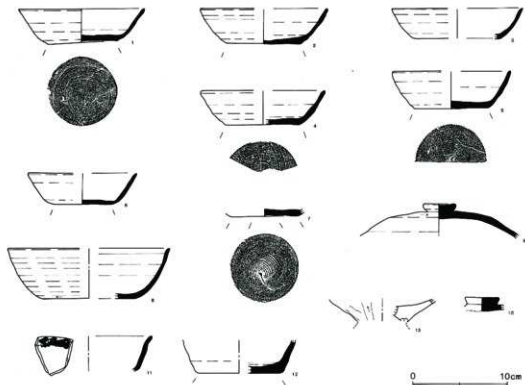
長軸方向はほぼ南北を指し、規模は東西2.95m、南北4.3mの長方形を呈し、深さは35cmを測る。床面は平坦だが、地表面の傾斜と同様にやや南に傾斜し堅い部分はなく、ローム面を直接床としている。

遺物は覆土中層を中心に多く出土しており、個体識別では土

師器は台付甕1個体と坏と甕の小片だけである。須恵器は坏13・高台坏1・蓋3・椀1・甕2個体である。

29号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	3.6	7.3	EH	I	6	95%	RA、窠記号
2	坏	(13.5)	3.7	4.0	DEH		6	15%	RA
3	坏	(13.8)	(3.2)	(9.0)	DEH		5	20%	
4	坏	(13.0)	3.6	(8.0)	DEH	II	6	20%	RA、窠記号
5	坏	(12.4)	4.0	7.9	EH	II	5	25%	RA
6	坏	(11.4)	3.3	6.0	DEH	I	5	45%	RA
7	坏			(7.2)	DEH	II	5	底部100%	RBb
8	椀	(17.1)	9.7	(5.3)	DEH	I	5	20%	R
9	蓋				BDEH	II	5	20%	R
10	蓋	(13.6)			DEH	II	5	つまみ	
11	坏			(3.8)	EH		6	6%	油埋
12	鉢		(3.5)	(8.0)	EHG	II	5	底部	
13	台付甕	(5.4)			ACEF		4	台部	



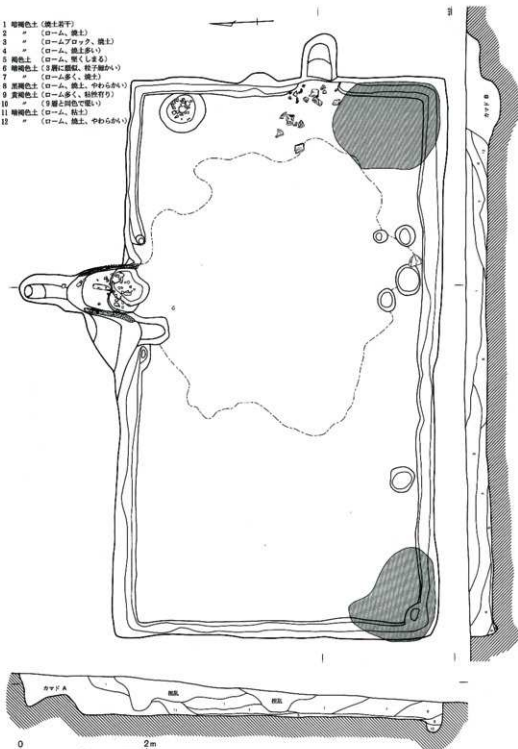
第103図 29号住居跡出土遺物

30号住居跡

南向きの斜面がやや緩やかになった、AD-14・15グリッドに位置し、東西方向に走る近・現代の溝と重複している。また、調査前は基地であったため深い攪乱が点在し、カマドなどが部分的に破壊されている。主軸方向はN-4°-Eを指し、規模は東西8.9m、南北5.1mの長方形を呈し、深さは最も深い北壁で60cm、南壁で30cmを測る。覆土の堆積は斜面上方からの流入が観察できるが、溝や攪乱の影響もあって、安定した状態ではない。南壁の東西コーナーの上層には粘土が堆積していた。床面はほぼ平坦な貼床で、床面中央の東よりに堅緻な部分が広がっており、貼床はハードロームに黒色土が混入したもので、壁際とコーナーをやや深く掘り込んだ掘り方である。壁溝はカマドを除いて全周する。主柱穴はないが、南壁際に深さ20cm程の柱穴が2対4穴が並び、出入口に関わる施設であろう。北東コーナーに直径約70cm、深さ15cmの貯蔵穴があり、覆土中には焼土を含んでいた。

カマドは2基確認され、北壁中央やや東よりをカマドA、東壁をカマドBとした。カマドBは各部が残存しておらず、特に住居内部の袖などは除去されている形跡があり、Bを廃棄してAを新たに構築したものであろう。カマドAは全長235cm、焚口幅80cmを測り、3層が天井部崩落層で4層が燃焼空間に相当するだろう。煙道部は9層に当たるであろうが、煙道先端がやや窪んでおり、構造的に特殊である。内壁は焼けて焼土化しており、7層周辺に器設部が存在したと考えられる。カマドBは壁に沿って削り取られたようで、3層は掘り込みを埋めて床面となっていた。壁外に延びる

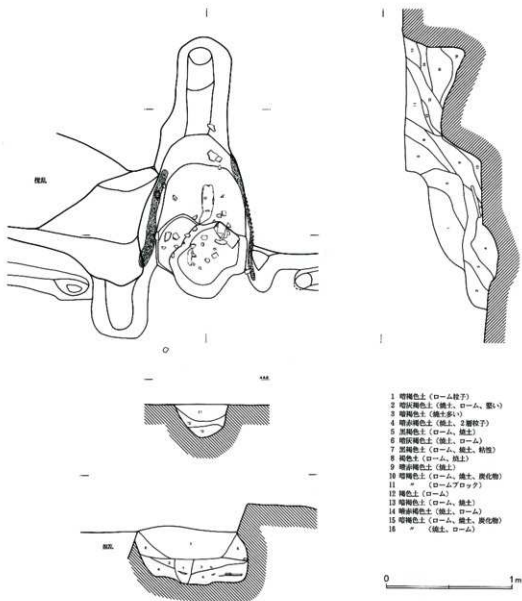
- 1 暗褐色土 (黄土層下)
- 2 " (ローム、黄土)
- 3 " (ロームブロック、黄土)
- 4 " (ローム、地上多い)
- 5 褐色土 (ローム、堅くしまる)
- 6 暗褐色土 (3層に散在、砂子混じり)
- 7 " (ローム多く、黄土)
- 8 灰褐色土 (ローム、黄土、やわらかい)
- 9 黄褐色土 (ローム多く、砂所有り)
- 10 " (9層と同色で硬い)
- 11 暗褐色土 (ローム、粘土)
- 12 " (ローム、黄土、やわらかい)



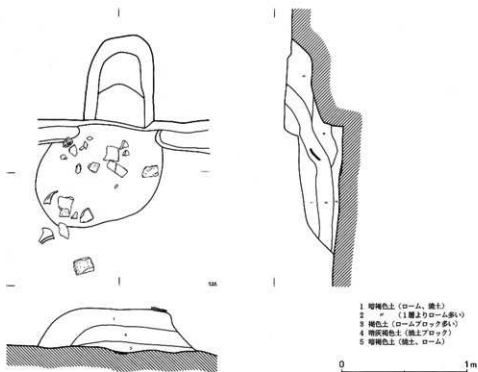
第104図 30号住居跡

煙道は約70cmで、壁溝の連続しない部分は60cm程であるので、焚口幅もこれを超えない程度であろう。

出土遺物は多く、特に須恵器の出土量が多い。個体識別では、土師器は坏3・甕1・壺1個体で須恵器は坏10・蓋5・短頸壺1・碗2・甕1個体などである。他に釘1、刀子1、石製紡錘車2が出土している。13の土師器壺は内面に漆がほぼ全面に薄く付着しており、16の須恵器坏もやはり内面に漆が付着している。漆の貯蔵壺と取り皿の関係になるものであろうか。



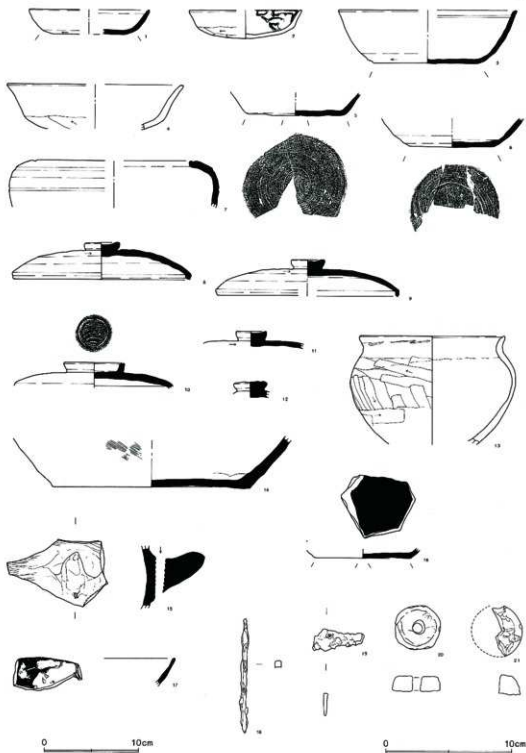
第105図 30号住居跡カマド A



第106図 30号住居跡カマドB

30号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	(12.8)	2.6	(8.4)	DEH		5	50%	下層
2	坏	(12.0)	3.0	1.4	EF		4	25%	床面、油煙付着
3	碗	(19.0)	5.6	11.0	BDEH		5	60%	RA、カマド
4	坏	(18.8)			EH	II	3	15%	赤彩、下層
5	坏		(2.6)	5.4	BEH		5	底部	RAa、下層
6	坏		(3.1)	9.0	BEH		7	底部	篋切りか、覆土
7	無頸壺	(16.4)	(5.0)		EH	I	5	5%	床面
8	蓋	18.7	3.9		DEH	I	5	100%	床面
9	蓋	(19.2)	3.8		DEH		5	40%	R、下層
10	蓋				BEH	II	9	つまみ	下層
11	蓋				DEH	I	6	つまみ	R、床面
12	蓋				EH	II	6	つまみ	床面
13	壺	15.4	(11.5)		ACEH	I	4	60%	内面全面漆付着
14	連鉢			21.0	BDEH	I	6	底部	カマド
15	鉢				EH	II	6	把手	床面、把手基部に孔
16	坏			(10.0)	CEH		5	20%	覆土、内面漆付着
17	坏							10%	床面、油煙



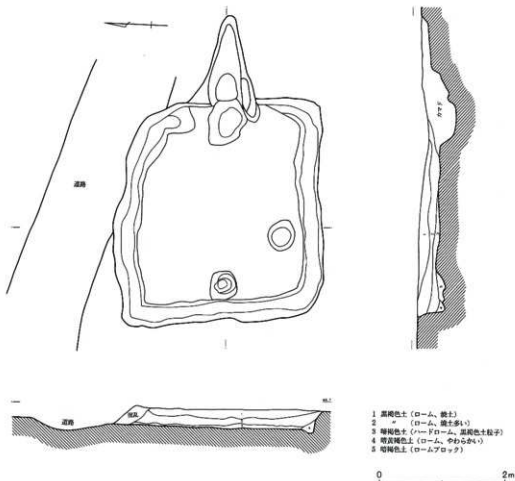
第107图 30号住居跡出土遺物

31号住居跡

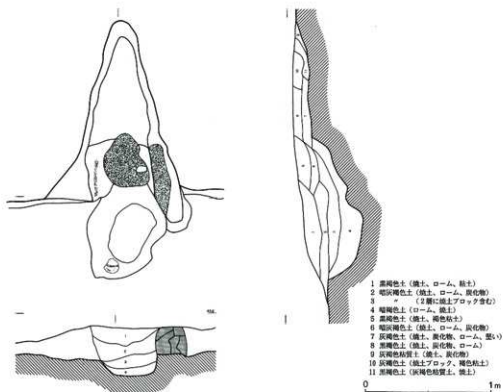
台地肩部のAA-14グリッドに位置し、本住居跡のやや南から台地の傾斜が始まる。また、川越と日高の市境である山道が北東コーナーを通過しているため、カマドから北壁にかけて削平されている。主軸方向はN-89°-Eを指し、規模は南北3.5m、東西3.3mの方形を呈し、深さは30cmを測る。床面は山道の影響や木の根などで凹凸が目立つが、カマド前面は堅緻で平坦である。壁溝はカマドを除いて巡るが、幅が広く不安定である。柱穴はないが、南西コーナー近くに浅い落ち込みがある。

カマドは東壁中央に構築され、全長205cm、焚口幅60cmを測るが、左側の袖部は攪乱により破壊され、全体的に残りは良くない。袖には暗灰褐色粘質土を使用し、内壁は焼土化している。煙道部や器設部は明瞭ではない。

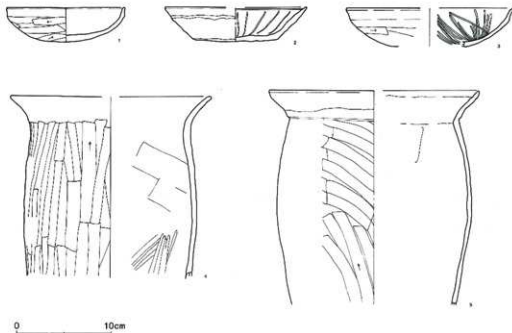
出土遺物は少なく、土師器坏4・甕2・須恵器坏1個体で、1はカマドからの出土である。



第108図 31号住居跡



第109図 31号住居跡カマド



第110図 31号住居跡出土遺物

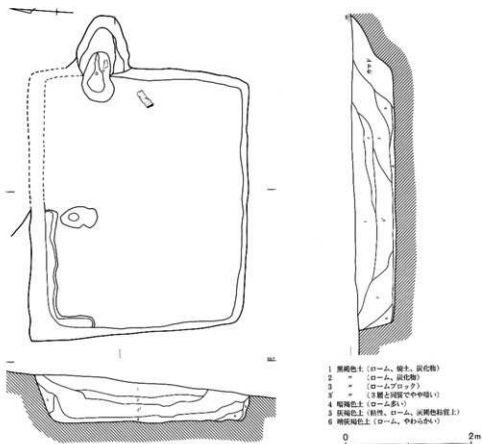
31号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.6	3.6		A~EH	II	4	80%	カマド、口縁部内外面横ナデ、体部外面荒ナデ
2	盤状坏	(14.9)	3.6	9.0	ABDEF	III	3	25%	全面赤彩、内面暗文、外面磨き
3	坏	(17.8)	4.0	(8.0)	ABDEFH	III	3	9%	赤彩
4	甕	(21.5)	(19.4)		ABDEH	III	4	33%	口縁部横ナデ、胴部上半荒削り
5	甕	(22.4)	(22.6)		A~E	III	4	30%	口縁部内側面横ナデ、胴部外面荒削り

32号住居跡

台地が大きく傾斜を始める AB-13グリッドに位置し、北東コーナーからカマドにかけて墓地による攪乱で破壊されている。主軸方向は等高線とほぼ平行したN-85°-Eを指し、規模は東西4.2m、南北3.4mを測り、深さは最深部で80cm、最も浅い部分で40cmである。床面はハードルームであり、平坦で全体的に堅緻である。壁溝は北西コーナー部だけに見られ、浅い落ち込みが北壁下に穿たれている。

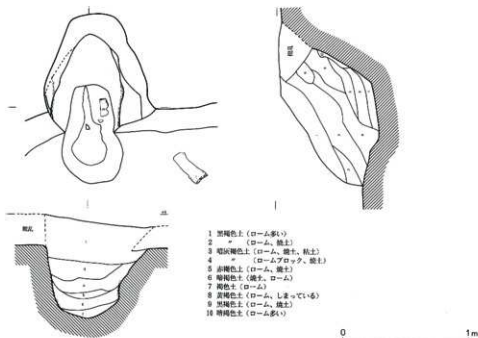
カマドは東壁の北よりに構築されており、全長135cm、焚口幅約50cmである。斜面と攪乱により全体的に崩れ、袖部は検出できなかった。4・9層が燃烧部と煙道部に相当し、8層は煙道の天井部



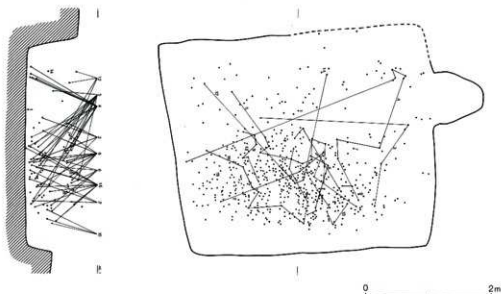
第111図 32号住居跡

の残存ではなからうか。

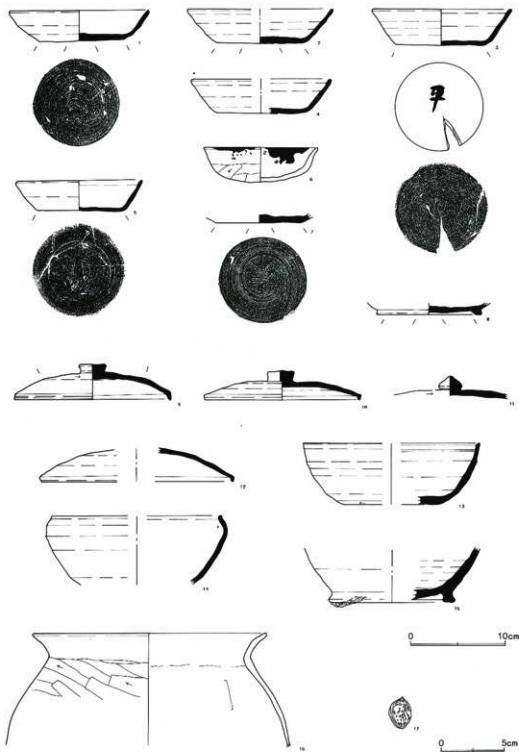
遺物は覆土上層からカマドまで、合計946点が出土している。特に斜面上方からの流入が見られるが、上層と床面近くの遺物が接合する例もある。個体識別では、土師器は坏1・甕1個体で須恵器は坏10・高台坏2・碗1・蓋4・鉢1・甕1個体である。3の須恵器坏の底部外面には「平」の墨書がある。



第112図 32号住居跡カマド



第113図 32号住居跡遺物分布図



第114図 32号住居跡出土遺物

32号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	14.8	3.2	9.1	BDEH	II	7	100%	RBa、床、歪んでいる
2	坏	(15.4)	3.7	9.4	CH		5	25%	RBb、下層
3	坏	15.0	3.8	9.4	EH	II	5	80%	RA、底部墨書有
4	坏	(14.8)	3.7	(9.4)	EII		5	40%	R、カマド床
5	坏	13.4	3.1	8.4	DEH	II	5	100%	RA、上層
6	坏	12.2	3.7	1.3	ACDEF	II	7	100%	油煙、下層
7	坏		9.2	(0.9)	EH	I	7	底部	LBa、上層
8	高台坏		(1.3)	11.1	EH	II	5	底部	RBa、上層
9	蓋			16.6	BEH	III	6	100%	天井寛削り、上層
10	蓋			16.5	EH	I	7	98%	天井部ナデ、上層
11	蓋				DEF	II	5	つまみ	床
12	蓋			(20.6)	DH	I	5	60%	歪んでいる、上層
13	碗	(18.4)	6.5	(10.0)	DEH	I	9	40%	歪んでいる、上層
14	鉢	(18.1)	(7.3)		DEH	II	5	25%	下層
15	瓶		(5.9)	(13.0)	EGH	I	8	底部	窯壁付着、筆記号?、上層
16	甕	24.9	(11.9)		ACEF		4	口 縁	

33号住居跡

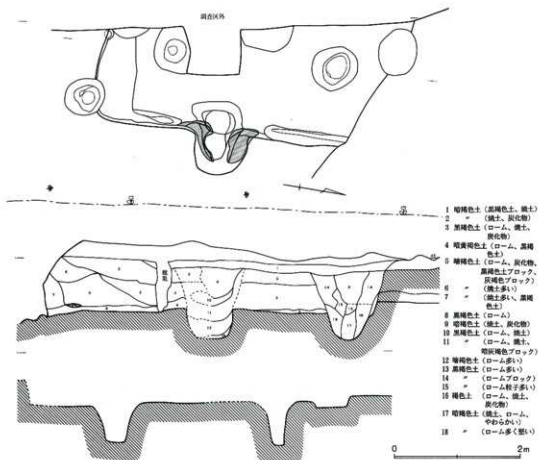
斜面がやや安定して傾斜が緩くなる、AD-12グリッドに位置するが、西側の半分以上は調査区外となり、北側は攪乱によって大きく削平されているため、全体の規模は不明である。また、本住居跡埋没後に、31号掘立柱建物跡が構築されている。土層図は調査区西壁が不安定なため復元的に作図したものであるが、確認面はII層の暗褐色土で覆土中には焼土が多く含まれ、南東コーナーの上層には厚く堆積していた。床面は粘性土を貼床とし、南東コーナーはやや低くなっている。壁溝は東壁で検出でき、柱穴はコーナーに沿って2穴確認され、深さは55cm程である。

カマドは東壁に構築されており、状態は良くないが、全長115cm、焚口幅40cmを測る。袖部は床面には突出しておらず、礫混じりの粘土を住居の壁に沿って貼っている。燃焼部や煙道部は堆積状態が不安定であるため特定できない。

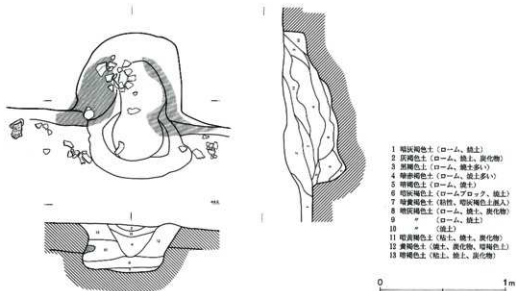
出土遺物は覆土上層からも多く検出され、掘立柱建物跡に属するものもあるだろうが、ここでは確実な遺物以外は本住居跡であつかった。個体識別では、土師器坏3・皿1・甕2個体、須恵器坏6・蓋1・甕1個体である。

33号住居跡出土土器観察表

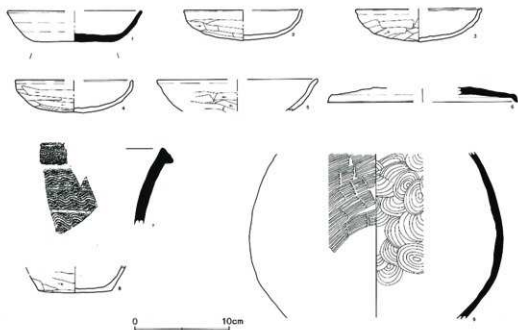
番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	(14.2)	3.25	8.8	ABDE	II	7	30%	RA、上層
2	坏	(12.5)	3.2		A~EH	II	4	60%	床下、口縁部内外面横ナデ、体部外面寛削り
3	坏	(13.2)	3.5		ABDEFH	III	3	30%	床下ビツト、口縁部横ナデ、体部外面寛削り
4	坏	(12.4)	3.4		ADEH	II	3	30%	カマド、口縁部内外面横ナデ、体部外面寛削り
5	皿	(17.0)	(3.4)		ADE	I	4	25%	床下、口縁部横ナデ、体部寛削り
6	蓋	(20.1)			BDEH	I	5	13%	上層
7	甕		(8.0)		ABDE		5	口 縁	下層、口縁部横書き波状文
8	甕		(2.8)	7.8	ACDEF	III	4	底部	カマド、床
9	甕		(12.4)		A~F	III	4	胴 部	カマド、床、胴部外面寛削り後平行叩き目、内面青銅文



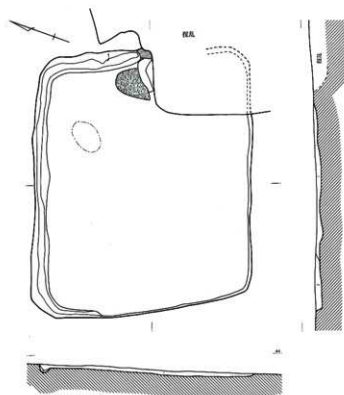
第115図 33号住居跡



第116図 33号住居跡カマド



第117図 33号住居跡出土遺物



第118図 34号住居跡



第119図 34号住居跡出土遺物

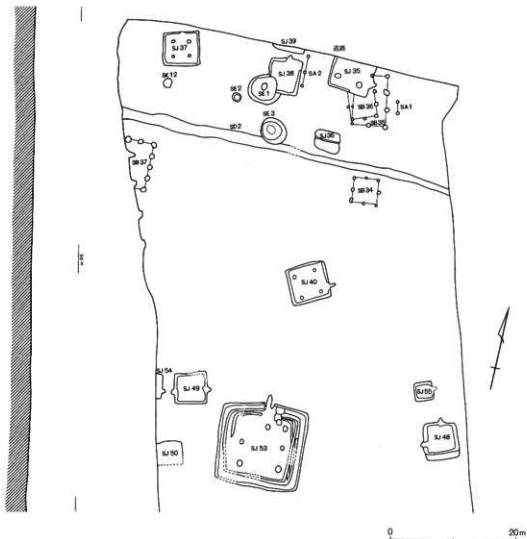
- 1 陶器残片土（ローム、粘土）
- 2 黒褐色土（ローム、焼土、炭化物）
- 3 褐色土（ローム多）

0 2m

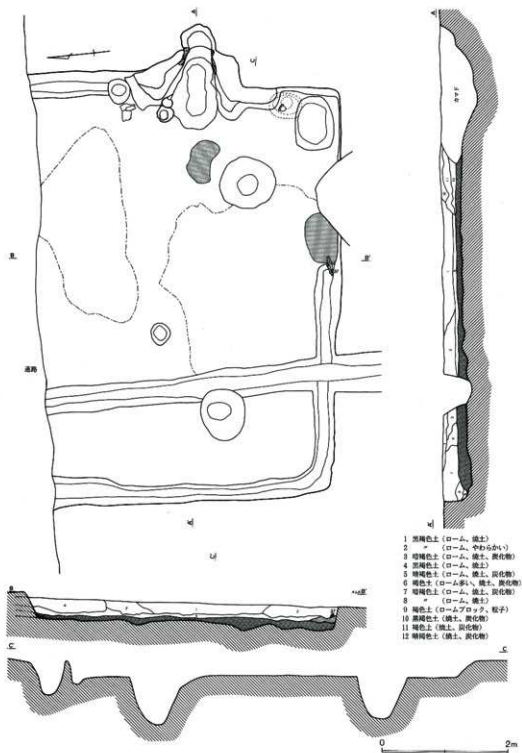
34号住居跡

斜面部のAC-12・13グリッドに位置するが、墓地造成時に削平されて、壁はわずかに立ち上がり
が確認できた。主軸方向はN-70°-Eを指し、規模は東西4.2m、南北3.5mを測り、深さは最深部で
も10cmない。部分的に削平が床面まで及んでおり、堅緻な部分はない。壁溝は北壁で確認でき、柱
穴はない。カマドは東壁に構築されているが、大部分を攪乱に破壊され、焼土と粘土の残存によっ
てカマドの位置を想定できるだけである。

出土遺物には土器類は皆無で、カマド脇の壁溝内から刀子の破片が検出されただけである。



第120図 奈良時代遺構分布図 No.3

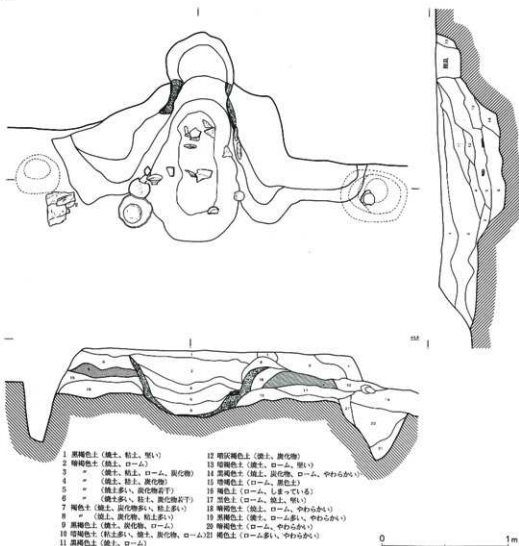


第121図 35号住居跡

35号住居跡

斜面からほぼ平坦な地形に変化する、標高44mの地点に位置する。北側には市道が通過しているため、今回は北壁部分の調査は実施できなかった。また、近現代の溝が縦横に走り、竹林であったことから根も多く入り込んでおり、遺構確認面は台地上面の遺構と比べるとやや低い。

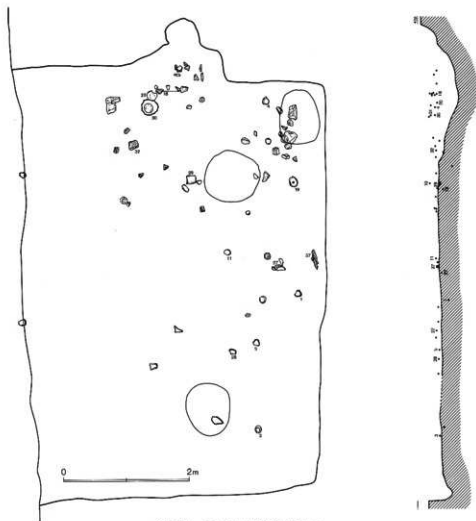
主軸方向はN-104°-Eを指し、規模は東西6.55m、南北は約5mが確認できたが、柱穴の位置からはほぼ方形を呈すると考えられる。深さは最も深い部分で20cmである。床面は平坦な貼床で、南壁から中央部にかけて堅緻な部分が広がり、小範囲で薄い粘土の堆積が2カ所で見られる。壁溝は南東コーナーでは途切れており、ここに長径85cm、短径60cmの楕円形をした浅い貯蔵穴があり、凝灰岩と礫が床面側の壁際から出土している。主柱穴は南東と南西コーナーに沿って2穴確認されたが、おそらく四隅に沿って穿たれているものであろう。柱穴の規模は直径80cm、深さ60cm程と大型である。



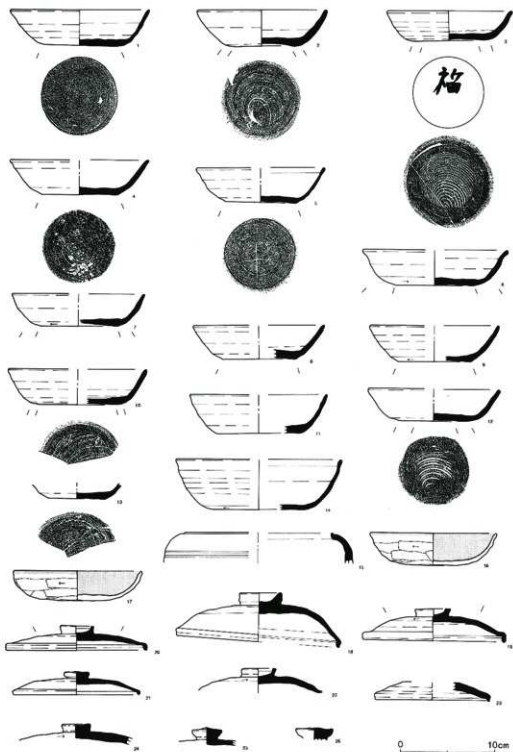
第122図 35号住居跡カマド

カマドは東壁に構築されており、焚口幅90cm、全長170cmで、主な構築材は白褐色土と明褐色粘土である。袖部は住居の壁にまで大きく張り出して貼られており、燃焼部は床面から20cm掘り込まれ、煙道に向かって緩やかに立ち上がる。火床面と内壁は焼土化し、天井部は崩落しており残存していない。貼床下の調査によって、両袖部の外側で深さ約1mのピットが検出され、規模からはこれらは柱穴と思われ、位置からはカマドの構築に関わる施設の一部であろう。

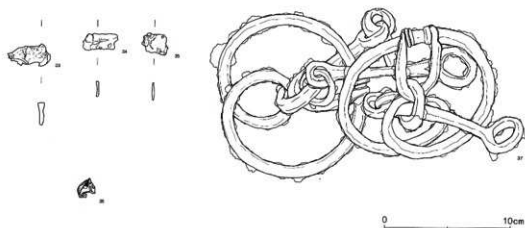
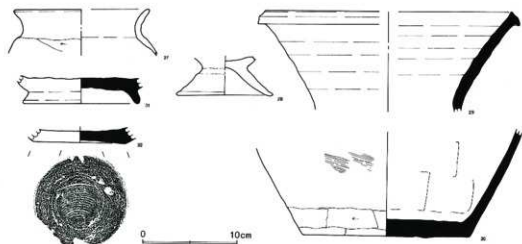
出土遺物は多く、特に床面やカマドなど本住居に伴う遺物が多い。個体識別では土師器は坏2・台付甕2個体だけで、須恵器の占める割合が非常に高い。須恵器は坏22・高台坏1・椀2・蓋9・甕2・壺1・無頸壺1と佐波理模倣の小片などがある。3は床面出土の墨書土器で、『福』の字が底部外面に書かれている。16と17は内面全面と口縁部外面を赤彩した同形態の土師器坏である。37は、南壁直下で検出された完形の轡である。出土位置は壁溝が途切れた部分で、ここの床面に粘土を貼って平坦にならし、この上に折り畳まれたような状態で出土している。鏽はあるが保存状態は良好である。出土状況からは本住居に伴うものであろう。



第123図 35号住居跡遺物分布図

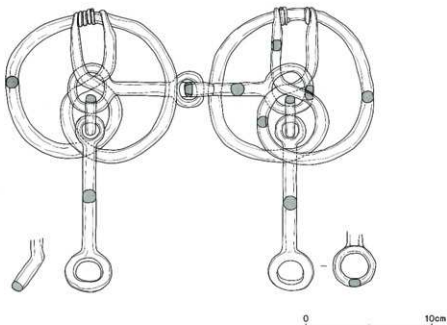


第124圖 35号住居跡出土遺物 (1)



第125図 35号住居跡出土遺物（2）

轡は出土時点では、最大幅24.5cm、縦13cmで、重さは754.6gである。鏡板を中心に引手と銜を疊むように折り込まれており、出土状態も流れ込みや廃棄されたというより、置かれたような状態であった。下面の粘土も狭い範囲に敷かれており、轡を置く場所として設定されたものであろう。錆は部分的に付着しているが、全体的に状況は良好で、連結部などの各部の構造を観察することができる。鏡板は8字状になり、8字の交差部分に引手と銜を連結している。これを展開したものが126図である。



第126図 35号住居跡出土馬具

35号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.6)	3.8	8.1	DEH		6	60%	RA、床
2	坏	13.5	3.8	6.9	DEH	II	5	97%	RBb、カマド床下、底部糸切り痕有
3	坏	13.0	3.2	7.6	DEH	III	6	95%	RBb、床、底部外面墨書有
4	坏	(14.7)	3.7	7.9	DEFH	III	4	50%	RA、床下
5	坏	(13.4)	3.7	(7.6)	DEH	II	5	50%	RA、寛記号
6	坏	(15.4)	3.8	8.2	EFH	III	6	50%	LA、床下
7	坏	(14.0)	3.5	(8.0)	DE	III	7	25%	R、床、軟弱で磨滅
8	坏	(13.8)	3.6	(7.8)	DE	III	6	25%	RA、下層、厚手、軟弱、鳩山以外
9	坏	(13.6)	3.9	(13.7)	EH	I	6	25%	R、床下
10	坏	(14.5)	3.8	(8.0)	EH	I	9	30%	R、下層、糸切り離し
11	坏	(14.4)	4.1	(9.0)	EH	III	7	15%	床
12	坏	(13.8)	3.4	7.4	DEH	III	7	底部	糸切り後手持ち篋削り
13	坏			(5.8)	DE	I	8	底部	RB、床、篋記号
14	椀	(17.4)	5.3	(10.0)	EH	I	5	25%	R、下層
15	無須壺	(15.6)			EH	I	5	口縁	下層
16	坏	13.4	3.4		CFH	I	3	60%	赤彩、床
17	坏	13.4	3.1		CFH	I	3	80%	赤彩、下層
18	蓋	17.1	5.2		DEH	I	5	80%	カマド、壺んでいる
19	蓋	14.9	3.4		DEH	II	7	98%	L、床下
20	蓋	2.6	14.8		DEH	II	7	100%	R、カマド
21	蓋	13.2			CDEH	II	5	20%	R、下層
22	蓋				DEH	II	5	60%	R、床
23	蓋	(12.0)			EFGH	I	5	30%	床下
24	蓋				EH	I	7	15%	R、下層

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
25	蓋				DEH	II	5	つまみ	床
26	蓋				EH	III	6	つまみ	床下
27	台付甕	(14.4)			ACEF	II	4	口 縁	床直
28	台付甕			10.2	A~CEF	II	4	台 部	床
29	甕	(26.0)			CGH		10	口 縁	床
30	甕			17.8	EH	II	9	底 部	カマド
31	高台付			12.2	DEH	III	7	台 部	下層、軟弱、磨滅
32	壺			9.6	ADEH	III	7	底 部	R、床



35号住居跡と遺物出土状況

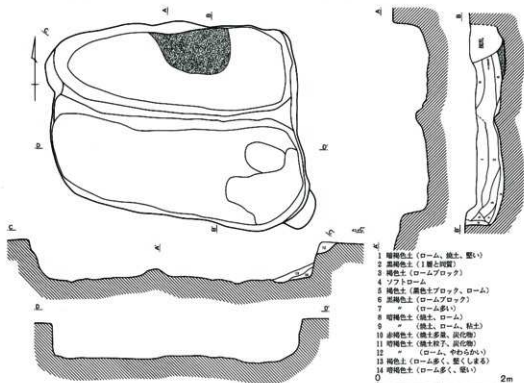
36号住居跡

3号井戸の東、35号住居跡の南に位置し、南には接するようにして2号溝が東西に走っている。調査以前は杉の並木の太木の下になっており、太い根が縦横に入り込んで、遺物が出土していたので遺構の存在が分かったがプランは確認できなかった。根を除去しながら調査を進めると、プランは不整形でカマドも明確でなく、床面には間仕切状の凸堤が確認できた。

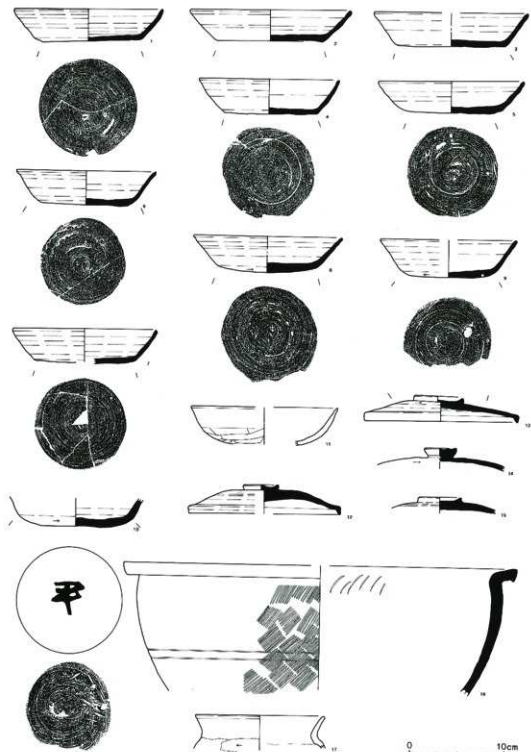
プランは隅の丸い台形を呈し、東西4m、南北3m、長軸方向はほぼ東西を指し、深さは50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、オーバーハングする部分も観察できる。床面はハードロームで中央部に東西に走る、高さ10～15cmの間仕切状の高まりがある。間仕切の南側の東コーナーにはロームを貼ったような堅緻な層が広がり、その直上の壁は半円形に崩れている。北壁のほぼ中央には焼土の堆積が確認でき、当初はカマドと考えていたが、杉の木の下であり詳細な観察は不可能であった。遺物もこの周辺を中心に出土しているが、焼土は二次的の堆積のようにぼそぼそしており、現状ではカマドと断定することはできない。

ここでは本遺構を住居跡として扱っているが、形態や構造から一般の竪穴住居跡とは様相が異なり、位置的にも馬具を出土した住居や井戸に隣接しており、これらと関連する特殊な遺構であると考えられる。あるいは馬の飼育に関わる施設とも想定することができる。

遺物は間仕切の北側の覆土中を中心に出土しており、須恵器は坏20・碗1・蓋4・鉢1と甕の小片で、土師器は坏1・甕2個体である。また、10の底部外面には『平』の墨書がある。



第127図 36号住居跡



第128图 36号住居跡出土遺物 (1)



第129図 36号住居跡出土遺物(2)

36号住居跡出土土器観察表

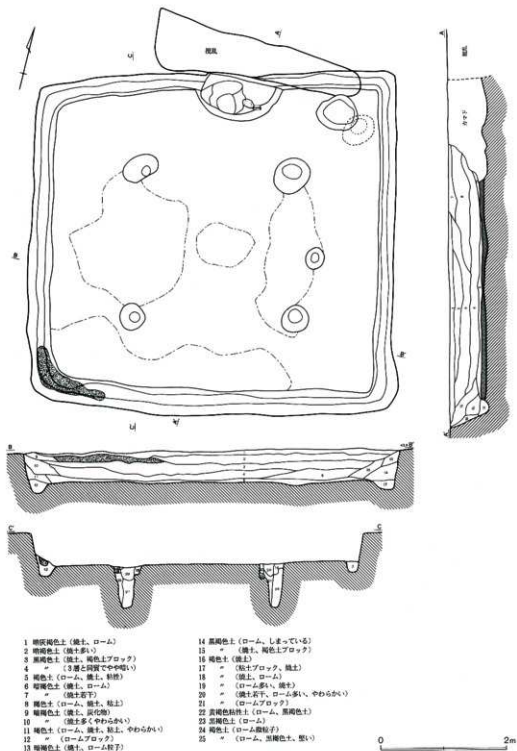
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	調	残存	出土位置・その他
1	坏	15.85	3.9	10.5	A~EH	I	5	98%	RA、上層
2	坏	17.2	3.2	11.15	ABDEFH	I	5	50%	RA、上層
3	坏	(16.4)	3.5	11.6	BDEH	I	7	50%	R
4	坏	14.8	3.7	9.9	BEH	I	5	100%	RA、上層、カマド
5	坏	15.5	3.2	9.3	BDEH	III	7	92%	RA
6	坏	14.3	3.6	9.2	BDEH	II	6	100%	RA、カマド
7	坏	15.4	3.6	(10.6)	ABDEH	II	6	70%	RA
8	坏	15.8	3.8	10.6	B~EH	II	6	60%	RA、回転窓切り離し
9	坏	(14.5)	4.0	9.9	BDEH	II	6	40%	RA、覆土中
10	坏			11.3	ABCEFH	III	1	底部	RA、墨書「平」
11	坏	(15.6)			ACDE	III	4	50%	RA、口縁部内外面、口辺部内面横ナデ、 体部外面寛削り
12	蓋	(16.1)	3.1		BDEH	I	5	70%	R、上層
13	蓋	(16.4)	3.1		BDEH	I	7	84%	R
14	蓋				BEH	I	5	つまみ	R
15	蓋				ABDEH	I	5	つまみ	R、上層
16	鉢	(42.4)	(13.5)		BDEH	I	7	口縁	胴上半部外面平行叩き目、胴上半部内面 当て具痕有、上層
17	台付甕	15.8	(3.6)		ACEF	I	4	口縁	口縁部横ナデ
18	甕	(28.0)	(5.7)		ACDE	III	4	口縁	口縁部外面横ナデ
19	甕		(4.2)	5.0	ACDEF	I	4	底部	

37号住居跡

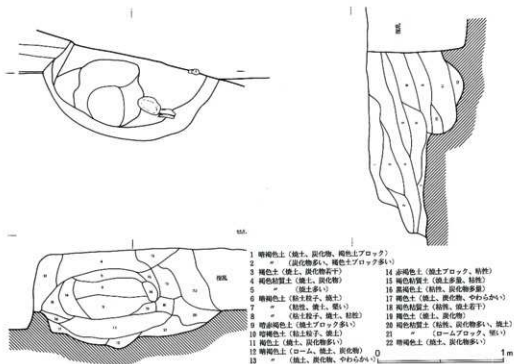
低位の平坦面のA F-14グリッドに位置し、主軸方向はN-14°-Wを指し、規模は南北5.4m、東西5.8m、深さ50cmを測る。カマドは北壁中央に構築されているが、攪乱により壁外の大部分を削平されている。遺構確認時から各コーナーに沿って焼土と粘土が広がっており、焼土の一部は壁溝にまで入り込んでいる。壁溝は全周し、深さ60~70cmの柱穴が各コーナーに穿たれており、北東コーナーには貯蔵穴がある。床面はほぼ平坦な貼床で、堅緻な部分が点在している。

カマドは攪乱によって煙道部などが破壊され、規模については不明であり、さらに本来的にも遺存状態が悪く、大部分が流出している。14・15層が袖部となり、東側には袖の先端に石が置かれている。9・11層が燃焼部に相当するが、残存状態は良くない。煙道部は削平されているが、現存部からはかなり外側に張り出す大型のカマドとなろう。

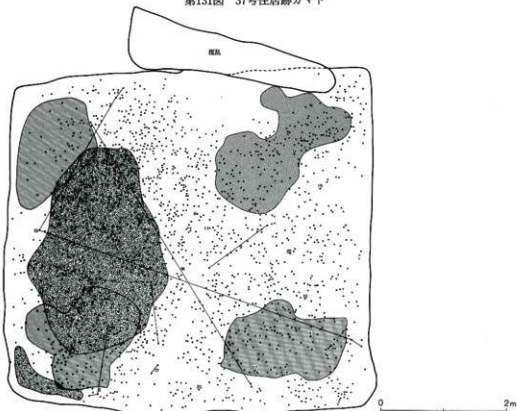
遺物は総計2286点とかなり多く出土しているが、小片が多く復元可能個体は破片数と比べると少ない。個体識別では須恵器坏4、返りのある蓋1・壺1、土師器は坏8・椀1・皿4・甕7・台付甕1個体である。他に鎌、手鎌、釘各1と刀子2点、22は鉄製紡錘車で、軸孔は方形である。



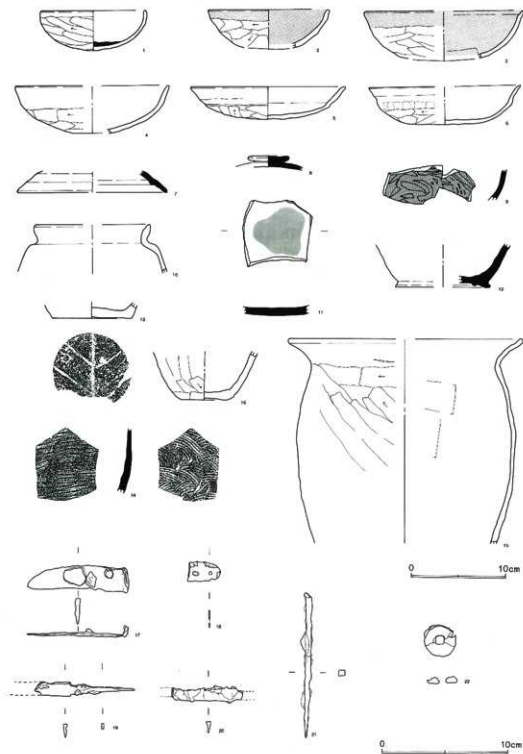
第130図 37号住居跡



第131図 37号住居跡カマド



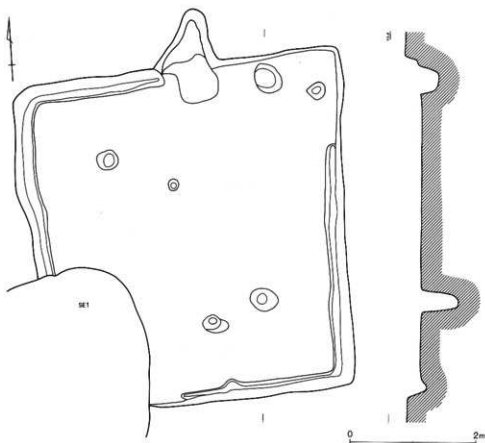
第132図 37号住居跡遺物分布図



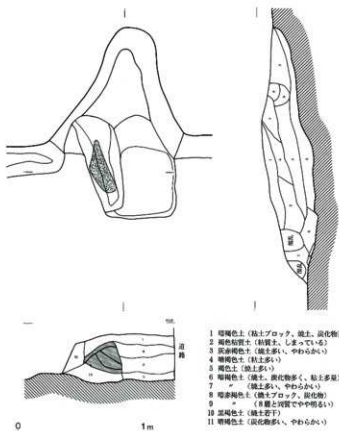
第133图 37号住居跡出土遺物

37号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	11.2	4.2	1.0	BEF	II	4	60%	カマド、内面底部に油煙痕
2	坏	(12.8)	(4.2)		CDE	II	3	30%	床
3	坏	(16.9)	(5.3)		DEF	I	3	15%	床
4	坏	(16.2)	(5.1)		ADEF	III	4	25%	上層
5	皿	16.4	3.5	3.4	ACDEF	II	4	50%	上層
6	皿	(16.0)	(4.0)	6.0	ADE	I	4	30%	指頭圧痕
7	蓋				EH	II	9	小 片	上層、かえり有
8	蓋				DEH	II	5	つまみ	R、下層
9	坏				CH	I	9		下層、内黒
10	壺	(12.4)			EH	II	2	小 片	上層
11	碗				DEGH	I	6		転用碗、床、墨痕なし
12	壺			(10.0)	DEG	I	5		灰釉、上層
13	甕			8.4	ACE		4	底 部	木葉底、床
14	甕	(12.4)				II	4		床
15	甕				CDE	I	3		貯蔵穴
16	甕			4.2	ACEF	II	4	底 部	床



第134図 38号住居跡



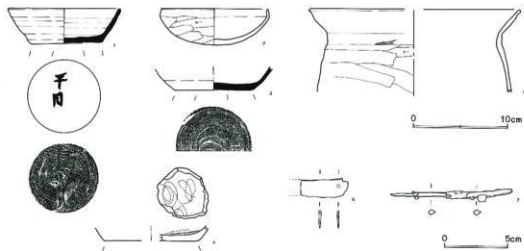
第135図 38号住居跡カマド

38号住居跡

35号・37号住居跡の間に並ぶように位置し、1号井戸に南西コーナーを切られている。東半分は私道が南北に走っているため、年度を異にして2度に分割して調査を実施せざるを得なかった。この私道の両側には直径1m程の杉並木があり、根による攪乱が深くまで及んでいた。主軸方向はほぼ南北を指し、規模は南北5.4m、東西5.1m、深さは30cmを測る。床面は平坦であるが堅緻な部分はなく、全体的に軟弱である。壁溝は北東コーナー部を除いて巡り、柱穴は揃っていないがコーナーに沿って2穴あり、他に小ピットが3穴点在する。南壁下の小ピットは深さ55cmで、出入口に関わる施設であろう。カマド脇には直径40cmの貯蔵穴がある。

カマドは北壁のほぼ中央に構築されているが、半分道路下であったことと木の根でかなり崩れていた。東側の袖は残っていなかったが、西の袖部は褐色粘土を使用し、3層が燃焼部から煙道へとつづく基本土層であろう。

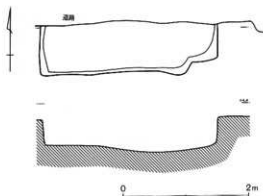
遺物は本住居の範囲内ではかなりの量が出土しているが、1号井戸と重複していたため、これに属する遺物が多くを占めている。個体識別では、須恵器片12・甕の口縁部破片1・土師器片1・甕2個体である。1は「平□」の墨書土器であり、胎土から産地は鳩山窯跡群以であろう。4は暗文のある環で、6は床面出土の手鎌である。



第136図 38号住居跡出土遺物

38号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.0	3.7	7.7	BDE	III	7	75%	LBb、床、非鳩山産、墨書「平目」
2	坏	11.6	3.8		B~FH	I	4	100%	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、床
3	坏			8.4	ABDEH	I	6	底部	RBa
4	坏			(10.0)	F	I	4	底部	暗文
5	甕	(22.4)			ACDEF	III	3	口縁	口縁部横ナデ、胴上半部外面寛削り



第137図 39号住居跡

39号住居跡

38号住居跡の北に接するように位置し、ほぼ全体が私道と市道下にかかっていたため、今回調査できたのは南壁を含む一部分であった。床面を検出したのは僅かな範囲であったので、本竪穴住居跡の規模や構造については不明な点が多い。出土遺物が多いが大部分が小片で、4は石製紡錘車である。

39号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	22.0			ABDE	I	6	10%	R
2	坏			11.0	ABDEH	I	6	底部 50%	RA
3	甕	13.2			ABDEF	I	3	口縁	口縁部横ナデ、胴上半部外面寛削り



第138図 39号住居跡出土遺物

40号住居跡

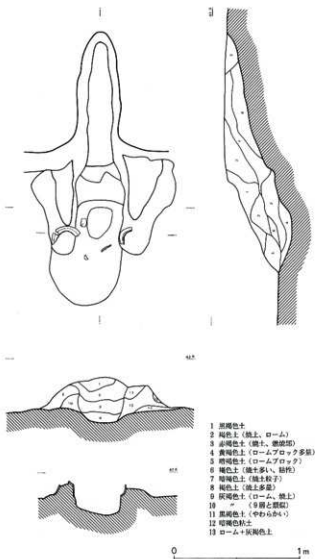
本住居跡から南の小畔川までは、近世～現代の溝や掘乱が多く、人家や墓地も存在したため遺構の状態は悪く、遺構確認面そのものも水分を多く含んだ変質したロームとなっている。標高も44mと小畔川に向かって若干低くなる。

主軸方向はN-65°-Eを指し、規模は一辺6.4mの方形を呈し、深さは40cmを測る。床面はほぼ平坦で、特に堅緻な面はない。壁溝は一部掘乱があるが北壁中央で途切れている。柱穴は各コーナーに沿って深さ約40cmの主柱穴が4本穿たれており、貯蔵穴はない。

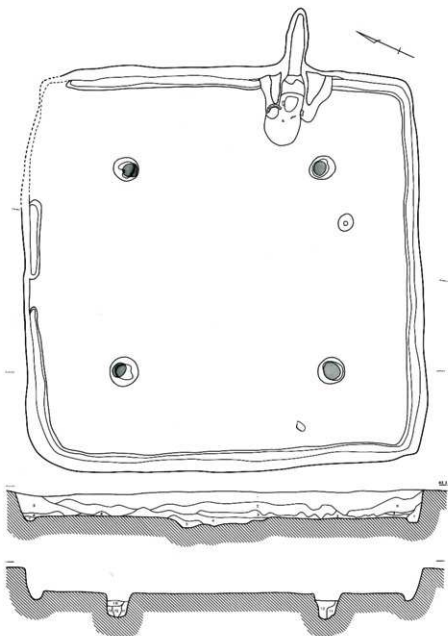
カマドは東壁中央やや南よりに構築されており、焚口幅35cm、全長180cmで、煙道は壁外に90cm突出している。袖は褐色粘土を使用し、先端には土師器甕が伏せて置かれている。

3・4層が燃焼部となり、煙道部へは緩やかにつながる。

遺物は約350点出土しており、個体識別では須恵器坏1・高坏2・椀1蓋1・甕の胴部破片が2～3個体分と土師器は坏2・甕2個体である。10は釘、11は板状の鉄製品である。



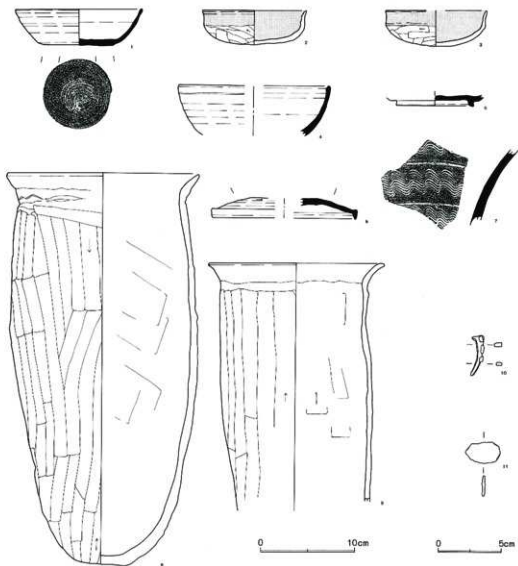
第139図 40号住居跡カマド



- 1 黒褐色土 (ロームブロック、炭化物)
- 2 * (ソフトローム多量)
- 3 * (ローム多量)
- 4 * (粘土)
- 5 暗黄褐色土 (ロームブロック)
- 6 * (ソフトローム)
- 7 黒褐色土 (ロームブロック)
- 8 * (粘土、ロームブロック)
- 9 暗黄褐色土 (3層に剥離)
- 10 灰色土 (ローム)
- 11 灰褐色土 (ローム多量)
- 12 黒色土 (ローム多く、やわらかい)

0 2m

第140図 40号住居跡



第141図 40号住居跡出土遺物

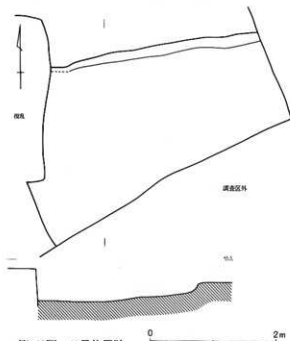
40号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.4	3.8	7.5	DEH	I	6	60%	RBb、床直上
2	坏	11.0	3.65		ABDE	III	4	70%	口縁部横ナデ、体部外面篦削り、赤彩、剝離、下層
3	坏	(10.8)	3.8		A~EH	II	3	60%	口縁部横ナデ、体部外面篦削り、赤彩
4	碗	(16.2)	(5.3)		EGH	I	5	口縁	床直上
5	高台坏			(8.2)	BDEH	I	6	底部	床直上
6	蓋	(15.5)			DEFH	I	6	20%	R、床直上
7	甕				BDEG	I	5	口辺部	口辺部外面櫛描三波状文、口辺部内面自然釉、上層
8	甕	20.3	42.6	4.5	A~E	II	4	80%	床
9	甕	18.9			ADEF	II	4	60%	カマド、口縁部横ナデ、胴部外面・内面篦削り

41号住居跡

調査区最南端の AR-22グリッドに位置し、すぐ南には小畔川が東流している。カマドを含めた大部分が調査区外にあり西側は近世のK3号溝によって破壊されている。このため北壁の一部が確認できただけで、規模や構造については不明である。現存部では壁溝はなく、床面は中央部がやや窪んでおり、深さは30cmを測る。

出土遺物は少なく、土師器皿1と壺の底部だけで、須恵器は1点もない。



第142図 41号住居跡



第143図 41号住居跡出土遺物

41号住居跡出土土器観察表

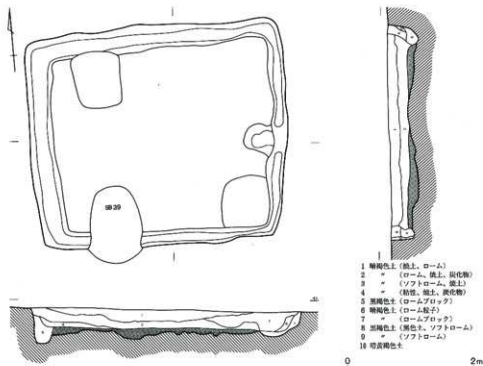
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺			6.4	ADEF	III	4	底部	

42号住居跡

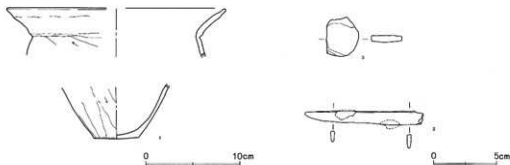
小畔川に向かって緩やかに傾斜し、標高43mの AP-19グリッドに位置し、近現代の溝やピットによって激しく攪乱されている。また、39号掘立柱建物跡と重複しているが、攪乱と確認面の不安定さから明確な新旧関係は把握できなかったが、掘立柱建物跡の柱穴上に本住居の貼床と考えられる硬化面が確認できている。

主軸方向はN-89°-Eを指し、規模は東西4.1m、南北3.5m、深さ30cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁溝は太い部分で幅30cmあり全周する。カマドは東壁中央に構築されているが、焚口の掘り込みと若干の焼土の分布が確認できただけで、他の部分は削平・流出で形跡も無い。

出土遺物は少なく、個体識別で須恵器は蓋1・甕2個体分の破片、土師器は坏3個体分の破片と甕3個体であるが、小片が多く実測個体は少ない。他に中世の青磁が1点出土している。2は茎部を欠損した刀子で、関部には小さな段を持つ。3は板状の鉄製品。



第144図 42号住居跡



第145図 42号住居跡出土遺物

42号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(23.2)		4.8	ACEF	II	4	20%	

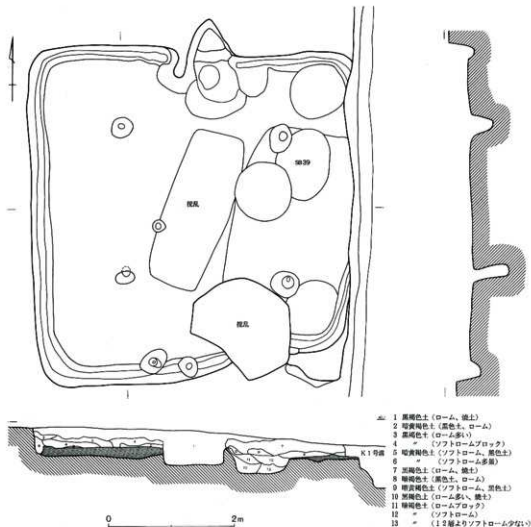
43号住居跡

42号住居跡の北に隣接しており、東側を近世のK2号溝に切れ、床面には近現代の墓墳や攪乱が重なるようにして掘られている。また、39号掘立柱建物跡と重複しており、これも攪乱などで新旧関係は明瞭ではないが、貼床は確認されていないことから掘立柱建物跡が新しいと考えられる。

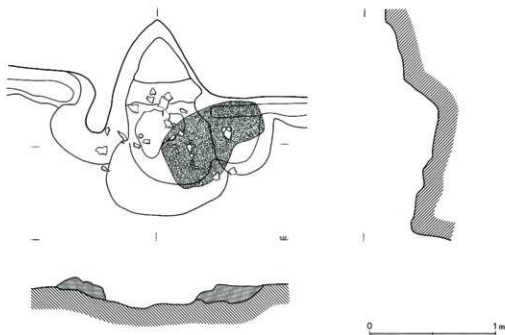
主軸方向はほぼ真北を指し、規模は一辺5.4mの方形で、深さは最深部で30cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁溝が確認できた部分では全周している。深さ30～50cm程の主柱穴が各コーナーに沿って4本穿たれており、北東コーナーに深さ7cmの浅い貯蔵穴がある。

カマドは北壁中央部に構築されており、部分的に削平されているが、焚口幅70cm、全長120cmを測り、燃焼部から煙道部へ急角度で立ち上がる。

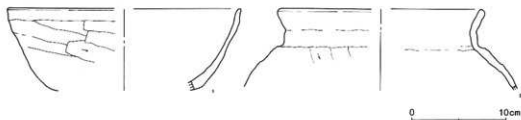
遺物は268点出土しているが、大部分が小破片で須恵器は甕の破片1点だけである。個体識別可能な土師器は、坏小片と鉢1・甕1個体分である。



第146図 43号住居跡



第147図 43号住居跡カマド



第148図 43号住居跡出土遺物

43号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(24.8)			A~F	III	1	10%	床、pit
2	甕	(22.0)			AEF	II	3	15%	pit



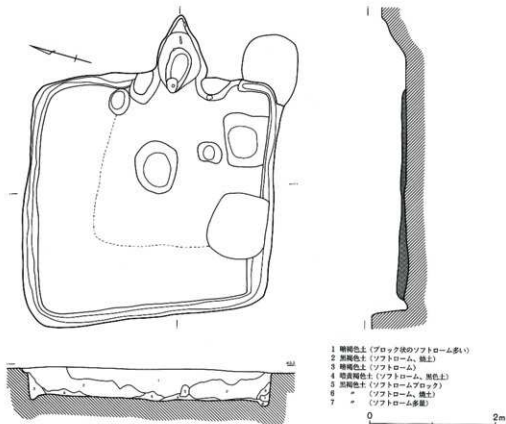
南西から見た43号住居跡

44号住居跡

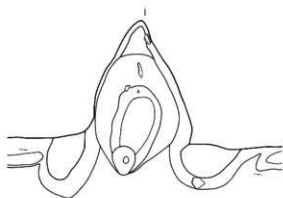
43号住居跡の北西コーナーに接するように構築され、39号掘立柱建物跡と重複しており、本住居の方が古い。主軸方向はN-80°-Eを指し、規模は東西4m、南北3.9m、深さは50cmを測る。床面はソフトロームに黒色土を含んだ貼床で、ほぼ平坦でカマド前面を中心に堅緻な部分が広がっている。壁溝はカマドを除いて巡り、主柱穴は無い。貯蔵穴は南東コーナーのやや西寄りにあり、深さは15cmで、他に深さ15cm程のピットがカマド前にある。

カマドは東壁中央南よりに構築され、焚口幅70cm、全長130cmである。袖部には暗褐色土を使用し、全体的に焼土、粘土の検出は少なかった。

出土遺物は135点であるが、小破片が多く実測個体は少ない。個体識別では須恵器は6点で、坏2個体分の小片・甕2片、土師器は皿3・甕2個体である。

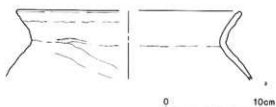
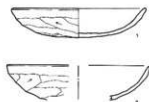


第149図 44号住居跡



第150図 44号住居跡カマド

- 1 暗褐色土（ローム、粘土、炭化物）
- 2 “（ソフトローム、粘土多い）
- 3 暗黄褐色土（ソフトローム、炭土）
- 4 暗赤褐色土（粘土多量）
- 5 暗黄褐色土（ソフトローム、粘土）
- 6 暗褐色土（ソフトローム、粘土）
- 7 “（粘土ブロック）
- 8 暗黄褐色土（ソフトローム、粘土）
- 9 暗褐色土（ローム粒多量）
- 10 暗黄褐色土（ソフトローム、黒色土）
- 11 “（ソフトローム、粘土）
- 12 ソフトローム
- 13 暗褐色土（ソフトローム多量）
- 14 “（黒色土、ソフトローム）



第151図 44号住居跡出土遺物

44号住居跡出土土器観察表

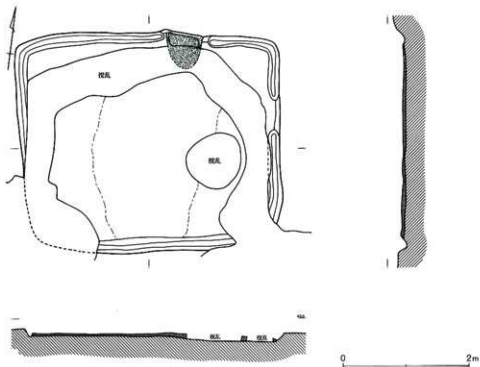
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	灰成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	11.4	3.1		AEFH	II	4	75%	pit
2	坏	(15.2)			CEFH	I	4	12%	
3	甕	(22.8)			A~F		4	口縁	カマド

45号住居跡

調査区南端に近いAP-21グリッドに位置し、攪乱により上面は大部分が削平され、壁溝の存在によって規模が確認できた。主軸方向はN-13°-Wを指し、南北3.5m、東西4.1mを測る。床面は平坦な貼床で、中央部に堅緻な部分が残存し、壁溝は東壁の一部で途切れる。

カマドは北壁中央やや東よりに構築されているが、攪乱によりほぼ破壊されており、焼土の分布と壁溝が途切れたことにより位置を推定することができた程度である。

遺物は20点で、須恵器の甕・蓋の破片とカワラケが出土している。



第152図 45号住居跡



第153図 45号住居跡出土遺物

45号住居跡出土土器観察表

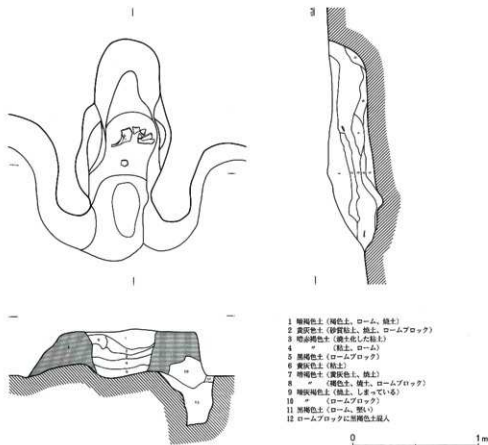
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕				BE	I	5	破片	覆土

46号住居跡

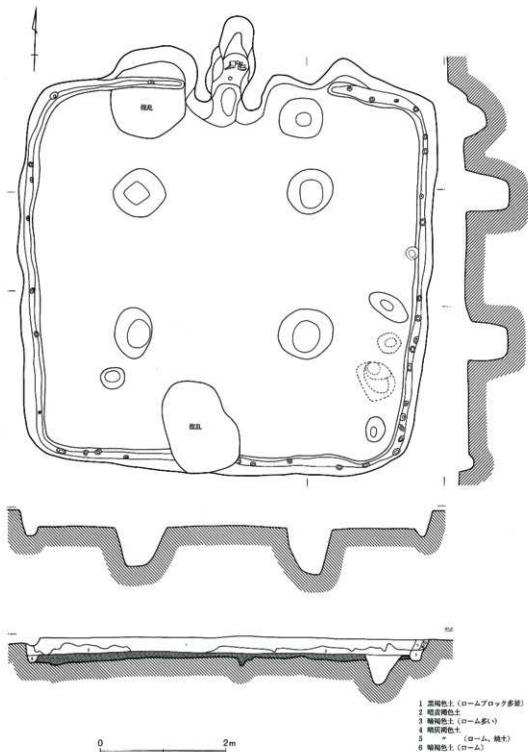
調査区南端の AO・AP・16・17グリッドに位置し、人家の跡地であるため攪乱が激しい。主軸方向はほぼ真北を指し、規模は南北6.3m、東西6.6mで、深さは30cmである。床面は平坦な貼床で、壁溝はカマド周辺を除いて巡り、小ピットが穿たれている。主柱穴はコーナーに沿って配置され、深さは60~70cm程である。貯蔵穴はカマドの東に接するようにしてあり、他に東壁に沿って規模や形態の不揃いなピットが並んでいる。

カマドは北壁中央部に構築されており、焚口幅50cm、全長170cmで、灰褐色粘土を構築材としている。3層が天井部崩落層で、4層・5層が燃焼部に相当するであろう。また、東袖の下部に深さ40cm程のピットが穿たれている。

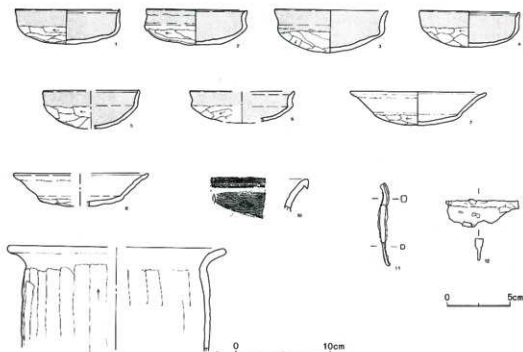
住居の規模が大きい割には遺物は少なく、総計158点で須恵器は甕の小片1点だけである。個体識別では、土師器環7・皿2・甕1個体である。赤彩された土師器環が多い。11は皿部を欠損した釘で、曲がっている。12は不明鉄製品。



第154図 46号住居跡カマド



第155図 46号住居跡



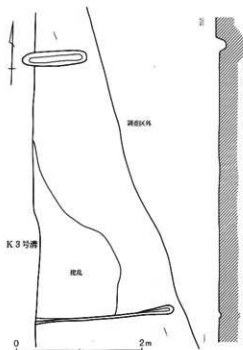
第156図 46号住居跡出土遺物

46号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.0	3.7		ADE	II	3	98%	赤彩、壁溝
2	坏	10.7	3.7		DE	II	3	90%	赤彩、床
3	坏	12.0	4.5		ADE	II	4	90%	赤彩
4	坏	10.6	3.8		ADE	II	3	95%	赤彩、床
5	坏	(10.2)	(4.0)		ADE	II	3	25%	赤彩、壁溝
6	坏	(11.0)	(3.4)		ADE	II	3	15%	赤彩、床
7	皿	14.3	3.5		ACDE	II	4	40%	床
8	皿	(14.3)			ADEH	II	2	25%	床
9	甕	(23.1)			ADEF	II	4	口縁	カマド
10	甕				EH	I	5	口縁	床



46号住居跡遺物出土状況



第157図 47号住居跡

47号住居跡

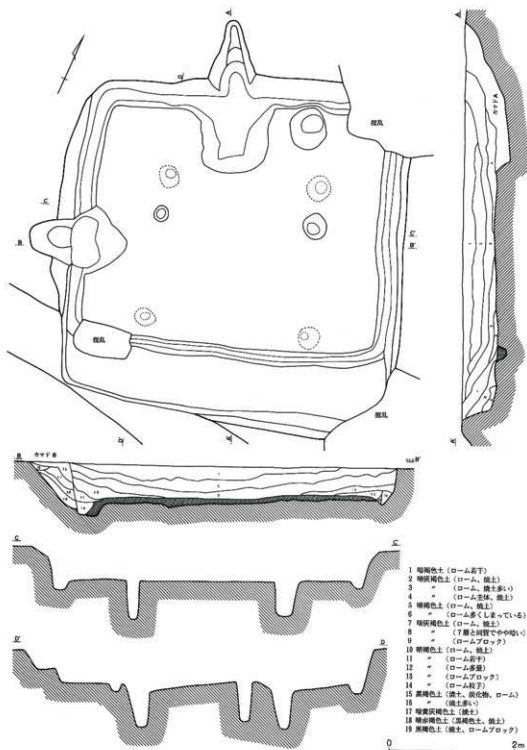
調査区最南端の41号住居跡の北に位置し、西側は近世のK3号溝に破壊され、東は調査区外に及ぶため、カマドを含めた規模や構造は不明である。床面も削平されており、壁溝のみが住居の形跡を止めている。壁溝間の南北の距離は4.3mを測り、出土遺物はない。

48号住居跡

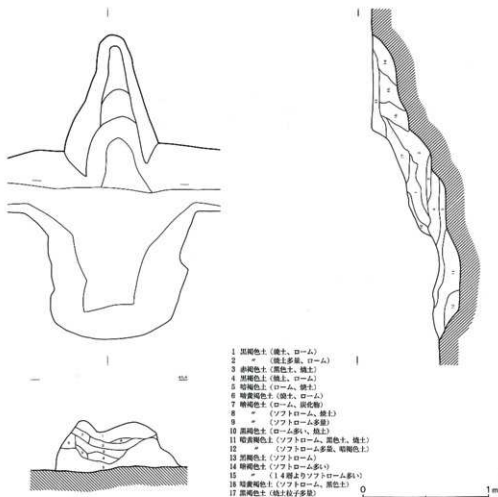
AK・AL-19グリッドに位置し、直上に人家が建てられていたために、部分的に深い攪乱によって破壊されている。なお、本住居は拡張住居で、カマドBを持つ住居を南に約1m拡張しているものである。拡張前の規模は東西5.6m、南北4.3mで、拡張後は東西は同じで南北5.4mを測り、深さは50cmである。主軸方向は拡張後はN-22°-Wで拡張以前はこれより90°西を指す。床面は平坦な貼床で、拡張によって床面レベルは変わっていない。壁溝は拡張前は全周し、拡張後は南壁には造っていないが、カマドBを切って走っている。主柱穴はピット3と4が拡張後の床面で確認でき、1・2・5・6が貼床下で確認できたものである。貯蔵穴はカマドAの東脇にあり、深さは27cmで焼土が堆積していた。

カマドは拡張前のBが西壁にあり、自然堆積による埋没後にカマドAを持つ住居の壁と壁溝によってカットされている。このため、単なる拡張ではなく、やや時間幅をもって新たな住居が構築されたと考えることもできる。現存部からは、カマドBの全長は156cmで焚口幅は50cm程であろう。カマドAは北壁中央に構築され、全長240cmと大型であるが、構造部材の大部分が流出して袖部などは残存していない。5・6層が燃焼部で、煙道は段を持って立ち上がる。

遺物は262点出土しており、個体識別では、須恵器環1・蓋1・甕1、土師器環7・甕3個体である。6は油煙の付着した小型で特異な形態の坏である。13は木質の残存した刀子で、刃部を欠損している。14の刀子は、両端を欠損しており、刃部の一部である。15は板状の鉄製品。



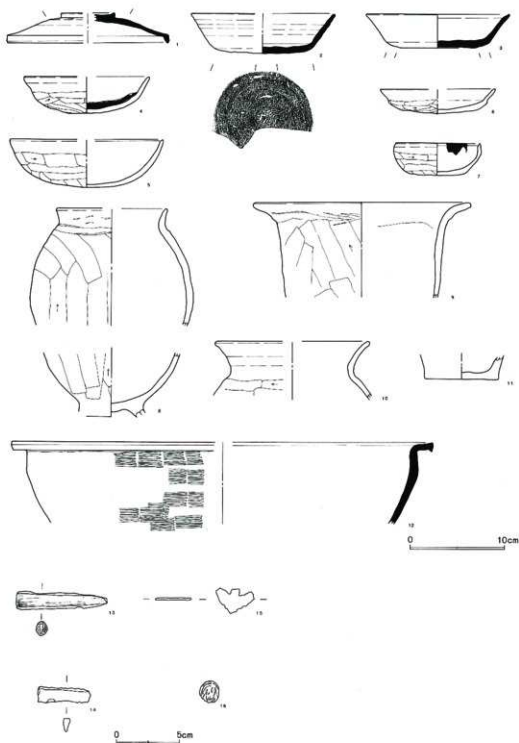
第158図 48号住居跡



第159図 48号住居跡カマド

48号住居跡出土土器観察表

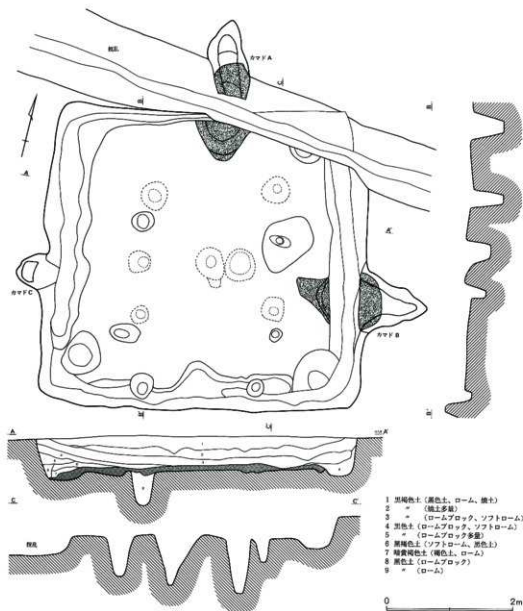
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(17.2)	(3.2)		ABE	I	5	15%	R、床
2	坏	(15.2)	(4.2)	10.4	ABE	I	7	40%	LBa、床
3	坏	(15.4)	(3.6)	8.8	DEH	II	6	25%	LA、上層
4	坏	(13.3)	(3.9)		ACE	I	2	70%	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、上層
5	坏	(16.3)	5.1		ABDEH	II	3	60%	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、床
6	皿	(12.2)	(2.6)		ACDE	I	1	25%	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、上層
7	坏	8.9	3.4	5.6	ABDE	I	4	85%	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、床
8	甕	(11.8)			ABDE	III	4	口縁部底	口縁部横ナデ、胴上半部寛削り、下層
9	甕	23.0			A~E	III	4	口縁	口縁部横ナデ、胴上半部外面寛削り
10	甕	(16.4)			ACDE	I	4	口縁	口縁部横ナデ、胴上半部外面寛削り、床
11	甕		7.6		BCEF	III	4	底部	下層
12	深鉢	(45.0)	(8.6)		BDEH	II	7	口縁	体部外面平行叩き目、下層



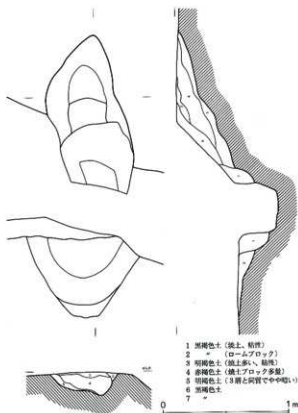
第160图 48号住居跡出土遺物

49号住居跡

下位平坦面のほぼ中央部の AK・AL-15グリッドに位置し、攪乱や調査前に上面を走っていた農道によって状態は良くない。主軸方向はN-12°-Wを指し、規模は南北4.8m、東西5.1mを測り、深さは45cmである。なお、本住居は南壁を除く3壁にカマドを有し、最も新しいものが北壁のカマドAで、BとCの新旧関係は壁溝の堆積状態からBが最も古いと考えられる。床面は平坦な貼床で、床面中央の10cm程の落ち込みと4穴の柱穴上には床面が貼ってある。壁溝はほぼ全周し、カマドBとCもこれに切られている。貯蔵穴は北東、南東、南西の各コーナーにあり、カマドAに伴う北東コー



第161図 49号住居跡



第162図 49号住居跡カマドA

褐色土で床面から10cm程の高さが残存している。

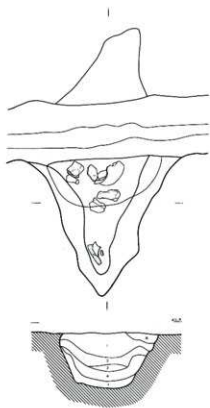
遺物は399点出土しているが、攪乱で出土位置が特定できないものが多い。個体識別では、須恵器は坏1・高台坏1・蓋1・壺1と甕の小片で、土師器は坏2・碗1・皿4・甕7・壺3個体である。また、床面下から刀子と石製紡錘車が出土している。



49号住居跡カマドB

ナーの貯蔵穴は攪乱で明瞭でないが、他は深さ約30cmである。柱穴は床面下を含めて11穴確認でき、カマドAに伴う最終段階の柱穴は実線の4穴と南壁下の2穴で、カマドC正面のピットは主柱穴にはならないであろう。

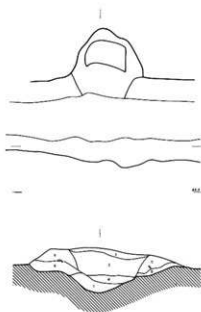
カマドAは北壁中央に構築され、大部分を攪乱に破壊されているが、全長220cm、最大幅90cmを測る。各部の構造は不明である。カマドBは東壁南よりに構築され、全長210cm、最大幅100cmを測るが、壁に沿って削平されて壁と壁溝が造られている。カマドCは西壁の南よりにあり、煙道が壁外に突出している他は流出で不明瞭であるが、Bのように壁に切られておらず、壁溝上にカマド覆土が流れ込んでいる。このことから、カマドCを移設する際には完全には削平せず、形態が判る程度に残っていたのであろう。袖部は黄



- 1 褐色土 (焼土)
- 2 赤褐色土 (焼土、炭化物)
- 3 暗褐色土 (焼土多い)
- 4 赤褐色土 (焼土ブロック)
- 5 褐色土 (しまりあり)
- 6 黒褐色土 (焼土、粘性)
- 7 * (焼土、しまりあり)
- 8 * (焼土、粘性)

0 1m

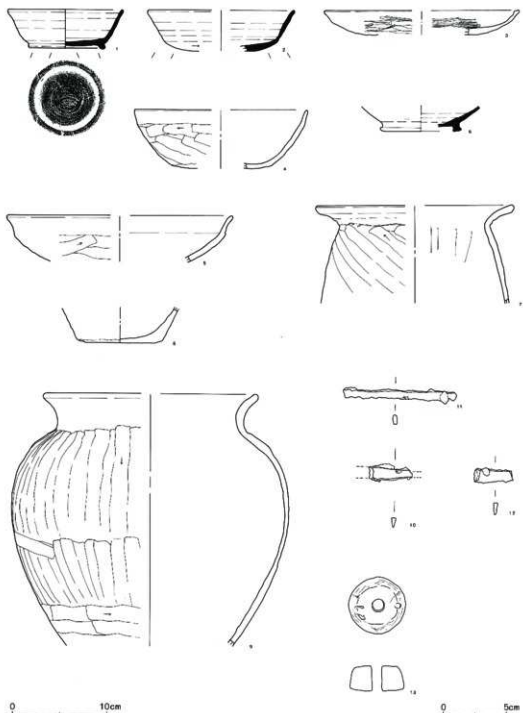
第163図 49号住居跡カマド B



- 1 黒褐色土 (焼土、粘性)
- 2 赤褐色土 (焼土ブロック)
- 3 暗赤褐色土 (焼土、黒色土)
- 4 赤褐色土 (焼土、粘土、ブロック)
- 5 赤褐色土 (ローム、焼土)
- 6 黒褐色土 (焼土、黒色土)
- 7 * (ロームブロック)
- 8 黒色土 (焼土、粘性)

0 1m

第164図 49号住居跡カマド C



第165图 49号住居跡出土遺物

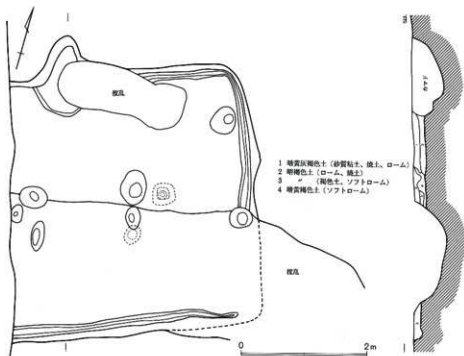
49号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	成 色	調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	高台坏	12.2	4.1	7.6	DEGH	I	5	65%	下層
2	坏	(15.6)	(4.4)		DEH	II	6	40%	床、カマドC
3	皿	(20.6)			ABE	II	2	15%	内面荒磨き、床
4	椀	(18.4)			ADE	II	4	20%	下層、カマド
5	皿	(24.0)			AEH		4	10%	内面油痕、下層
6	瓶			(8.6)	DG	I	6	底 部	鳩山窯以外、下層
7	甕	(21.0)			ACEF	II	4	口 縁	下層、カマドB
8	甕				ADE	III	4	底 部	表面剥離
9	甕	(23.0)			ACE	III	4	30%	カマドB、磨滅している

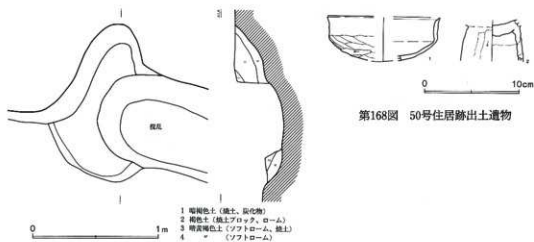
50号住居跡

49号住居跡の南5mのAM-15グリッドに位置し、西壁は調査区外におよび、また攪乱によってかなりの部分が破壊されている。規模は南北4.2mで東西は不明、深さは約20cm、主軸方向はN-20°-Wを指す。床面は平坦なロームで、壁溝が巡っている。柱穴は貼床下から2穴検出されている他に7穴あるが、住居周辺にも同様の規模のピットが多数点在しており、確実に伴うかは疑問である。位置的にも四隅にある主柱穴にはならない。

カマドは北壁に構築されており、全長125cmを測るが、攪乱によって各部の構造などは不明である。遺物は19点出土しているが、須恵器はない。個体識別では坏1・甕1・台付甕1個体である。



第166図 50号住居跡

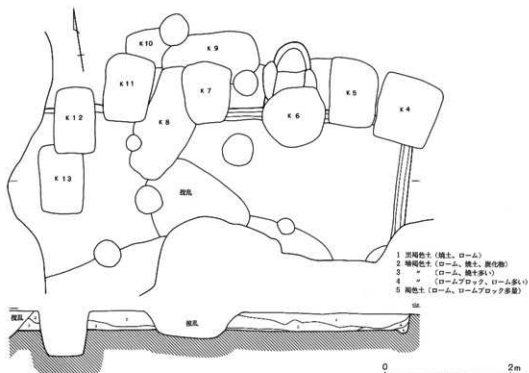


第168図 50号住居跡出土遺物

第167図 50号住居跡カマド

50号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	(11.9)	(4.7)		ACDE	II	2	30%	覆土
2	高 坏				ACDE	II	3		胎土中砂粒多い、覆土



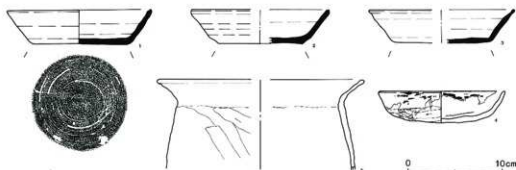
第169図 51号住居跡

51号住居跡

AP-18グリッドに位置するが、北壁と東壁およびカマドの一部が確認できただけで、南側と西側の大部分を攪乱により削平されている。さらに北壁に沿って近世土壌墓群が密集しており、カマドを含めた規模や構造は不明である。主軸方向はN-12°-Eを指し、北壁長は6m程である。北壁の西側で壁溝が見られなくなる。現存部の床面はほぼ平坦である。

カマドは北壁の東よりに構築されているが、近世土壌墓によって破壊され、煙道の一部が確認できずに過ぎない。

出土遺物の個体識別は、須恵器坏3と土師器坏2・皿1・甕1個体である。



第170図 51号住居跡出土遺物

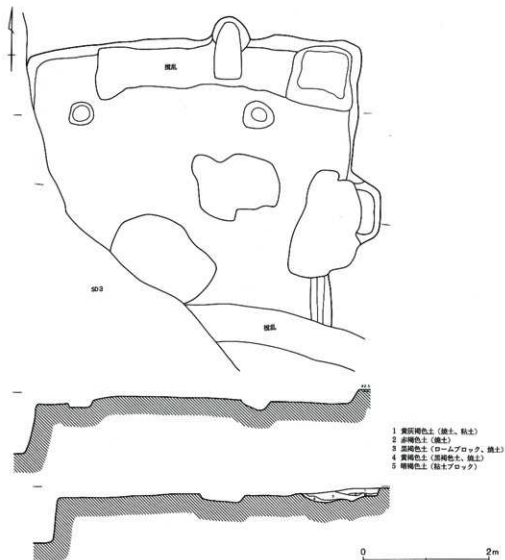
51号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	15.3	3.6	10.0	ADEH	II	5	80%	RA
2	坏	(14.7)	(3.6)	(8.9)	DEFH	II	4	35%	R
3	坏	(15.4)	(3.5)	(9.8)	DEF	II	5	40%	R
4	坏	13.4	3.4		A~F	II	4	95%	内・外面油煙痕
5	甕	(22.0)			A~F	III	4		

52号住居跡

調査区最南端のAQ-19グリッドに位置し、西壁を攪乱に破壊され、南側は傾斜面のため壁の立ち上がりは確認できない。この他に土壌状の攪乱が住居内に点在し、南には3号溝が走るが新旧関係は不明である。主軸方向はほぼ北を指し、北壁長は5.4mを測る。床面は平坦で、東壁の一部で壁溝が検出できた。カマドは北壁中央東よりと、東壁に構築されているが、両者共大部分を攪乱に破壊されて煙道の一部が残っている程度で、規模や構造については観察できない。貯蔵穴は北東コーナーにあり、深さは約25cmである。北壁の東西コーナーに沿って柱穴があるが、深さは20cm程と浅い。

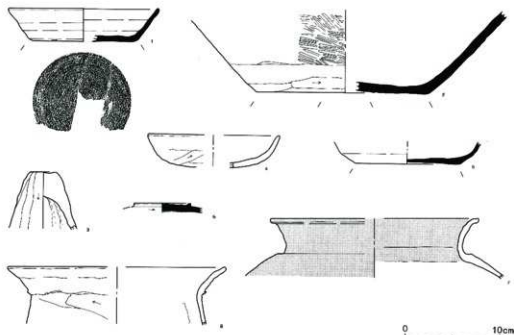
遺物は須恵器坏2・甕2個体と、土師器破片が10点及び土製支脚が出土している。



第171図 52号住居跡

52号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	16.0	3.5	(10.6)	DEH	II	5	60%	外面灰褐色 LA
2	甕			(8.8)	DEH	II	6	底部	
3	支脚				LE	III	4	30%	
4	坏	(14.0)			AEF	II	7	10%	
5	坏			(11.0)	DEH	I	5	底部	
6	蓋				DEH	II	5	10%	
7	甕	(22.0)			CEH	I	3	口縁	
8	甕	(23.2)			A~E	II	7	口縁	



第172図 52号住居跡出土遺物

53号住居跡

AL・M-16・17グリッドに位置する大型住居であるが、近世の井戸や民家の跡地であったためその基礎などで部分的に大きく破壊されている。壁溝や貼床の状態から三回の拡張の痕跡が見られ、最終的には一辺14m近くあり、この時期の住居跡としては最大級の規模となっている。しかし、主軸とカマドや貯蔵穴の位置に変更はなく、同心円状に拡張されている。主軸方向はN-5°-Eを指している。以下、古い順に第一段階から第四段階までに分けて記載する。

第一段階 南北10m、東西9.8m、深さは最深部で70cmを測る。本段階以後は第一段階を埋めて貼床としており、埋土にはロームと暗褐色土が使用されている。壁溝は全周する。本段階に伴う柱穴はなく、貯蔵穴は北東コーナーのやや西よりにあり、深さは40cmである。カマドは貯蔵穴の西隣にあったと考えられるが、攪乱によってその痕跡はない。蓋受のある須恵器坏6は貼床内から出土しており、本集落では最も古い遺物である。

第二段階 第一段階の壁溝分だけ拡張したような状況で、規模やプランには大きな変化はなく、柱穴もない。貯蔵穴も第一段階と共用で、カマドについても同様な状況である。

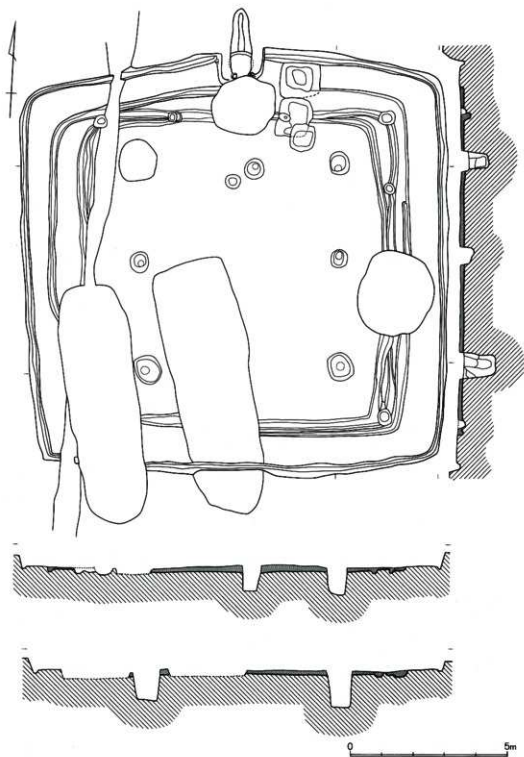
第三段階 南壁は第二段階とほぼ共通しているが、西壁では90cm、北壁では70cm、東壁では50cmほど拡張しており、北東コーナーでは壁溝をもっていない。貯蔵穴は第一・二段階と重複しながらやや北側に造られており、規模も大きくなっている。柱穴は第四段階と共用している可能性もあるが、断定はできない。カマドは貯蔵穴の西に構築されていたと考えられるが、攪乱により確認はできない。しかし、第四段階のカマドがすぐ北にあり、全時期を通じてこれと同軸上にあったことが想定できる。

第四段階 第三段階の各壁を70cmから1.2m拡張しており、プランは方形を呈し、1辺13.8mを測る。深さは最深部で55cmで、壁溝は全周する。覆土の堆積は攪乱などで不安定であるが、自然堆積の状態を示しており、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、壁際ではブロック状に細かな堆積が観察できる。柱穴は各壁に沿って6穴確認されたが、攪乱による破壊を考慮すると2×2間の8本主柱穴になるものと考えられる。柱間距離は2.7mから3.5mで床面精査の段階で直径20cm前後の柱痕が確認できた。深さは浅いもので50cm、最大の柱穴では1.2mを測り、大型の掘立柱建物跡の柱穴のようである。貯蔵穴は北壁の東よりの壁際にあり、方形プランで深さは50cmである。貯蔵穴の覆土中には焼土、炭化物が多く含まれており、18の皿や26の土師器甕等が出土している。カマドは北壁中央の貯蔵穴西脇に構築されており、焚口は攪乱に破壊されている。全長は2.4m、焚口幅約40cmを測り、煙道部は長さ1.5m、幅50cmで直線的に延びている。袖部は灰色粘土を主体にし、先端内側に土師器甕を倒立させて芯としている。燃焼空間は直径約80cmと大きく、袖部内側はオーバースタックして、25cmほど緩やかに立ち上がって煙道部へ至る。

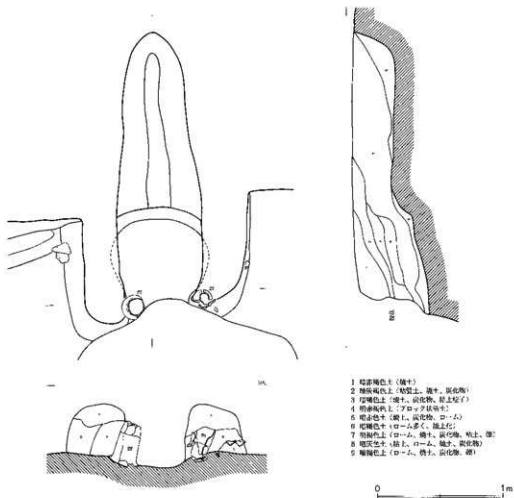
遺物の出土総数は783点であるが、前述したように近世遺構との重複や攪乱によって出土状態は不安定であった。時期的には七世紀代が中心であるので土師器が9割ほどを占め、土器の実測個体は41個体である。土師器供膳器には7の盤状坏、8に代表される赤彩した比企型坏、17～19の丸底の皿がある。個体識別では、土師器坏15・皿5・甕20・甕6と須恵器坏8・蓋2・甕3・甕1個体である。他に鉄器、石製品などがあり、42は柳葉式の鎌、43・44は刀子、45～48は釘である。50は鋤先か。51は大型の鎌の一部であろうか。53は部分的に鉄分が付着した砂岩系の石で、砧(かなとこ)となる台石であろう。



53号住居跡低高度からの航空写真



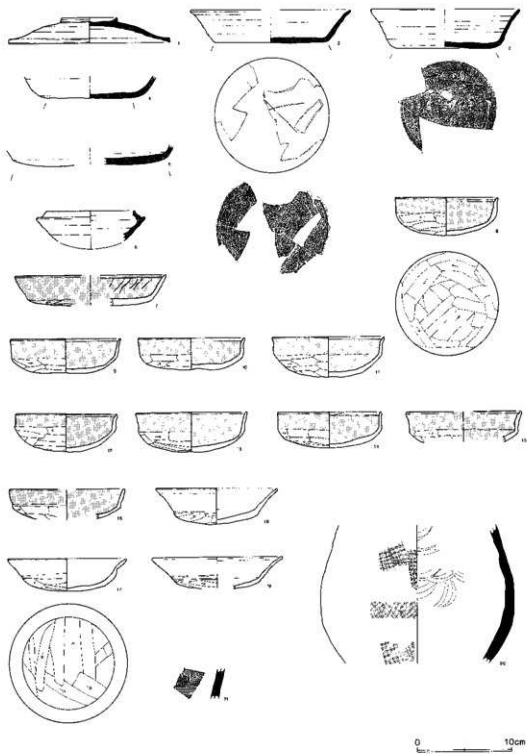
第173図 53号住居跡(1/120)



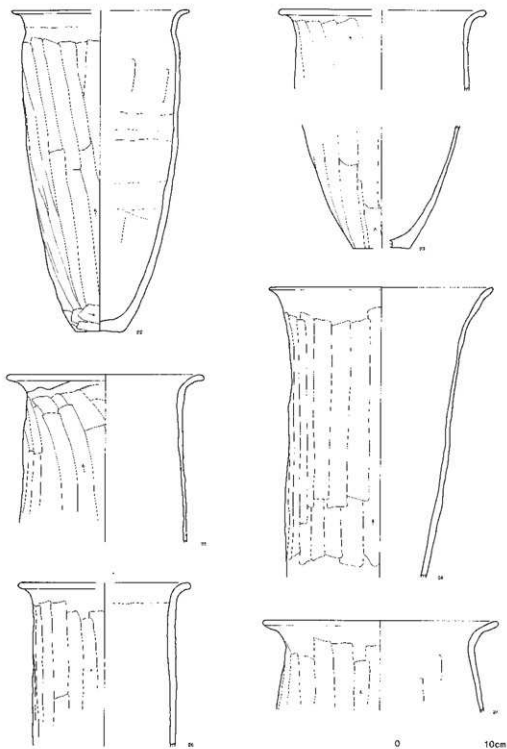
第174図 53号住居跡カマド



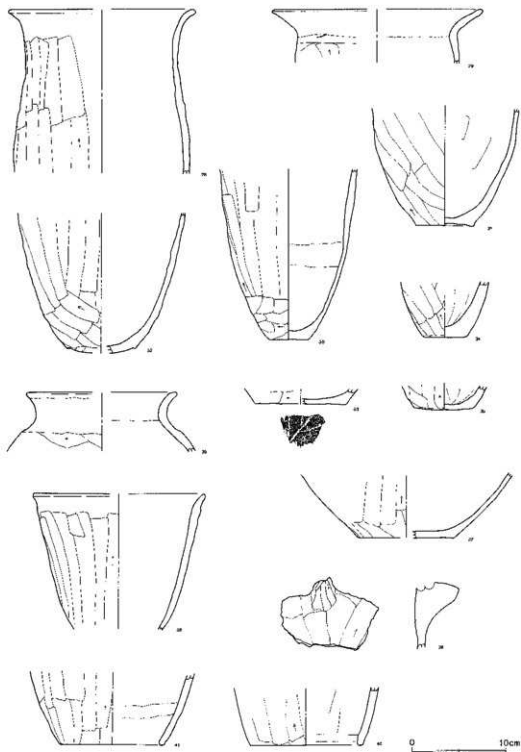
53号住居跡
カマド土層断面



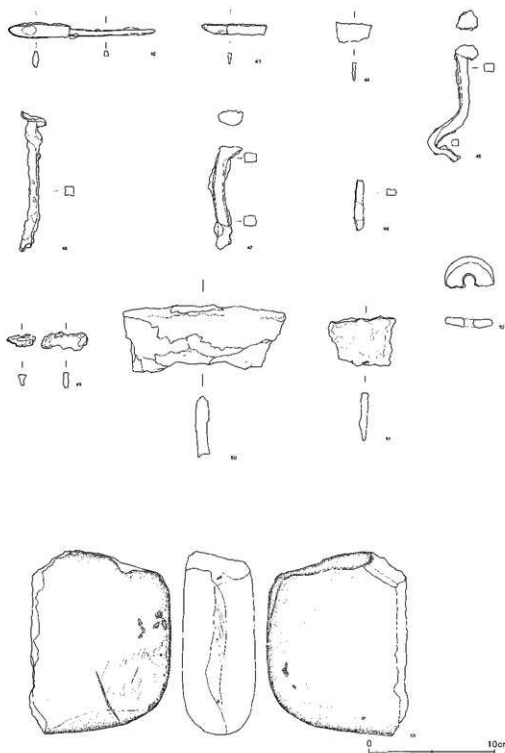
第175图 53号住居跡出土遺物 (1)



第176图 53号住居跡出土遺物(2)



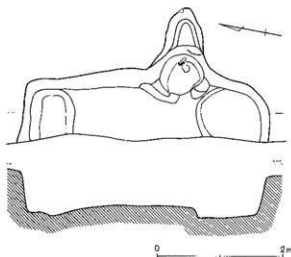
第177图 53号住居跡出土遺物（3）



第178圖 53号住居跡出土遺物（4）

53号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 上	施 色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	蓋	(17.4)			ABDEH	II	40%	覆土、R
2	坏	(17.1)	3.5	12.2	ABEF	II	25%	覆土、施記号、RA
3	坏	(15.9)	4.2	(10.4)	BDEH	II	40%	覆土、RA
4	坏			9.1	CDEH	III	7	底 部 覆土、RA
5	坏			(16.6)	ABDEH	II	5	底 部 覆土
6	坏	(9.3)			ADE	II	8	口 縁 貼床下、(須恵器)
7	盤状坏	(16.2)			BDEF	II	3	10%
8	坏	11.0	4.0		ABDEF	II	4	100%
9	坏	11.8	3.6		ABDE	II	4	95%
10	坏	11.4	3.3		ABDE	II	4	90%
11	坏	11.9	4.3		BCDE	II	1	65%
12	坏	10.8	4.0		ABDEF	II	4	70%
13	坏	11.9	4.1		A~E	II	1	60%
14	坏	11.1	3.8		ABDEF	II	4	40%
15	坏	(12.3)			ABDE	II	4	口 縁 覆土、赤彩
16	坏	(12.3)			ABDFH	III	4	口 縁 床、赤彩
17	皿	12.6	3.4		ABDE	II	4	85%
18	皿	13.0	3.8		ACDEH	II	2	80%
19	皿	14.0	3.4		BDE	II	9	40%
20	甕				ABDE	II	7	割 部 床、外面平行格子叩き目、内面当て具痕
21	甕				ADEF	I	7	破 片 床
22	甕	(18.8)	34.0		ADE	II	4	65%
23-1	甕	(22.0)			A~E	II	4	口 縁 覆土
23-2	甕			(3.0)	A~E	II	4	底 部 覆土
24	甕	23.7			ABDE	II	4	75%
25	甕	21.0			ADE	III	1	45%
26	甕	(18.4)			BDE	II	3	口 縁 貯蔵穴
27	甕	25.0			A~E、II	III	1	口 縁 床
28	甕	(19.9)			A~E	III	4	口 縁 カマド
29	甕	(22.3)			ACDE	II	4	口 縁 カマド
30	甕			4.0	ADE	II	4	底 部 床
31	甕			6.2	A~E	II	4	底 部 覆土
32	甕			7.2	ABDE	II	4	底 部 床
33	甕			(4.9)	A~F	II	4	底 部 木炭底
34	甕			4.8	A~F	II	4	底 部 覆土
35	甕			6.4	ACDEF	II	4	底 部 覆土
36	甕	(16.0)			A~E	I	4	口 縁 覆土
37	甕			(10.2)	ADE	II	4	底 部 覆土
38	甕	(18.4)			A~F	II	4	口 縁 貼床下
39	甕				ABD	II	4	取 手 覆土
40	甕			11.9	BCD	II	4	底 部 床
41	甕			11.0	ABDE	I	3	底 部 カマド



第179図 54号住居跡

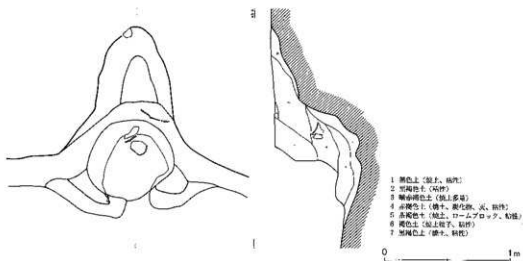
54号住居跡

AL-15グリッドに位置し、東には接するようにして49号住居跡が並んでいる。西側の大部分は調査区外に及んでいるため、カマドを含めた一部が調査できただけである。主軸方向はN-80°-Eを指し、東壁の長さは約4mである。床面は平坦で壁溝はなく、南北両コーナーに深さ10cm程の貯蔵穴がある。

カマドは東壁南よりに構築されており、全長150cm、最大幅130cmを測る。燃焼部から煙道へは急角度で立ち上がり、袖部は灰色粘土が僅かに壁際に残

存している程度である。

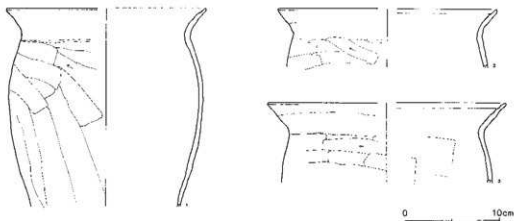
遺物はカマドから土師器甕など24点出土している。個体識別では、須恵器埴2・蓋1、土師器甕2点である。



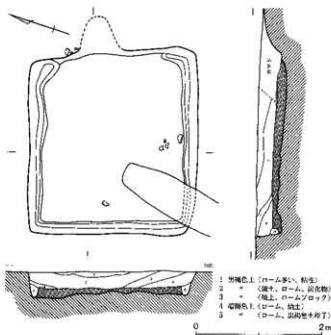
第180図 54号住居跡カマド

54号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	22.3			ACDE	II	4	胴部	カマド
2	甕	23.1			ACEF	II	4	口縁	
3	甕	(25.1)			ADFH	II	4	口縁	覆土



第181図 54号住居跡出土遺物



第182図 55号住居跡

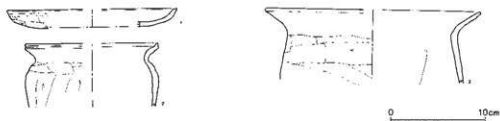
55号住居跡

AK-19に位置するが、攪乱によってカマドや壁の一部が破壊されている。規模は東西2.9m南北2.7mを測り、主軸方向はN-72°Eを指す。深さは約25cmで、東壁を除いて壁溝が巡っている。柱穴と貯蔵穴はない。床面はほぼ平坦な貼床で、ロームブロックと黒色土によって構成される。カマドは東壁に構築されていたと思われるが、攪乱によって全体が削平されているため位置を推定する以上の痕跡は残っていない。

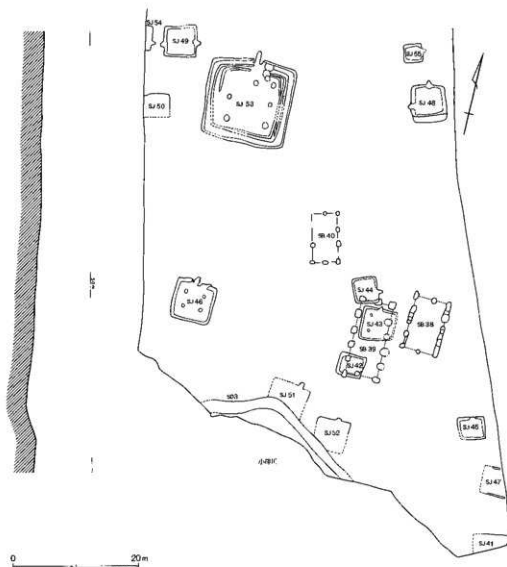
出土遺物は6点だけで、土師器皿1・甕2と須恵器破片4片である。

55号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	(18.0)			DEH	I	4	口縁	カマド
2	甕	(14.0)			ABCDE	III	2	口縁	
3	甕	(22.9)			CDEF	II	1	口縁	カマド



第183図 55号住居跡出土遺物

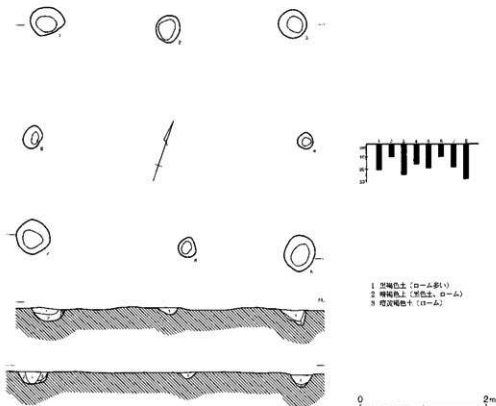


第184図 奈良時代遺構分布図 No.4

1号掘立柱建物跡

台地奥部のM-7・8グリッドに位置し、掘立柱建物跡としては最も北にある。規模は2×2間で、桁行4.45m、梁行3.9mを測り、主軸方向はN-76°-Wを指す。柱穴のプランは円形で、深さは10cmから25cmで、柱間距離は桁行2m、梁行1.8mである。

出土遺物はない。



第185図 1号掘立柱建物跡



台地上位面の掘立柱建物跡群（南から）

2号掘立柱建物跡

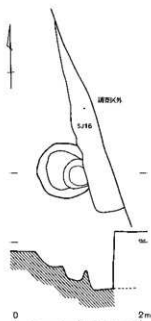
Q-12グリッドに位置し、最西端の柱穴1本だけが検出され、大部分は調査区外に及んでいる16号竪穴住居跡に東側の一部を切られている。周辺には本柱穴と同規模の土壌が点在するが、覆土の比較から、これらの土壌よりも近接する掘立柱建物跡と類似していたため、1本であっても掘立柱建物跡と認識したものである。

出土遺物はない。

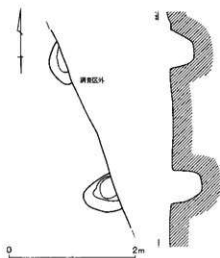
3号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡と並ぶようにして北に位置するが、大部分が東の調査区外に及ぶため確認できたのは2本の柱穴だけである。2本の柱穴自体も完掘できなかったので、プランも不明である。

出土遺物は、須恵器片3、土師器片17点でいずれも細片である。



第186図 2号掘立柱建物跡



第187図 3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡

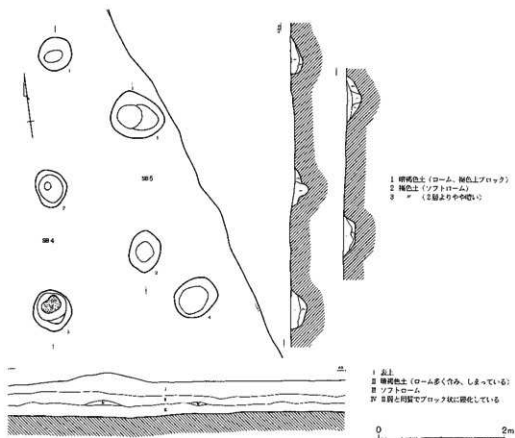
2号竪穴住居跡の東に平行するように並んでおり、東側は調査区外におよぶため、確認できたのは西側の柱穴列だけである。規模は西側が2間であるが、全体の大きさから3×2間あるいは2×2間程度となるだろう。5号掘立柱建物跡が並ぶように内側に重複しているが、柱穴どうしの重複はなく新旧関係は不明である。

出土遺物はない。

5号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡の東に平行して並んでいるが、大部分が調査区外におよぶため、2本の柱穴を確認できただけである。なお、表土から覆土の観察ができた東断面を見ると、暗褐色土の硬化面が点在しており、掘立柱建物跡の範囲外には存在しないことから、この硬化面は床面であった可能性が高い。しかし、これが4号か5号掘立柱建物跡に伴うかは不明である。

出土遺物はない。

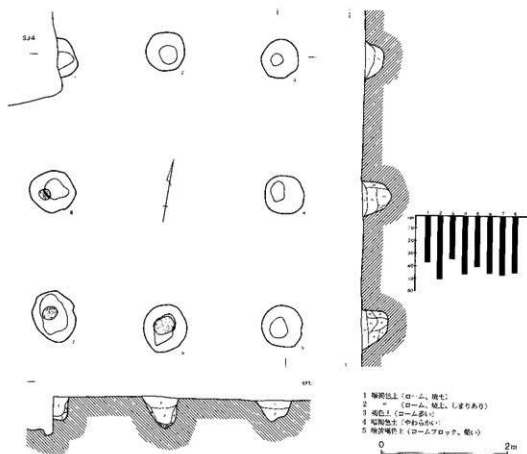


第188図 4・5号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡

北西端の柱穴が4号竪穴住居跡と重複し、主軸方向はN-8°-Wを指す。規模は2×2間で、桁行4.9m、梁行4.2mを測り、柱間距離は各々2m、1.8mである。各柱穴は直径60cm程の円形プランを呈し、深さは35～50cmで、P6～8で柱痕が確認できた。

遺物は、須恵器48点、土師器20点が出土しており、須恵器は坏類の小片が多い。



第189図 6号独立柱建物跡



第190図 6号独立柱建物跡出土遺物

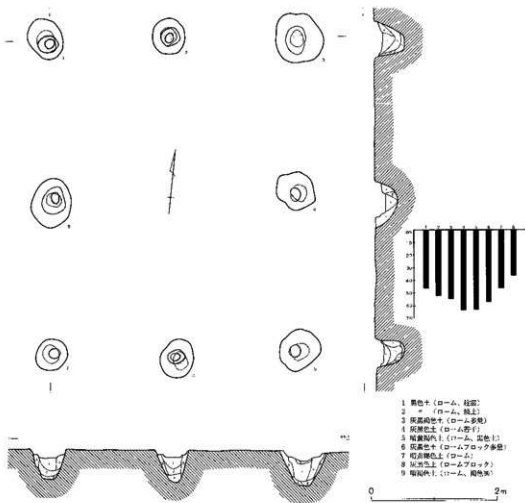
6号独立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	竈	(9.0)			EH	II	5	口縁	
2	甕				DEH	I	6		
3	蓋			(26.6)	ADEH	II	7	8%	

7号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡の南5mに主軸を描えるように並び、8号掘立柱建物跡とは大部分で重なっているが、柱穴自体の重複はないため新旧関係は不明である。規模は2×2間であるが長方形のプランを呈し、桁行5.6m、梁行4.6mを測る。主軸方向はN-6°-Wを指し、遺構確認時に全ての柱穴で柱痕が確認できた。柱間寸法は、桁行が2.5m、梁行が1.9mで、各柱穴の規模は直径60cm、深さ35～64cmである。

遺物は須恵器6点と土師器17点が出土しているが、柱穴内だけでなく柱穴に囲まれた内部からも出土しており、これらの土器が本掘立柱建物跡か8号掘立柱建物跡のどちらに帰属するかは不明であるが、掘立柱建物跡に伴う遺物と考えることができる。なお、小片であるので実測可能個体はない。

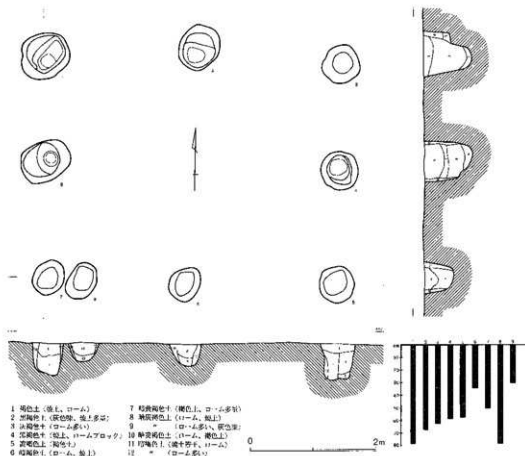


第191図 7号掘立柱建物跡

8号掘立柱建物跡

7号掘立柱建物跡と主軸を直行させるように重複しており、主軸方向はN-88°-Eを指す。規模は2×2間で、桁行5.4m、梁行4.1mを測る。各柱穴は円形プランを呈し、直径50cm～70cm程で深さは34cm～78cmである。柱穴9については、他の柱穴と覆土も異なり浅いことから、本掘立柱建物跡には伴わない可能性が高い。柱痕は確認できなかったが、これに相当すると思われる土層には焼土粒子が含まれている。

遺物は、土師器24片、須恵器18片が出土しているが、小片が多く図化できたのは2点である。



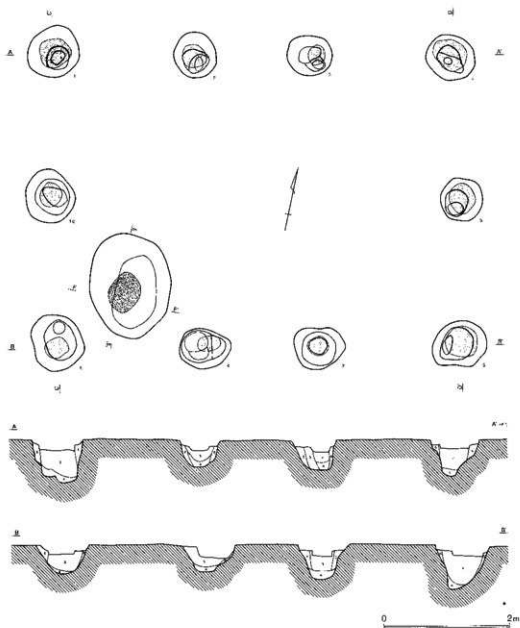
第192図 8号掘立柱建物跡



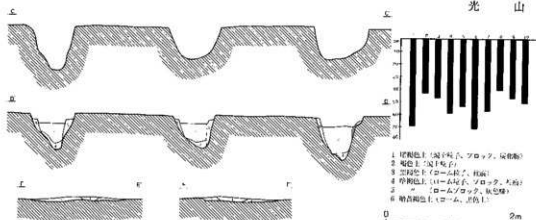
第193図 8号掘立柱建物跡出土遺物

8号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	胴高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕				EH	II	5		
2	甕				BEH	I	9		



第194図 9号掘立柱建物跡(1)



第195図 9号掘立柱建物跡(2)

9号掘立柱建物跡

15号竪穴住居跡の東、7・8号掘立柱建物跡の南に位置し、南側桁行は10号掘立柱建物跡と接するように並んでいる。主軸方向はN-78°-Eを指し、規模は3×2間で、桁行7.2m、梁行5.2mを測る。各柱穴は円形を呈し、直径60cm～90cm程で、深さは40cm～70cmである。遺構確認の段階で全ての柱穴で柱痕が検出でき、柱間距離は最大で2.4m、最短で1.8mを測る。

南西コーナー近くには、長径1.6m、短径1.3mの楕円形の浅い落ち込みがあり、中央部には焼土が堆積している。位置や覆土からも本掘立柱建物跡に伴うもので、構造的にも炉跡である可能性が高い。周囲の精査を行ったが、床面と考えられる硬化面は確認できなかった。しかし、炉の内部や柱穴内を含めて合計34点の土器が分布しており、地床炉を持った内土間式の住居を想定できる。



第196図 9号掘立柱建物跡出土遺物

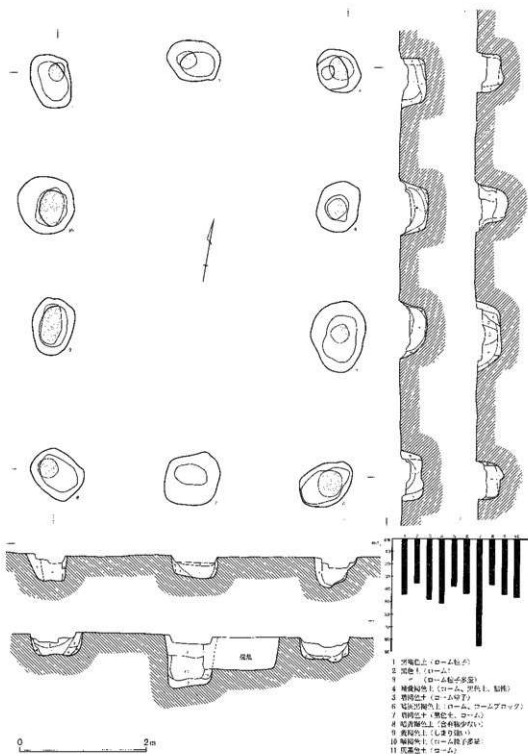
9号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施装	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(16.2)	(3.5)	(11)	EH	II	5	15%	

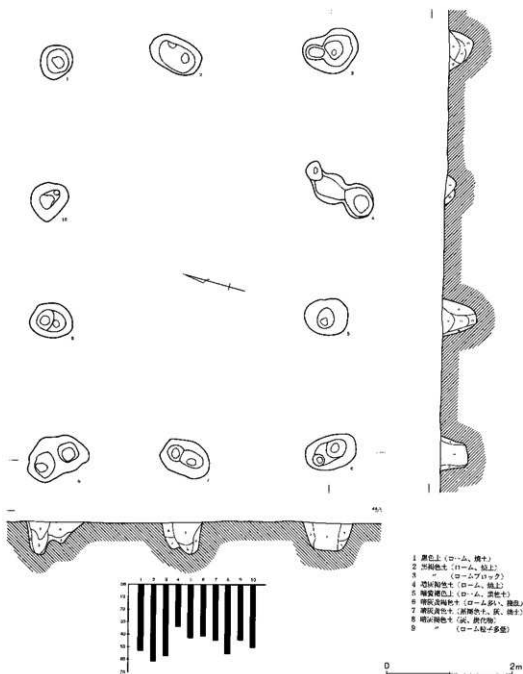
10号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡の南に接するように並び、西から南にかけては遺構の無い空間が広がる。主軸方向はN-11°-Eを指し、規模は3×2間で、桁行7.1m、梁行5.2mを測る。各柱穴のプランは楕円形を呈し、北東と南東、南西の3コーナーの柱穴は、八字型に内側を向いている。深さは40cm前後で、柱穴7だけが84cmと深い。遺構確認の段階で、部分的に攪乱を受けていた柱穴7以外は柱痕を検出でき、柱間距離はほぼ2mである。

出土遺物は、柱穴から土師器45片、須恵器15片で、建物内部から土師器14片、須恵器15片あり、他に小孔の穿たれた小札と思われる鉄片が柱穴から出土している。土器類は小破片であるため図化はできなかった。



第197図 10号掘立柱建物跡



第199図 11号掘立柱建物跡

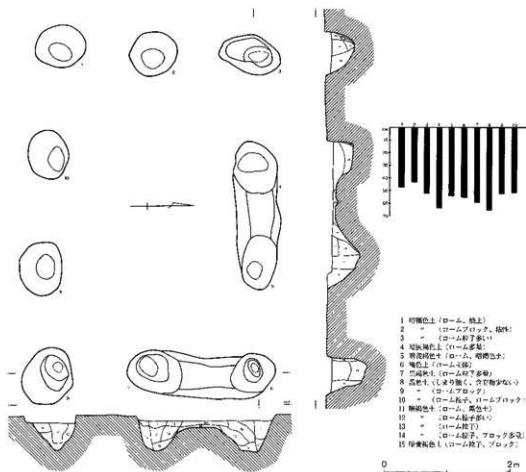
11号掘立柱建物跡

7～10号掘立柱建物跡の一群からやや南に離れ、17号住居跡が西6mに並行して並んでいる。主軸方向はN-75°Eを指し、規模は3×2間で、桁行7m、梁行5.2mを測る。遺構確認段階では柱痕は検出できなかったが、土層の観察から焼土を含む1・2層が柱痕に相当すると考えられる。各柱穴底面の柱痕跡を見ると、多くの柱穴で2穴分存在しているので、建て替えを行ったのであろう。深さは34cm～61cmで、柱間距離は平均すると約2mである。

出土遺物はない。

12号掘立柱建物跡

台地が南に向かって緩やかに傾斜を始める肩部のV-12グリッドに位置し、周辺には掘立柱建物跡や竪穴住居跡が集中している。主軸方向はN-89°Wを指し、規模は3×2間で、桁行6m、梁行4mを測る。柱穴2と3、4と5は浅い溝で連結されている。柱穴のプランは直径90cm程の円形を呈し、深さは50cm前後に揃っている。平面では柱痕は確認できなかったが、柱間距離は桁行、梁行と



第200図 12号掘立柱建物跡

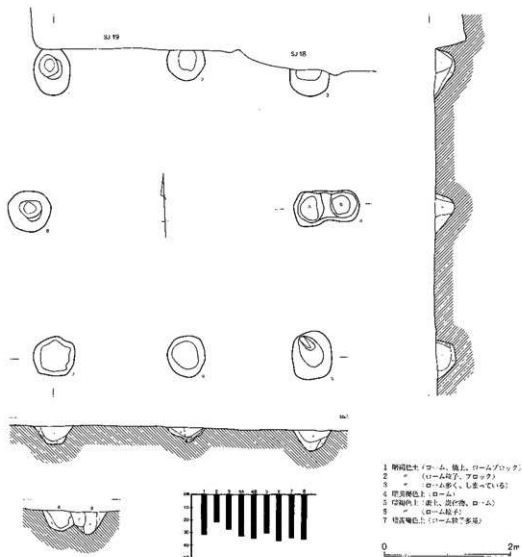
もに約1.8mである。

遺物は土師器13片と須恵器8片が出土しているが、いずれも小片である。

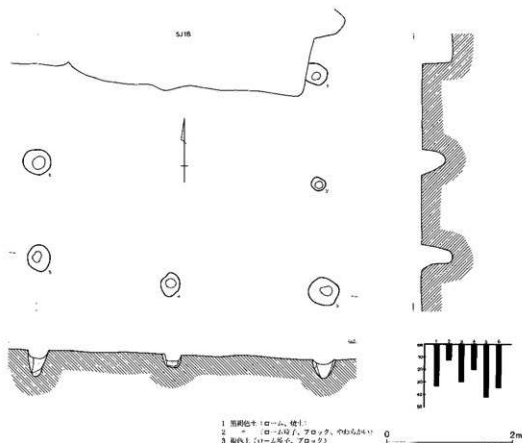
13号掘立柱建物跡

12号掘立柱建物跡の西2mに並行して並んでおり、18号・19号竪穴住居跡と14号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。主軸方向はN-3°-Eを指し、規模は2×2間で桁行5.2m、梁行4.7mを測る。柱穴のプランは円形で、深さは22cm～37cmである。柱穴4は2穴東西に並んでいるが、外側が新しく、建て替えたものであろう。

出土遺物は、土師器2片、須恵器4片である。



第201図 13号掘立柱建物跡



第202図 14号掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡

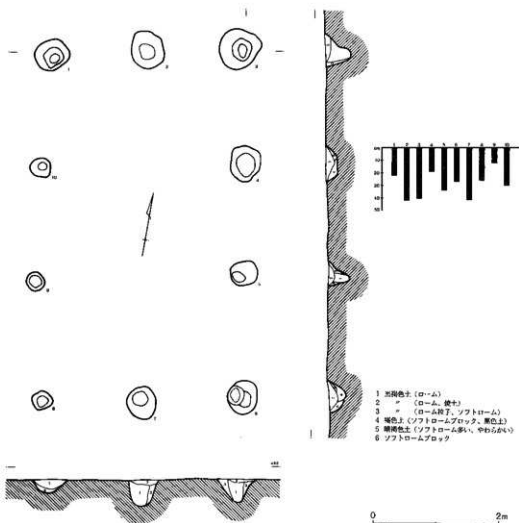
13号掘立柱建物跡の東側と重複しており、18号・19号竪穴住居跡とも重複している。主軸方向はN-84°-Wを指し、規模は2×2間で、桁行5m、梁行3.8mを測るが、やや歪んでいる。柱穴のプランは円形で、直径20cm～40cmと小型である。

出土遺物は、柱穴4から土師器小片が1点だけである。

15号掘立柱建物跡

X-11グリッドに位置し、主軸方向はN-11°-Wを指す。規模は3×2間で、桁行6.1m、梁行3.6mを測る。柱穴のプランは円形で直径25cm～60cm、深さ12cm～42cmである。柱痕は確認できなかったが、1層がこれに相当するであろう。

出土遺物は、土師器片8、須恵器片3点である。



第203図 15号掘立柱建物跡

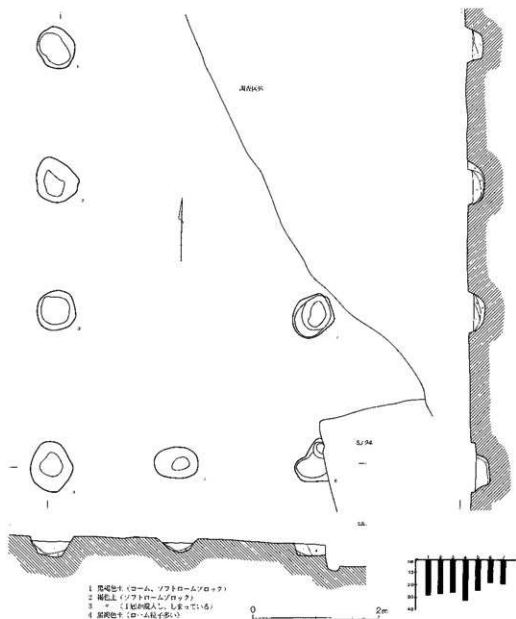


手前が20号住居跡で
 周辺に17～20号掘立柱建物跡が並ぶ

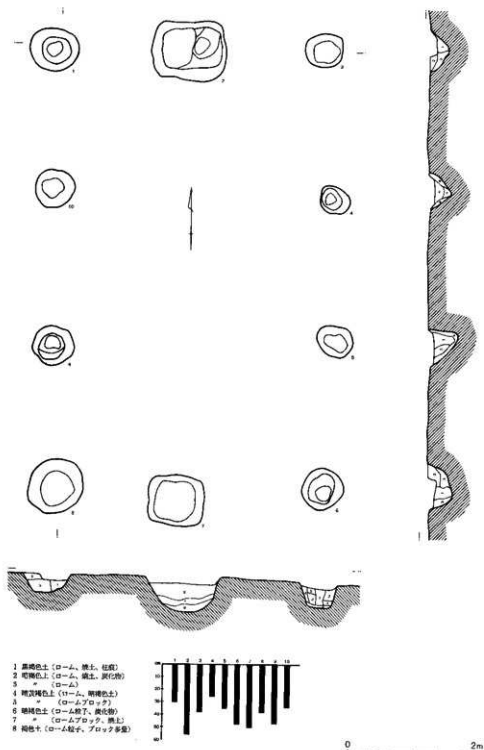
16号掘立柱建物跡

南への緩い傾斜をしているY-15グリッドに位置し、北東コーナーの3穴分が調査区外に及んでいる。柱穴6は24号竪穴住居跡に切られている。主軸方向はN-2°-Eを指し、規模は3×2間で、桁行7.4m、梁行4.8mを測る。柱穴のプランは円形で、深さも25cm前後であるが、柱穴6だけがL字状のプランを呈している。

出土遺物はない。



第204図 16号掘立柱建物跡

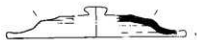


第205図 17号掘立柱建物跡

17号掘立柱建物跡

西側には接するようにして18号・20号掘立柱建物跡が並び、東側には遺構はない。主軸方向はN-2°-Wを指し、規模は3×2間で、桁行7.6m、梁行5mを測る。柱穴のプランは直径50cm前後の円形であるが、梁行の両側中央の2穴は方形プランを呈する大型のもので、深さも50cm以上である。平面では柱痕は確認できなかったが、土層では1層がこれに相当する。

遺物は、土師器16片、須恵器5片が出土しており、須恵器は坏3点・蓋2点でこのうち1点は佐波理模倣である。



0 10cm

第206図

17号掘立柱建物跡出土遺物

17号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋				DEH	II	6	10%	R

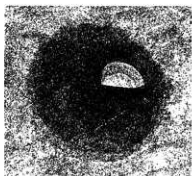
18号掘立柱建物跡

南北と東には20号・19号・17号掘立柱建物跡が接するように並び、主軸方向はN-3°-Eを指す。規模は2×2間の東庇であるが、桁行西側は3間になり変則的な柱穴配置である。大きさは南北が5m、庇を含めた東西が7.1mを測る。身舎部分の柱穴は直径50cm前後の円形プランを呈し、庇柱は直径25cm程と小型である。平面では柱痕は確認できなかったが、2層がこれに相当する。なお、本遺跡では庇を持つ唯一の掘立柱建物跡である。

出土遺物は土師器14点、須恵器9点である。



0 10cm

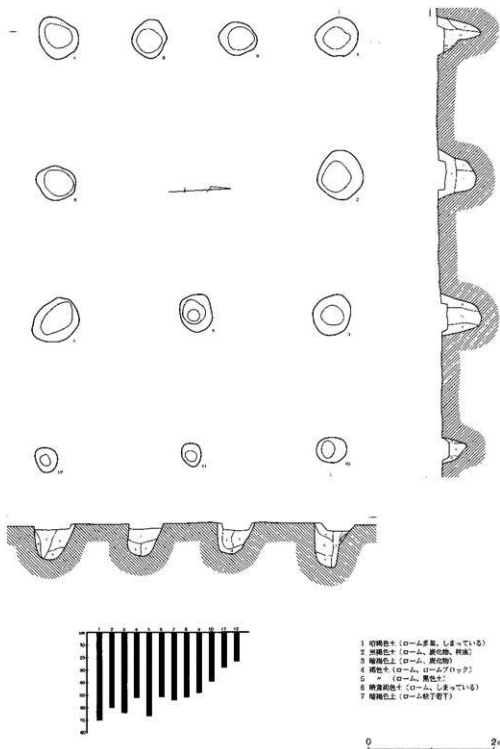


第207図 18号掘立柱建物跡出土遺物

18号掘立柱建物跡出土土器

18号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.3)	(3.4)	(6.8)	EH	II	5	40%	RBb
2	蓋				BDII	II	5		

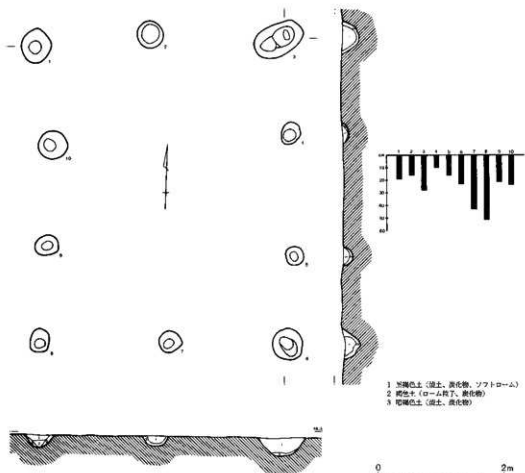


第208図 18号掘立柱建物跡

19号掘立柱建物跡

12号掘立柱建物跡と18号掘立柱建物跡の間に位置し、主軸方向はN-3°-Wを指す。規模は3×2間で、桁行5.3m、梁行4.5mを測る。柱穴の平面プランは円形で、深さは10cmから52cmとばらつきがあるが、全体的に小型である。

遺物は土師器6点と須恵器1点が出土しており、図示した環は柱穴1と7から出土した破片が接合したものである。



第209図 19号掘立柱建物跡



0 10cm

第210図 19号掘立柱建物跡出土遺物

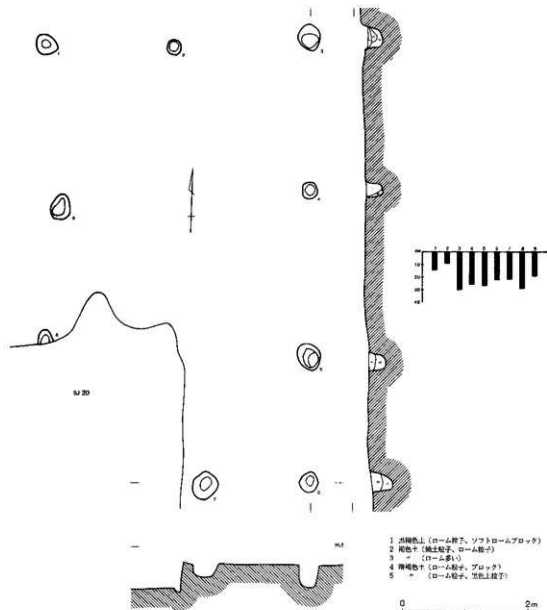
19号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(14.0)	(4)		ACDE	III	7	15%	

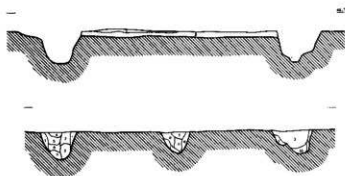
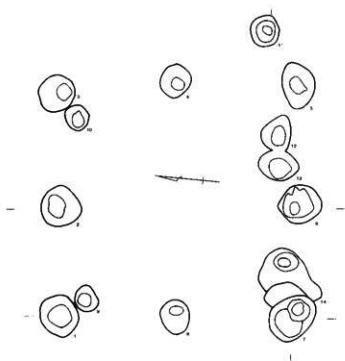
20号掘立柱建物跡

17・18号掘立柱建物跡と隣接し、20号竪穴住居跡と重複している。明瞭な新旧関係は確認できなかったが、20号竪穴住居跡が新しい可能性が高い。主軸方向はN-2°-Wを指し、規模は3×2間で、桁行7.4m、梁行4.5mを測る。各柱穴は直径30cm程の円形プランを呈し、深さも30cmを越えるものはない。

出土遺物は土師器片が1点だけである。

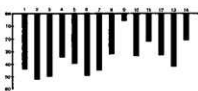


第211図 20号掘立柱建物跡



- 1 暗褐色土（ソフトロームブロック、炭灰土、焼土粒子、下面下位土多く緑化）
 2 褐色土（ソフトロームと暗褐色土の低土層＝ソフトローム質土層）

- 3 暗褐色土（ローム粒子、炭土、砂土）
 4 暗褐色土（ソフトロームブロック、炭灰土）
 5 暗褐色土（ローム、炭土、炭化物）
 6 暗褐色土（ローム多く堅い）
 7 暗褐色土（ローム多量、やわらかい）
 8 暗褐色土（ソフトロームブロック、炭土）
 9 暗褐色土（ローム粒子、炭土）
 10 暗褐色土（ソフトローム多い）
 11 暗褐色土（ソフトローム、炭化物）
 12 暗褐色土（ローム、炭土）
 13 暗褐色土（ローム、炭土、炭化物）
 14 暗褐色土（ソフトローム多い）
 15 暗褐色土（ソフトローム、炭土）
 16 暗褐色土（ローム多い）
 17 暗褐色土（ローム粒子多い）



第212図 21号掘立柱建物跡

21号掘立柱建物跡

10号掘立柱建物跡の東約6mに位置し、主軸方向はN-5°-Wを指す。中世の竪穴状遺構に切られていたため、これの調査中に検出されたものである。規模は2×2間のほぼ正方形を呈し、桁行、梁行ともに4.4mを測る。また、本掘立柱建物跡周辺にはいくつかのピットが分布するが、掘立柱建物跡としての組み合わせはできない。

出土遺物は土師器片23点、須恵器片20点で、篋記号のある須恵器片が1点ある。



第213図 21号掘立柱建物跡出土遺物

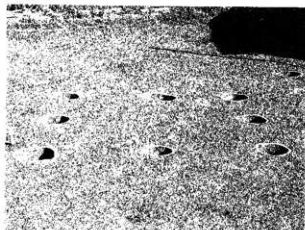
21号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	焼温度	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	(3.4)	(5.4)	DEH	II	5	25%	RA
2	坏			(9.4)	DEH	II	6	10%	LBb、篋記号

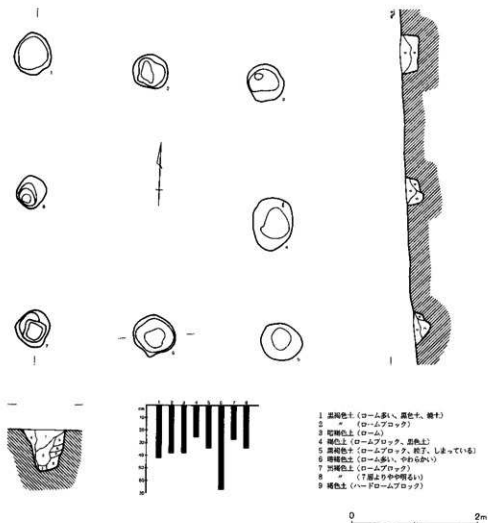
22号掘立柱建物跡

南への斜面肩部のAC-16グリッドに位置し、主軸方向はN-2°-Wを指す。規模は2×2間で、桁行5.9m、梁行4.6mを測るが、若干歪んでいる。柱穴のプランは直径50cm程度の円形で、深さは25cm～40cmである。しかし、斜面下方の柱穴6だけが67cmと深い。遺構確認時には柱痕は検出できなかったが、柱穴6の断面では柱痕の直径は20cmで、焼土を含んでいた。

遺物は須恵器2点、土師器1点が出土している。



22号掘立柱建物跡全景（西から）

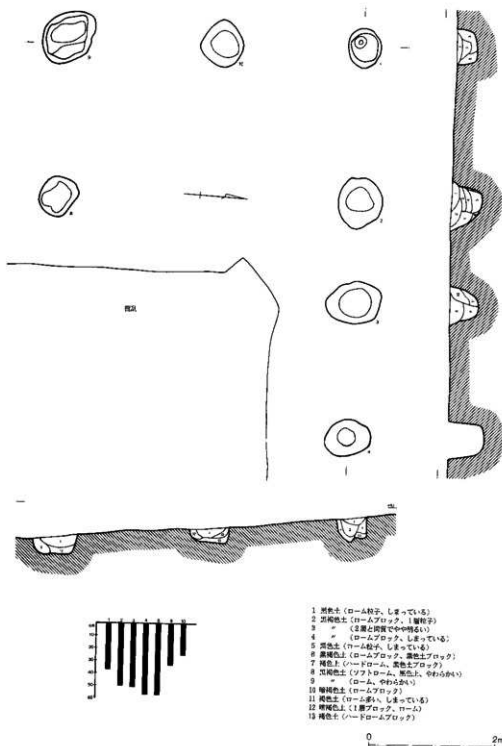


第214図 22号掘立柱建物跡

23号掘立柱建物跡

22号掘立柱建物跡の2 m南に平行に並んでおり、主軸方向はN-88°-Eを指す。南東側の3穴は住宅を区画するブロック塀に破壊されている。規模は3×2間で、桁行6.7m、梁行5.4mを測るが桁行側柱穴2と3の柱間距離がやや短い。深さは斜面であるにも関わらず、斜面下方の柱穴も一定の深さを有し、25～57cmを測る。

出土遺物はない。

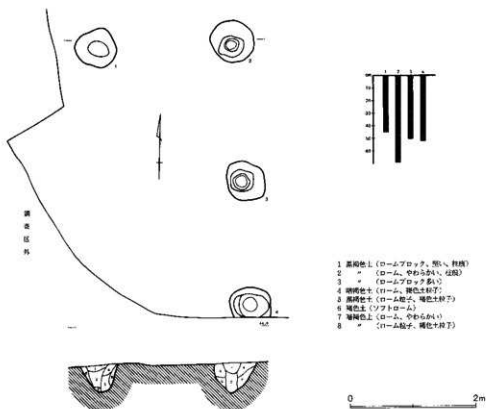


第215図 23号掘立柱建物跡

24号掘立柱建物跡

南への傾斜が安定した AE-13グリッドに位置し、西側と南側は調査区外のため全体の規模は確認できなかった。調査できたのは4穴で、現状での主軸方向はN-4°Wを指す。柱穴のプランは直径60cm程の円形で、柱痕は1・2層に相当し、深さは45cm～69cmと深い。

遺物は須恵器7点、土師器3点が出土しており、須恵器蓋の破片が実測できた。



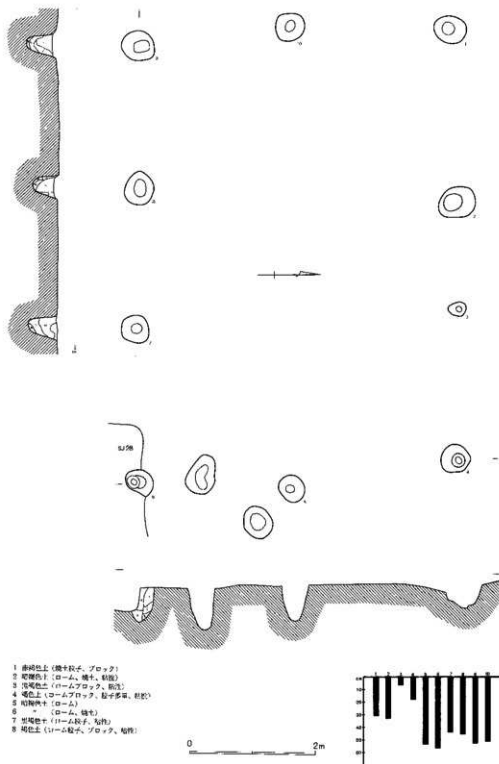
第216図 24号掘立柱建物跡



第217図 24号掘立柱建物跡出土遺物

24号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋				EH	II	5	15%	R



第218図 25号掘立柱建物跡

25号掘立柱建物跡

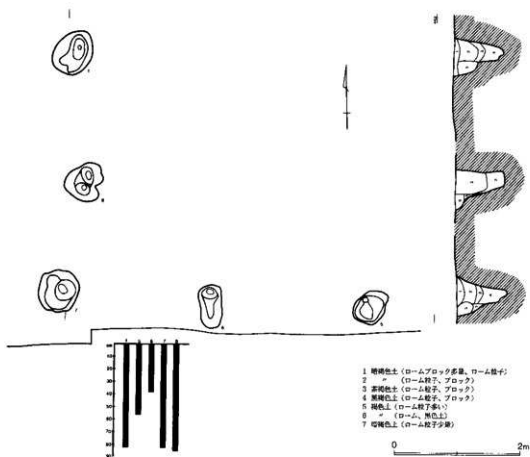
南への斜面が安定し始める AD-13グリッドに位置し、柱穴 6 の一部を28号竪穴住居跡が切っている。東には軸を揃えるように30号竪穴住居跡が、西には32号掘立柱建物跡が並んでいる。主軸方向はN-89°-Eを指し、規模は3×2間で、桁行7.2m、梁行5.5mを測る。各柱穴は直径40cm程の円形プランを呈し、全体の規模の大きさに対して柱穴は小型である。

遺物は須恵器 1 点、土師器 12 点が出土しているが、いずれも小片である。

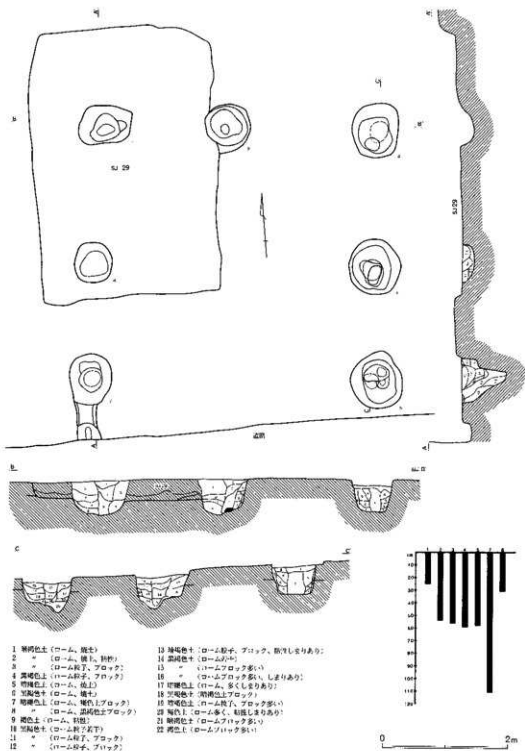
26号掘立柱建物跡

24号掘立柱建物跡と重複するように並び、東北側の3穴については、攪乱や樹木によって確認できなかった。主軸方向はN-86°-Wを指し、規模は2×2間で、桁行5.5m、梁行4.4mを測る。遺構確認時には柱底は検出できなかったが、深さは40cm～85cmと深い。

出土遺物は須恵器 5 点、土師器 7 点である。



第219図 26号掘立柱建物跡



第220図 27号掘立柱建物跡

27号掘立柱建物跡

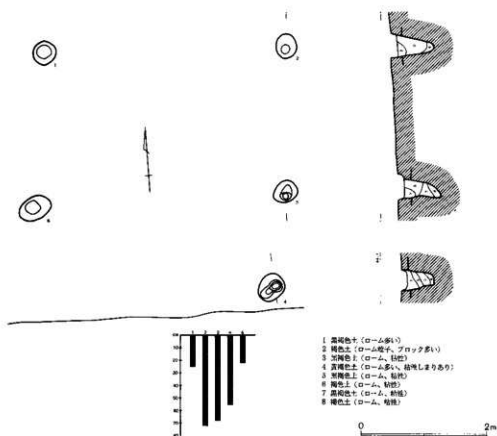
29号竪穴住居跡の埋没後に建てられ、柱穴1と2は床面と壁を破壊している。南側は調査区外の道路に及ぶため、全体の規模は確認できなかった。しかし、西側桁行の柱穴7は溝持ちで、最低でもさらに1間は南に延び、3×2間以上の規模である。主軸方向はN-4°-Eを指し、柱間距離は2m前後である。各柱穴は直径70cm程の円形プランを呈し、深さは柱穴7を除いて25cm～60cm程である。柱穴7は110cmと深く、浅い溝によってさらに南の柱穴に連結されている。

遺物は須恵器4点、土師器12点が出土している。

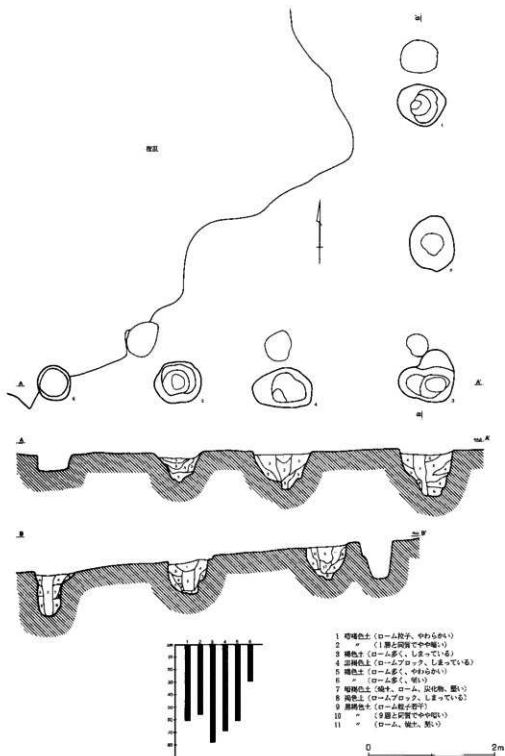
28号掘立柱建物跡

28号竪穴住居跡の南に接するように位置し、東1.5mの27号掘立柱建物跡とはほぼ平行する。南側は調査区外の道路に及ぶため、全体の規模は確認できなかった。桁行は2間以上であるが、梁行は1間で、距離は2間分の4.2mある。主軸方向はN-6°-Eを指し、桁行の柱間距離はやや不安定である。

出土遺物はない。



第221図 28号掘立柱建物跡



第222図 29号掘立柱建物跡

29号掘立柱建物跡

25号掘立柱建物跡の北5mの斜面中腹に位置し、30号掘立柱建物跡とは主軸方向は一致し、位置をややずらすように並んでいる。主軸方向はN-90°-Eを指し、規模は3×2間で、桁行6.6m、梁行5mを測るが、北西側の4穴は攪乱によって確認できなかった。各柱穴のプランは直径60cm前後の円形を呈すが、南東コーナーの柱穴はL字形をしている。深さは柱穴6は30cmであるが、他は55cm～78cmと深い。柱痕は遺構確認時には検出できなかったが、土層観察時には6穴のうち4穴で確認でき、その周囲には堅くしまった褐色土と黒褐色土を交互に埋め戻している。柱間距離は柱穴4と5の間が他に比べて短い。

遺物は須恵器5点、土師器11点出土しており、須恵器蓋が図化できた。



第223図 29号掘立柱建物跡出土遺物

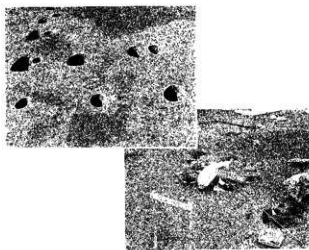
29号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(14.2)			DEHG	II	5	20%	R

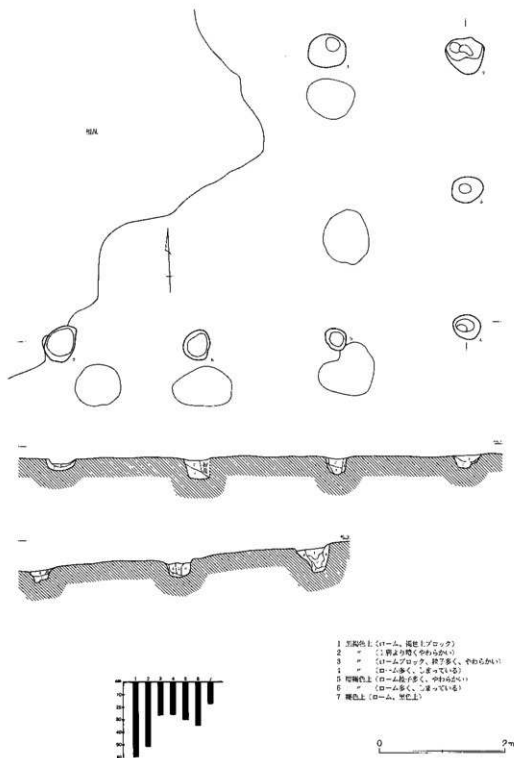
30号掘立柱建物跡

29号掘立柱建物跡を北東に若干移動した位置にあり、各柱穴の規模は小さくなっている。北西側の3穴は攪乱によって破壊されている。主軸方向はN-90°-Eを指し、規模は3×2間で、桁行7m、梁行4.8mを測る。柱穴のプランは直径40cm程の円形を呈し、深さは18cm～60cmとばらつきがある。柱間距離は桁行、梁行ともに2.2mである。

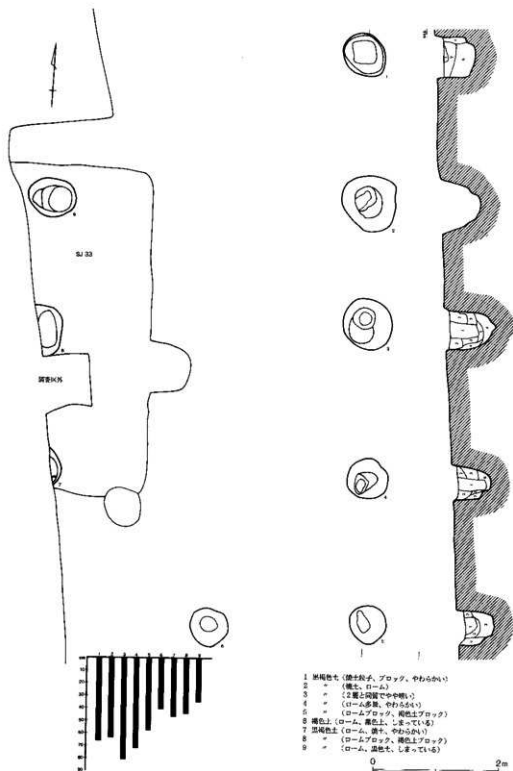
出土遺物は須恵器5点、土師器30点と多いが、小片で図化できるものはない。



30号掘立柱建物跡全景と調査状況



第224図 30号掘立柱建物跡

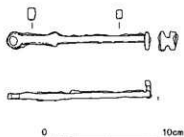


第225図 31号掘立柱建物跡

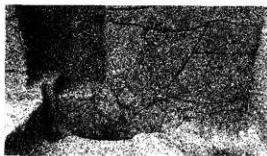
31号掘立柱建物跡

斜面が緩やかになり始め、暗褐色土が遺構確認面となる AD-12グリッドに位置し、33号堅穴住居跡を切り、新旧関係は不明だが32・33号掘立柱建物跡と重複している。主軸方向はN-6°-Wを指し、規模は4×2間で、桁行9.7m、梁行5.8mを測るが、北側2穴と南西コーナーは調査区外と攪乱で確認できなかった。遺構確認面である暗褐色土は、10cm～20cmの厚さで全面に堆積しており、その下はソフトロームである。各柱穴は直径80cm程の円形プランを呈し、深さは斜面であるため一定していないが、最深のものは80cm以上ある。柱痕は1層に相当し、焼土・焼土ブロックが多量に含まれている。

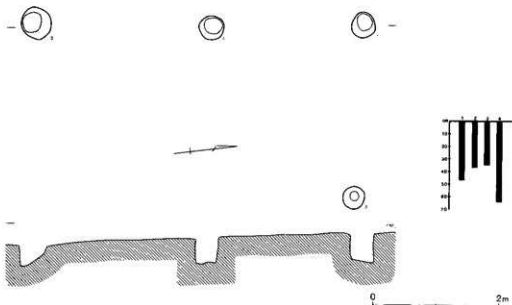
遺物は須恵器・土師器各3点と、柱穴8の上層から完形の鉄製鍵が1点出土している。鍵の全長は11.5cmで、解錠部長7.3cm、柄部長4.2cmを測り、区部は棘状に作り出されている。柄には直径6mmの孔が開き、鍵爪部はH状を呈している。



第226図 31号掘立柱建物跡出土遺物



31号掘立柱建物跡土層断面



第227図 32号掘立柱建物跡

32号掘立柱建物跡

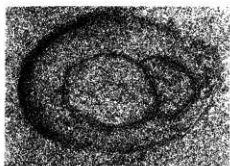
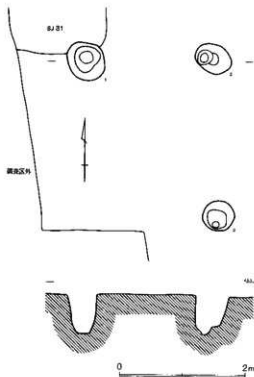
25号掘立柱建物跡が東に並び、31号掘立柱建物跡と重複している。攪乱や樹木の根のために南東側の柱穴が確認できなかったが、 2×2 間の規模になる。主軸方向はN-5°-Eを指し、南北長は5.6mを測る。各柱穴は直径30cm~40cmの円形プランを呈し、深さは35cm~64cmである。

出土遺物は土師器小片4点である。

33号掘立柱建物跡

33号竪穴住居跡と31号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。また、西側は調査区外に及び、南側は攪乱によって破壊され、確認できたのは北東コーナーの3穴だけであるので全体の規模は不明である。柱穴のプランは円形で、直径は40cm程である。

出土遺物は土師器4点、須恵器1点である。



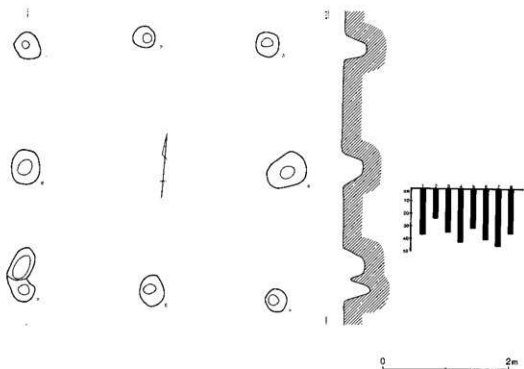
33号掘立柱建物跡の柱穴確認状況

第228図 33号掘立柱建物跡

34号掘立柱建物跡

斜面が完全に終わった平坦面で、2号溝に平行して南に位置する。遺構確認面は暗褐色土からソフトロームに変わるあたりであるが、竹林であったため確認が困難で、また根が深く遺構の状態は良くない。主軸方向はN-4°-Wを指し、規模は一辺4.4mを測る。柱穴のプランは直径40cm程の円形で、柱痕は平面でも断面でも確認できなかった。

出土遺物は土師器が19片であるが、全て小片である。



第229図 34号掘立柱建物跡

35号掘立柱建物跡

斜面の裾から平坦面に位置し、35号竪穴住居跡と36号掘立柱建物跡と重複している。35号・36号掘立柱建物跡の新旧関係は不明であるが、ともに35号竪穴住居跡に切られている。また、北側は調査区外に接しているが、規模は3×2間となろう。主軸方向はN-11°-Wを指し、桁行8.8m、梁行5.9mを測る。柱穴のプランは円形を呈し、深さは46cm～65cmで、柱痕は1・2層に相当する。柱間距離は桁行、梁行ともに2.6mで、これまでのものより大きい。

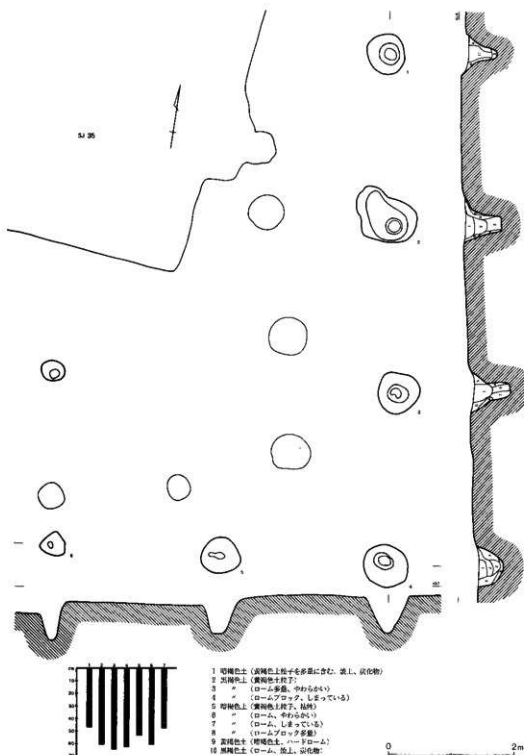
出土遺物は須恵器1点である。



第230図 35号掘立柱建物跡出土遺物

35号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	胴高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕				CDEH	I	6		

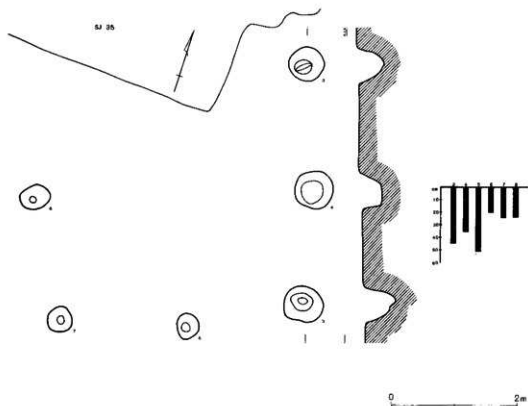


第231図 35号竪立柱建物跡

36号掘立柱建物跡

35号掘立柱建物跡の中に納まるように西側に位置し、北側は35号掘立柱建物跡に切られている。主軸方向はN-17°-Wを指し、規模は2×2間で、1辺4.4mを測る。各柱穴のプランは円形で、柱間距離は桁行、梁行ともに1.8mである。

出土遺物はない。

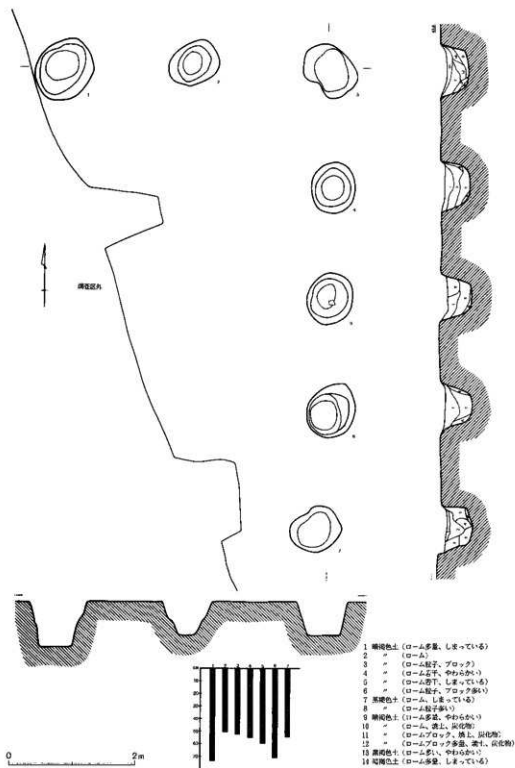


第232図 36号掘立柱建物跡

37号掘立柱建物跡

2号溝の南3mに平行しており、周辺には溝以外はない。西側は調査区外におよぶため5穴が検出できなかった。主軸方向はほぼ真北を指し、規模は4×2間で、桁行8m、梁行5.1mを測り、深さは50cm～74cmとほぼ一定している。明瞭な柱痕は平面でも断面でも確認できなかった。柱穴のプランは直径80cmの円形であるが、コーナーだけはL字形や楕円形で内側を向いている。柱間距離は桁行1.8m、梁行2.2mである。

出土遺物は須恵器7点、土師器17点である。



第233図 37号孤立柱建物跡



第234図 37号掘立柱建物跡出土遺物

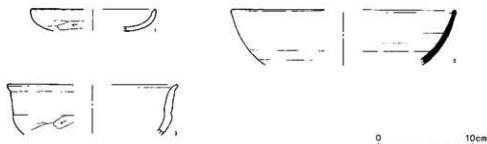
37号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
I	甕			(12.2)	EH	II	5	底部	

38号掘立柱建物跡

小畔川に近い平坦面の AO-20 グリッドに位置し、近世の溝や攪乱によって一部を破壊されている。主軸方向は N-2°-E を指し、規模は 4 × 2 間で、桁行 9.1m、梁行 6.1m を測る。桁行東側の柱穴 3 と 4、5 ～ 7、西側の 9 と 10、11 と 12 が溝によって連結されている、所謂溝持ちの掘立柱建物跡である。各柱穴は楕円形から方形を呈し、深さは 70cm 前後のものが多いが、深さ 1 m のものもある。遺構確認面の状態が非常に不安定で、柱痕や覆土の観察ができなかったが、柱穴底部の柱痕跡からは、桁行柱間距離 2 m、梁行柱間距離 2.6m を測る。溝は柱穴と同じ幅で、深さは 20cm ～ 52cm である。

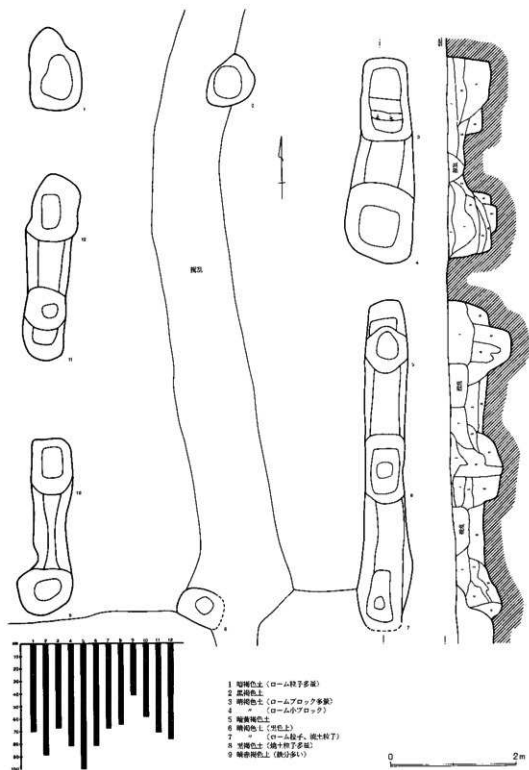
遺物は柱穴 8 と 9、11 と 12 を除いて出土しており、合計では須恵器 10 点、土師器 91 点である。



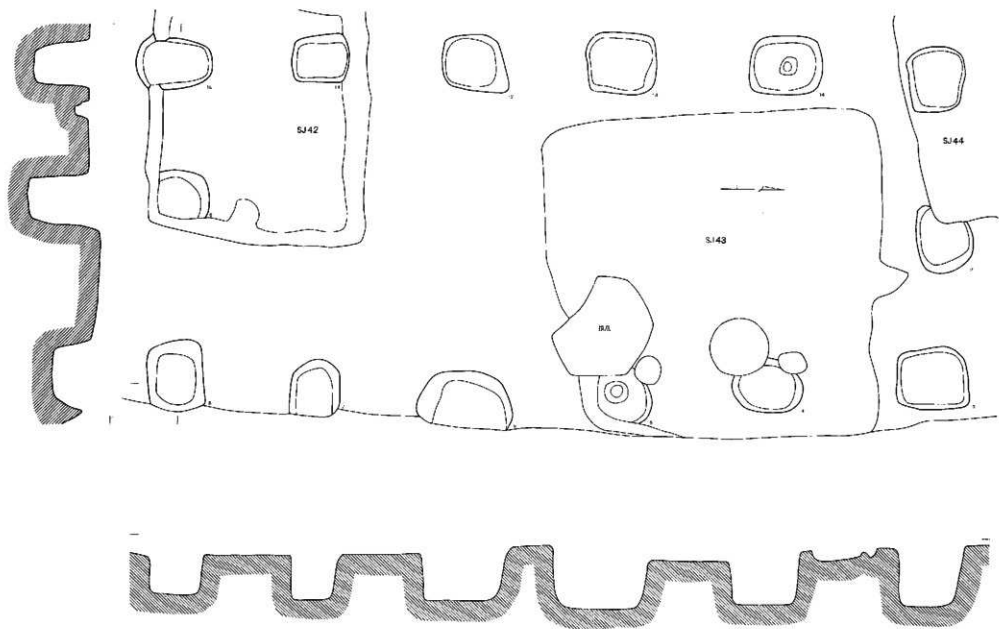
第235図 38号掘立柱建物跡出土遺物

38号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	皿	(13.4)			ACB	II	4	10%	
2	碗	(24.0)			DEII	I	5	10%	
3	鉢	(18.2)			ADE		3	口縁	



第236図 38号掘立柱建物跡



第237图 39号掘立柱建物跡

39号掘立柱建物跡

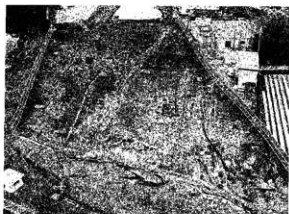
38号掘立柱建物跡の南西に平行して並び、本遺跡では最も南に位置する掘立柱建物跡である。本掘立柱建物跡周辺には竪穴住居跡の他に、近世の溝や攪乱も多く重複も激しい。このため、42号～44号竪穴住居跡との新旧関係を明確にすることはできなかったが、調査進行時点での観察では3軒の竪穴住居跡の方が新しい可能性が高い。主軸方向はN-1°-Eを指し、規模は5×2間で、桁行13.3m、梁行5.8mを測る。柱穴のプランは1辺1m程の楕円形あるいは方形を呈し、深さは全て1m前後である。柱間距離は桁行、梁行ともに2.5mと大きい。しかし、調査以前は人家や倉庫が建っていたため大小の攪乱が激しく、柱痕や覆土の観察は不可能であった。

出土遺物はない。

40号掘立柱建物跡

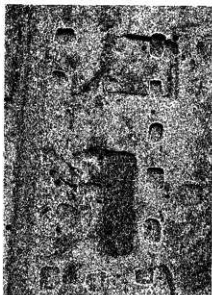
44号竪穴住居跡のやや北西のAN-18グリッドに位置し、近世の溝によって北西コーナーの2穴が破壊されている。主軸方向はN-15°-Wを指し、規模は3×2間で、桁行8.3m、梁行4.7mを測る。深さは20cm前後と深くはないが、全ての柱穴で柱痕が確認できた。柱間距離は桁行が2.5m～3m、梁行が2mである。

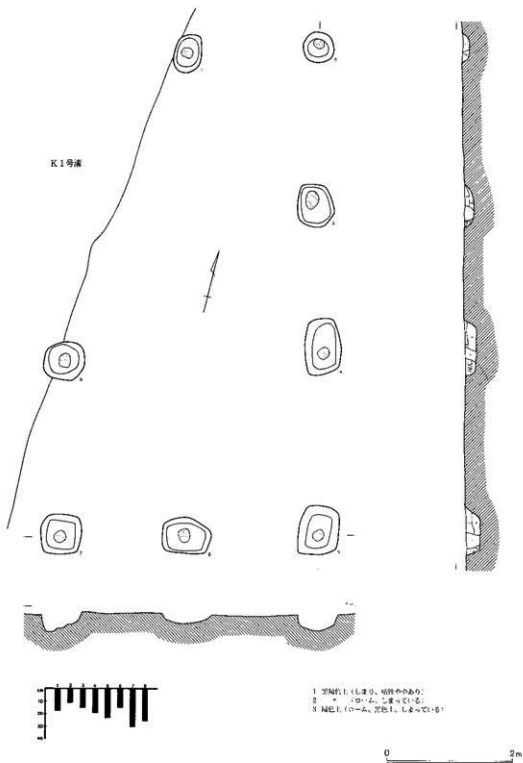
出土遺物はない。



小畔川上空から

39号掘立柱建物跡全景





第238図 40号掘立柱建物跡

1号柱穴列

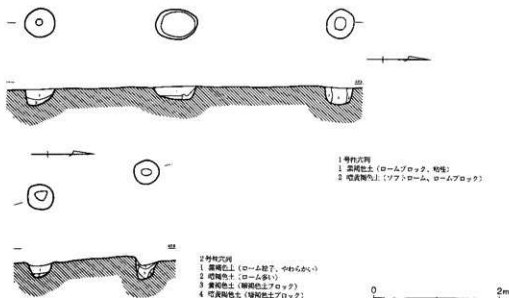
38号竪穴住居跡の東に平行して並び、3穴から構成される。主軸方向は真北を指し、柱穴の直径は40cm～50cmで、深さは30cmほどである。柱間距離は2.4mを測り、1穴だけ柱痕が確認できた。

出土遺物はない。

2号柱穴列

35号掘立柱建物跡の東に平行して並んでおり、当初は庇かと考えたが位置がずれるため、別の遺構と判断した。柱穴の直径は40cmほどで、深さは30cmを測る。主軸方向はN-14°-Wを指し、柱間距離は1.8mである。

出土遺物はない。

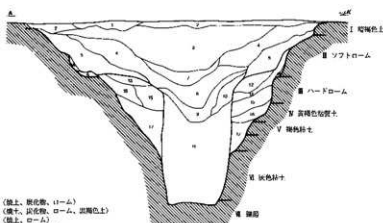
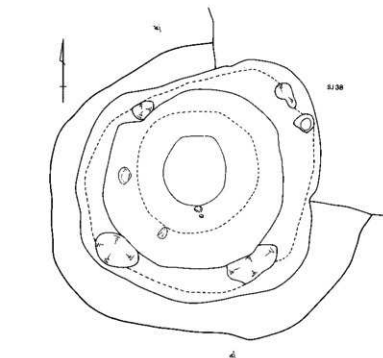


第239図 柱穴列

1号井戸

斜面の裾部が平坦になる、標高約44mの地点に位置し、38号竪穴住居跡の南西コーナーを破壊して構築されている。直径4.5～5mのやや歪んだ円形を呈し、暗褐色土・ソフトローム・ハードローム・黄褐色粘質土・褐色粘土・灰色粘土・礫層を掘り込んでおり、深さは3mを測る。

構築方法は、最初にロート状に掘ったあとに直径1.1mの井筒を底面から2mまで組み、その周囲にロームを多く含んだ12～18層までを埋め戻し、最上面を叩き締めて平坦に均している。この埋め戻し面の壁際の四隅には粘土を貼った浅い落ち込みが穿たれ、ここもかなり硬化しているので水汲み用の足場板設置の痕跡と考えられる。埋め戻し面から遺構確認面までは約1mあるが、この間には不明瞭ではあるが段を1段持っている。底面は礫層を20cm掘り込んでいるにすぎないが、現在で



- 1 灰褐色土 (粘土、炭化物、ローム)
- 2 " (黄土、炭化物、ローム、灰褐色土)
- 3 黄褐色土 (粘土、ローム)
- 4 " (黄土、ローム多量)
- 5 暗褐色土 (粘土、ローム多い)
- 6 " (黄土、ローム)
- 7 灰褐色土 (粘土、炭化物、ローム)
- 8 暗褐色土 (粘土、炭化物、ローム)
- 9 黄土 (粘土、炭化物、ローム、やや細かい)
- 10 暗褐色土 (粘土、炭化物、ローム多い)
- 11 " (ローム粒子多い)
- 12 " (黄土、炭化物、ローム、灰褐色土ブロック、しまっている)
- 13 " (黄土、ロームブロック多量、しまっている)
- 14 暗褐色土 (ローム粒子、ブロック)
- 15 暗褐色土 (ローム多量、灰白色粘土、灰褐色土ブロック、しまっている)
- 16 " (15層より灰褐色土ブロック少ない)
- 17 ロームブロック・暗褐色土 (密度は低い、非常に融化している)
- 18 暗褐色土 (ローム粒子多量、黄白色粘土、しまっている)

0 2m

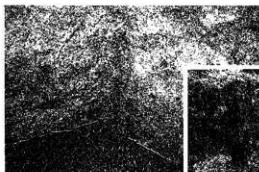
第240図 1号井戸

も遺構確認面から2mで水が湧いてきた。水位下から数点の木質が検出されたが、井戸枅材等ではない。点線は掘り方のラインである。

出土遺物が多いが全体的に土師器が少なく、特に甕類はほとんど検出できなかった。個体識別では、土師器環1・碗1と須恵器環16・高台環1・蓋8・高环1・平瓶1・甕3・短頸壺3個体である。この他に桃の種子1点がある。

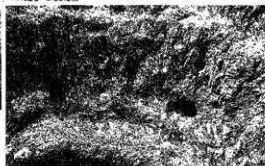
1号井戸出土土器観察表

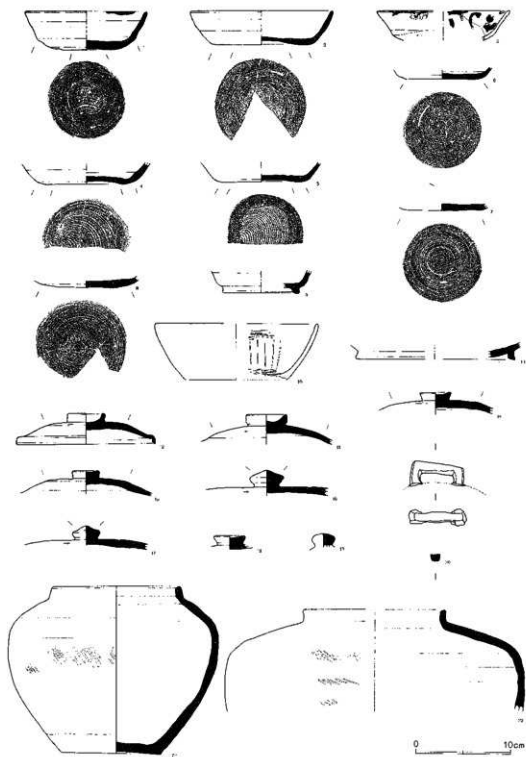
番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	環	13.0	(4.1)	(8.0)	DEH	II	5	40%	油煙痕、RBa
2	環	(15.2)	(3.6)	9.6	DEF	II	5	25%	上層、RBb
3	環	(14.2)			AEF	II	4	10%	中層、油煙痕
4	環			8.8	EH	II	5	底 部	上層、LBb
5	環			8.4	BDEH	II	5	底 部	上層、RBb
6	環			7.8	DEH	II	6	底 部	中層、LA
7	環			8.0	ADEH	II	7	底 部	中層、RA
8	環			9.4	DEH	II	5	底 部	上層、LA
9	高台環			(8.2)	EII	II	5	底 部	上層
10	碗	(17.4)	(6)	(10.5)	E	I	4	10%	下層、内面磨き、暗文
11	蓋			(16.8)	CDEH	II	5	底 部	
12	蓋	14.8	3.4		BDEH	I	5	80%	上層、天井部回転削り、R
13	蓋				EII	II	3	15%	上層、L
14	蓋				EH	II	7	20%	上層
15	蓋				DEH	II	6	10%	上層、R
16	蓋				ABDE	III	7	15%	上層、R
17	蓋				ABDE	III	6	10%	上層、R
18	蓋				DEH	II	5	つまみ	上層
19	蓋				DEH	II	5	つまみ	上層
20	平 瓶				DEII	II	5	把 手	上層
21	短頸壺	13.7	17.8	10.4	DEH	II	5	70%	下層
22	短頸壺	(15.2)			BEH	I	5	口 縁	下層
23	甕	(23.2)			ABDG	I	5	口 縁	上層



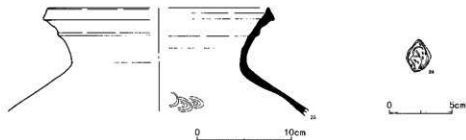
1号井戸、井戸枅痕跡

1号井戸、壁の工具痕

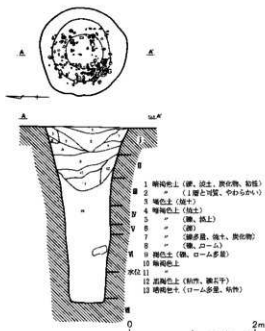




第241图 1号井戸出土遺物(1)



第242図 1号井戸出土遺物(2)



第243図 2号井戸

2号井戸

1号井戸の南西1m程に位置し、遺構確認時には上面に礫が直径1mの範囲に集中していた。開口部の平面プランは直径1.4mの円形を呈し、底面の直径は55cmで、深さは2.8mを測る。本井戸も確認面は暗褐色土で、以下ソフトローム・ハードローム・黄褐色粘質土・褐色粘土・灰色粘土・礫層を掘り込んでおり、2.3mの深さで水が湧いてきた。1号井戸のように大きな開口部や掘り方はなく、素掘りの掘り抜き井戸である。

出土遺物は少なく、図化した土器が全てである。



第244図 2号井戸出土遺物

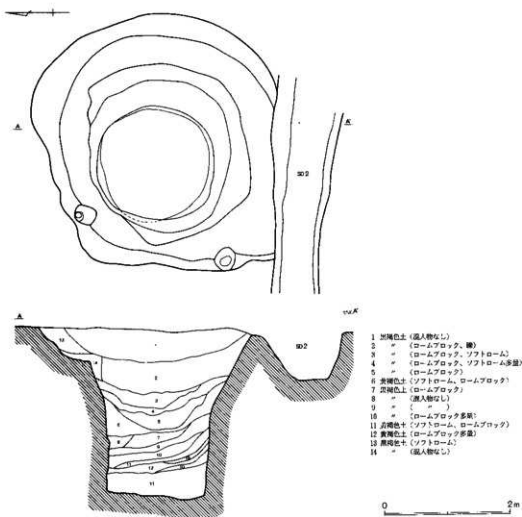
2号井戸出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施色	色調	残存	出土位置・その他
1	坏蓋			(8.8)	EH	I	6	底部	RBb
2					DEH	II	5	10%	R
3					BCEH	II	5		
4					DEH	II	7		

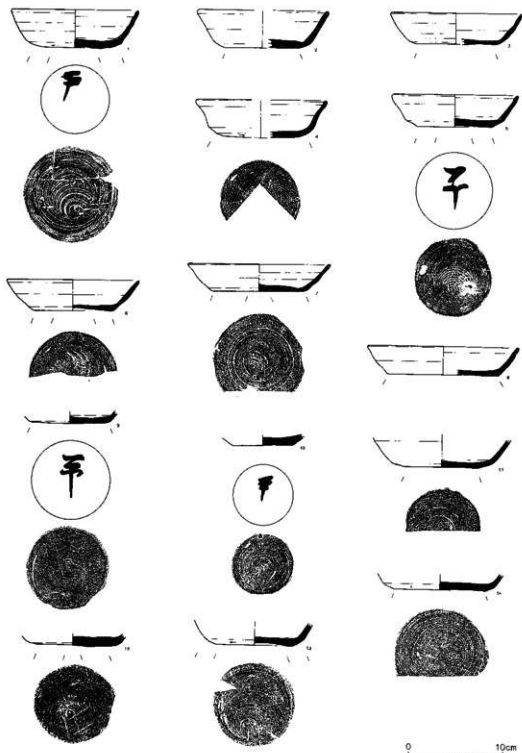
3号井戸

1号井戸の南2mに位置し、南の辺は2号溝と接しており、一部を切られている。開口部の直径は4mを測り、緩やかに落ち込んでからほぼ垂直に底面に至っている。底径は1.5mで、確認面からの深さは2.7mである。覆土は黒褐色土と黄褐色土が交互に堆積しており、中層部には遺物が全く含まれていない。1号井戸のような足場空間も井筒を埋設した痕跡も観察できなかった。

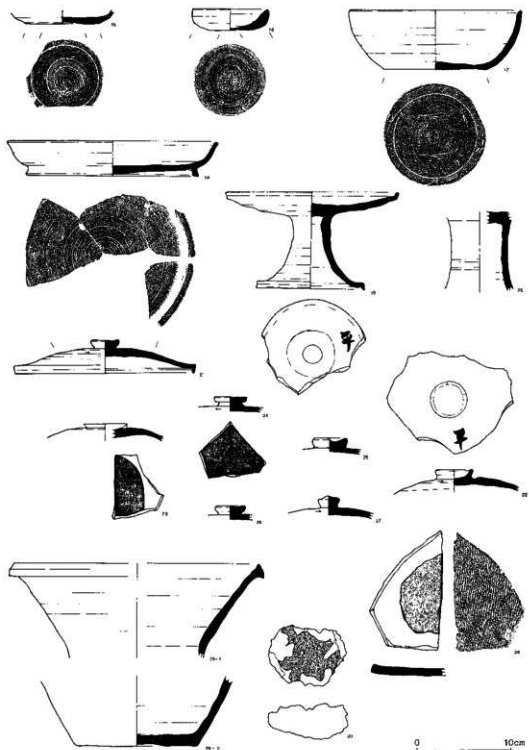
出土遺物は非常に多いが、土師器はごく僅かである。個体識別の結果は、土師器環1・高台環1と須恵器環24・高台盤3・高環2・椀1・蓋10・甕3・短頸壺2・小型環1である。墨書は6点あるが全て「平」で、転用罫が3点ある。他に碗形埴が1点検出されている。



第245図 3号井戸



第246图 3号井尸出土遗物(1)



第247图 3号井戸出土遺物(2)

3号井戸出土土器観察表

番号	器 種	口 径	胴高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	13.4	4.1	6.3	ADEH	II	7	90%	墨書、底部外面「平」、RBb
2	坏	(14.0)	(4.0)	(8.0)	ADEH	II	4	25%	
3	坏	(14.0)	(3.3)	(8.4)	EH	II	7	40%	R
4	坏	(14.0)	(4.0)	(4.0)	DEH	II	6	30%	口縁内面沈線、LA
5	坏	(13.4)	3.4	8.0	DEH	II	5	70%	底部外面「平」不明瞭、RBb
6	坏	(14.0)	3.2	8.4	BEH	II	9	30%	RBb
7	坏	(15.2)	(2.9)	(9.6)	DEFH	I	5	40%	RBa
8	坏	(8.0)	(3.0)	(4.9)	BDEH	II	7	45%	RA
9	坏			8.2	DEH	II	7		底部外面「平」墨書、RA
10	坏			6.5	DEH	II	6		底部外面「平」墨書、LA
11	坏			8.0	EH	II	2		RA
12	坏			8.0	AEH	II	7		周辺手持箇所
13	坏			7.5	ABDEH	II	7		底部 RBb
14	坏			9.8	DEH	I	5		底部 RA
15	坏			(8.0)	DEH	II	6		底部 RBb
16	小形坏	8.2	2.3		BDEH	II	5	100%	静止糸切り後周辺部、R
17	碗	18.4	6.2	10.8	DEH	II	5	100%	RA
18	高台盤	(22.6)	(3.7)	(18.4)	DEH	II	5	20%	LA
19	高 坏	18.4	10.4	11.6	BDEGH	II	5	95%	脚内面「平」墨書
20	高 坏				CDEH	II	6		脚部
21	蓋			19.0	DEH	II	7	40%	R
22	蓋				BDEH	II	5	40%	外面「平」、R
23	蓋				EGH	I	5		転用磁、環状つまみ
24	蓋				EH	I	6	つまみ	転用磁、朱墨
25	蓋				EII	II	5	つまみ	
26	蓋				CDEH	II	6	つまみ	
27	蓋				EFGH	I	5	つまみ	R
28	甕				BCEH	II	9		転用磁、割口を面取している、光沢持つ 程度減
29	甕	(26.0)		(13.0)	EGH	II	10	口 輪 底 部	全面濃緑色の釉

1号土壌

住居群の北端に近いM-10グリッドに位置し、周囲には他の遺構はない。プランはやや隅の丸い方形を呈し、主軸方向はN-90°-Wを指す。規模は東西2.2m、南北2mで、深さは50cmである。壁は急角度で立ち上がり、墳底は堅緻ではあるが平坦ではなく、不整形の浅い落ち込みが見られる。覆土にはロームブロック・黒色土粒子が多く含まれ、全体的にしまった土である。

出土遺物は図示した須恵器が2点である。

2号土壌

2～4号土壌は8・9号掘立柱建物跡の東のQ-12グリッドに位置し、3基はまとまっている。2号土壌は直径1mのP形プランを呈し、深さは23cmを測る。規模は小さいが、土壌内と周辺から多量の土器が出土しており、土師器94片、須恵器47片が検出されている。個体を識別すると、土師器は甕1個体分の細片で、須恵器は坏5・蓋1・甕1個体である。しかし、いずれも細片で、図化で

きたのは須恵器坏1点である。他に桃の種子が2点出土している。

3号土壌

直径95cmの円形プランを呈し、深さは50cmである。覆土中には焼土が含まれている。遺物は土師器3片、須恵器10片である。

4号土壌

長径97cm、短径83cmの楕円形を呈し、主軸方向はN-42°-Wを指している。深さは16cmであるが、墳底から深さ30cmの小ピットが穿たれている。出土遺物はない。

5号土壌

5・6号土壌は斜面裾部で25号掘立柱建物跡の南、28号竪穴住居跡の西に位置する。5号土壌の主軸方向はN-8°-Eを指し、隅の丸い長方形プランを呈する。規模は南北127cm、東西83cmで深さ10cmを測る。出土遺物はない。

6号土壌

隅の丸い長方形プランを呈し、主軸方向はN-11°-Eを指す。規模は南北162cm、東西95cm、深さ20cmを測る。覆土中には焼土粒子を含んでいる。出土遺物は土師器9片、須恵器7片で、土師器には赤彩された坏がある。

7号土壌

7～10号土壌は32号竪穴住居跡の西の斜面裾部に位置する。7号土壌は直径約1mの円形プランを呈し、深さは25cmを測る。覆土中には焼土を含み、硬化した部分がある。出土遺物はない。

8号土壌

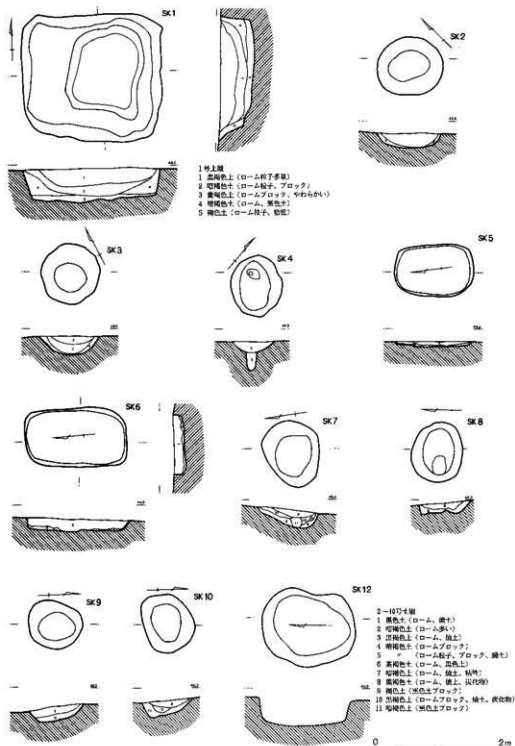
直径約90cmの円形プランを呈し、深さは18cmである。出土遺物はない。

9号土壌

直径約80cmの円形プランを呈し、深さは23cmである。出土遺物はない。

10号土壌

直径90cm程の円形プランを呈し、深さは25cmを測る。出土遺物は須恵器蓋が1点である。



第248図 1～10号・12号土壌

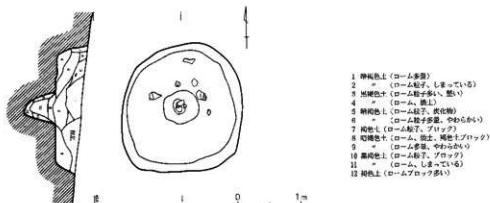
11号土壇

角度が最も急な斜面中腹に位置し、直径1mの円形プランを呈している。深さは最深部で50cmを測り、壇底は平坦で堅緻である。中央には直径50cm、深さ50cmのピットが穿たれており、柱痕が観察できた。覆土中には焼土、炭化物が含まれている。覆土の堆積状態は斜面上方からの流入が主体であるが、柱痕は壇底より上には見られず、埋没時には既に柱は残存していなかったと思われる。

出土遺物は土器、鉄器である。土師器は6片で全て甕の小片であり、須恵器は環6・蓋1・甕2個体と15×10cm程の砂岩1、華大のチャート1、片岩1がある。また、鋤先の一部と思われる鉄器が出土している。

12号土壇

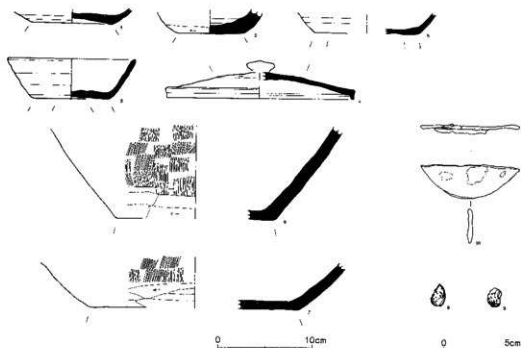
斜面が終わり平坦になりはじめた37号竪穴住居跡の南に位置する。南北にやや長い楕円形プランを呈し、長径153cm、短径120cm、深さ45cmを測る。主軸方向はN-18°-Eを指す。出土遺物はない。



第249図 11号土壇

土壇出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕			8.6	DEH	II	5	底部	SK-1、RA
2	甕			(6.8)	DEFH	I	5	底部	SK-1、R
3	環	(13.6)	(4.3)	(8.0)	EH	II	5	25%	SK-2、RBb、油煙
4	蓋	(19.6)			DEH	II	5	25%	SK-10、R
5	環		(2.1)	(11.2)	ABDEH	I	5	底部	SK-11、B
6	甕		(9.9)	(16.3)	BEF	I	6	底部	SK-11
7	甕		(5.0)	(22.0)	BDH	I	5	底部	SK-11



第250図 土壇出土遺物

1号溝

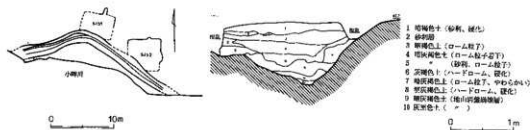
斜面肩部のAAとABラインに、等高線と平行して東西約55mが確認できたが、人家や墓地の跡地であったため攪乱も多い。主軸方向はN-76°-Wを指し、ほぼ直線的に走っている。幅はほぼ1mで、深さは50cm～70cmを測る。断面形は底面がやや平坦なU字状を呈し、西側から東側に向かって緩い傾斜をしている。日枝神社脇を通過する現在の山道に平行しているため、確認時には新しい時期の遺構と考えていたが、表土下の暗褐色土を掘り込んでおり、遺物も奈良時代以外は出土しないので、集落に伴う溝であると認識した。

出土遺物は覆土中のものが111点、遺構確認時に上面及び周辺で検出したもの108点の総計219点が出土している。このうち須恵器は119点、土師器100点である。

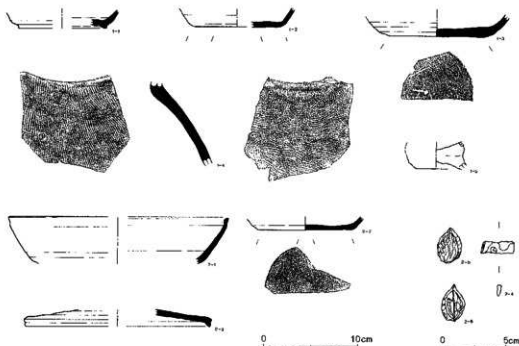
2号溝

斜面が終わって平坦面になった、AHラインに沿ってほぼ東西に直線的に走っている。東西56mにわたって調査を実施し、途中3号井戸の南辺の一部を破壊している。幅は遺構確認時の状態が一定ではなかったので、1m～1.9mを測るが、良好な面では1.7m～1.9mである。深さは45cm～70cmで、部分的には高低があるが全体的に見ればほぼ水平に近く、傾斜はない。断面形は緩やかなU字形を呈しており、北壁が急で南壁が緩傾斜で立ち上がる傾向にある。

遺物は386点出土しており、須恵器371点、土師器12点と他に刀子刃部破片1、桃種子2点が検出されている。



第253図 3号溝



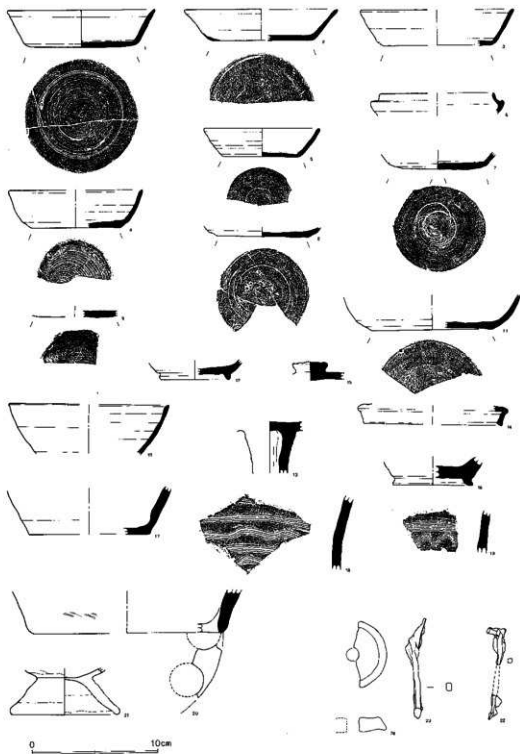
第254図 1号・2号溝出土遺物

1号溝出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台杯			(9.3)	DEH	I	6	底部	R
2	杯			(9.0)	AELI	I	7	底部	
3	杯			(10.4)	DEH	II	5	底部	RA
4	甕				BEFH	I	6	頸部	
5	台付甕				ABEFH	III	3	台部	

2号溝出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗	(23.4)			DEH	I	5	口縁	
2	杯			(10.0)	EH	I	6	底部	RBa
3	蓋	(19.8)			BDEH	II	5	5%	



第255図 グリッド出土遺物

グリッド出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	施 色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	15.8	4.0	11.9	AC~II	II	6	100% AE・D-14、LA、磨滅
2	坏	(16.4)	(3.3)	(11.4)	BDEH	II	5	20% SD2、RA
3	坏	(16.4)	(3.8)	(11.4)	EII	II	5	10% SD9
4	坏	(14.2)	(4.0)	(9.4)	DEH	II	5	20% AE-14、C、ヘラ記号
5	坏	(12.4)	(3.0)	(8.0)	DEH	I	5	15% 表採、RA
6	坏	(12.1)			EG	I	5	口 縁 表採
7	坏			9.4	B~EH	II	7	底 部 AD-829
8	坏			9.6	DEH	II	6	底 部 AG-15、RA
9	坏			(9.0)	DEH	II	5	底 部 攪乱、施記号
10	碗	(17.1)			DEH	II	5	口 縁 攪乱
11	碗			(12.7)	BEH	II	6	底 部 攪乱、LA
12	高台坏			(7.4)	BEH	I	5	底 部 攪乱
13	高 坏				DEH	II	6	脚 部 攪乱
14	蓋	(14.6)			EGH	I	9	口 縁 攪乱
15	蓋				DEH	II	5	つまみ 攪乱
16	瓶			(8.6)	ADEH	II	6	底 部 攪乱
17	甕			(13.0)	DEH	II	5	底 部 攪乱
18	甕				BCEH	II	5	表採
19					BEH	II	7	攪乱
20	甕			(20.6)	EFH	II	9	底 部 攪乱
21	台付甕			(11.6)	A~F	II	4	台 部 AR-22

グリッド出土遺物

奈良時代の遺物は、竪穴住居跡などの遺構以外からも出土している。これらの多くは遺構確認時に表土層から出土したものと、近世の遺構や攪乱に混入していたものである。6は蓋受のある7世紀の坏で、24は1号塚の盛土出土の石製紡錘車である。



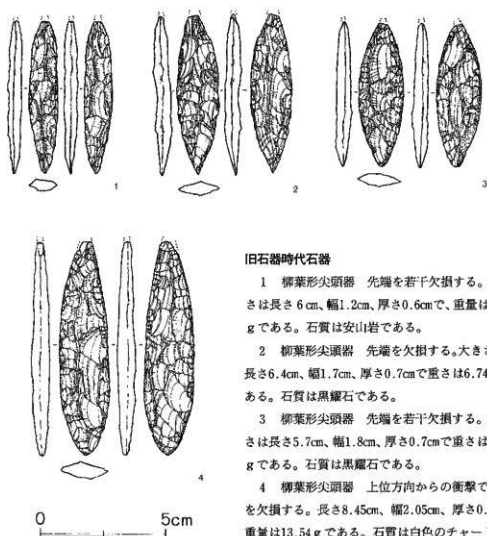
上空から見た1号溝と2号溝に挟まれた地区

2 その他の時代の遺構と遺物

光山遺跡群では奈良時代を中心とした集落の他に、旧石器・縄文時代と中近世の遺構と遺物も検出されている。ここでは、これらについて時代順に述べていく。

(1) 旧石器・縄文時代

旧石器時代の石器は4点の尖頭器が出土しているが、3点は遺構確認時および奈良時代の竪穴住居跡の覆土中から出土したもので、1点だけが旧石器時代のために設定したグリッドで検出されている。これらは全て上位台地から出土しており、1は台地奥部で小さな谷の北斜面である、F-7グリッドのソフトルーム中から出土している。



旧石器時代石器

1 柳葉形尖頭器 先端を若干欠損する。大きさは長さ6cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmで、重量は4.44gである。石質は安山岩である。

2 柳葉形尖頭器 先端を欠損する。大きさは、長さ6.4cm、幅1.7cm、厚さ0.7cmで重さは6.74gである。石質は黒曜石である。

3 柳葉形尖頭器 先端を若干欠損する。大きさは長さ5.7cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmで重さは5.91gである。石質は黒曜石である。

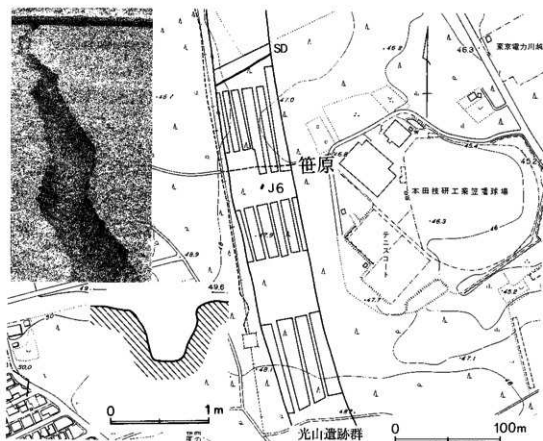
4 柳葉形尖頭器 上方方向からの衝撃で先端を欠損する。長さ8.45cm、幅2.05cm、厚さ0.7cm、重量は13.54gである。石質は白色のチャート。

第256図 旧石器時代石器

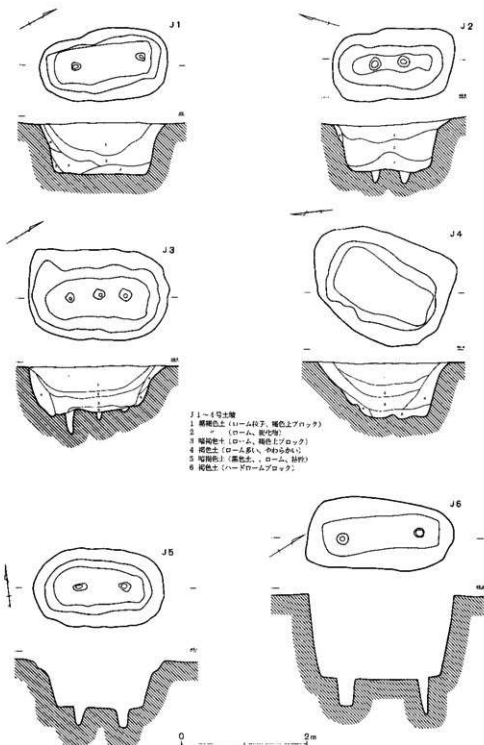
縄文時代の遺構は、笹原地区を含めて土壌が6基で、全て落とし穴である。台地上位面で4基、斜面部で1基、そして光山地区北側の台地奥部の笹原地区で1基である。土壌からの出土遺物はない。

なお、笹原地区の調査については、光山地区の北の小さな谷から長さ200mに涉って実施したもので、幅2mのトレンチを5m間隔で5本設定し、遺構が検出された周辺および地形的に可能性の高そうな3地点を拡張した。その結果、縄文時代の土壌1基と時期不明の溝が1条検出された。遺物は須恵器破片1点と、刷毛目のあるおそらく古墳時代前期であろう甕の破片が2点出土しているが、いずれも細片で遺構からは検出されていない。谷の調査も実施したが、黒色土が1m程堆積しており、現在でも西から東へ細い流路が確認できる。やはり遺物は出土せず、奈良時代には現状に近い程度に埋没していたと考えられる。

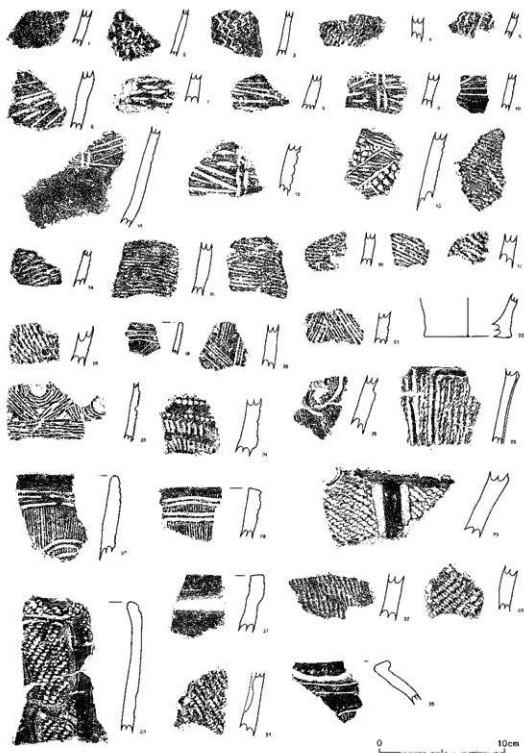
縄文時代の遺物は遺構に伴うものではなく、グリッドおよび奈良時代の遺構の覆土中から出土したものである。また、特に集中して出土する地点もなく散発的に検出されている。土器の出土位置については、台地の上位面からの出土はなく、斜面部分から縄文前期が主体的に、下位台地からは縄文中期が中心であった。石鐙は15点出土しているが、土器の出土状況とは違って、上位台地から斜面にかけて出土したものである。



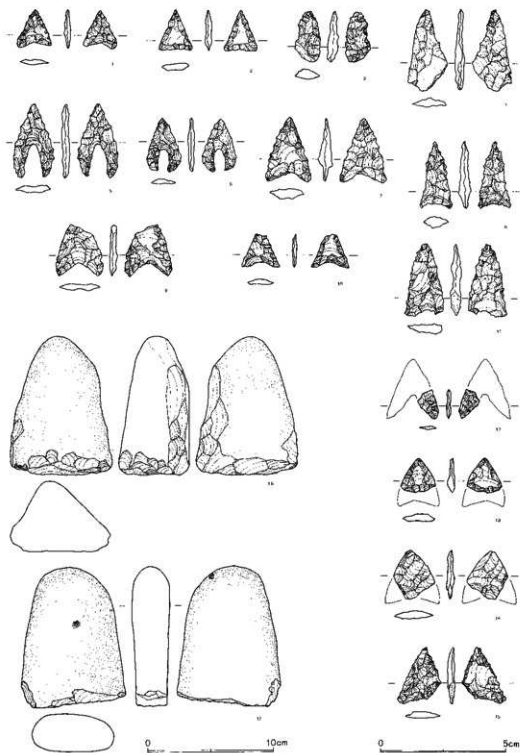
第257図 笹原地区全測図



第258図 J 1～6号土壇



第259図 縄文土器



第260図 縄文時代の石器

縄文時代土壌一覧表

番号	位 置	形 態	規模(長×短×深)m	主軸方向	出土遺物	時 期	そ の 他
J 1	N-6	隅丸方形	2.04×1.16×0.83	N-27°-E	なし	縄 文	小ピット2
J 2	P-12	隅丸方形	2.02×1.12×0.78	N-43°-W	なし	縄 文	小ピット2
J 3	L-5	隅丸方形	2.23×1.43×0.78	N-32°-E	なし	縄 文	小ピット3
J 4	I-6	不 整 形	2.33×1.68×0.88	N-41°-E	なし	縄 文	
J 5	AB-14	楕 円 形	2.09×1.24×0.73	N-83°-W	なし	縄 文	小ピット2
J 6	笹 原	楕 円 形	2.34×1.11×1.46	N-33°-E	なし	縄 文	小ピット2

第259図の1～18は早期の土器群である。1と2は撚糸文、3～5は山形の押型文で、6～12は沈線文土器である。13～18は条痕文土器で、13、15と16は表裏に施文されている。19～23は前期末の土器群である。19～22は諸磯C式で、23は十三菩提式の胴部破片である。24～34までは中期の土器群で、24～26は勝坂式の終末に、27と28は加曾利E2式の連弧文系の土器であろう。29～34は加曾利E3式である。35は本遺跡では唯一の後期の土器である。堀之内式の注口土器であろう。

以上の土器は遺構からの出土ではなく、全てグリッドおよび奈良時代の遺構などから出土したもので、縄文時代の遺構である土壌と直接関連する出土状況にはない。また、包含層を形成しているものでもなく、まとまって検出されたものではない。遺跡全体の傾向としては、斜面部からは早期や前期の土器群が、小畔川に近い台地の下位面から中期の土器群が出土している。台地の上位面から出土しているのは、35の後期の土器だけである。

第260図の1～15は石鏃である。8点が黒曜石製で、2・4・7～8・10～11・13の7点がチャート製である。16はスタンプ形石器、17は凹石で、いずれも砂岩系の石である。

これらの石器は、土器と同様に遺構に伴うものではなく、グリッドや奈良時代の竪穴住居跡などからの出土である。ただし、分布状況は土器とは異なり、10点が台地の上位面からで、3点が斜面部から、2点が台地の下位面からの出土である。石器類も特に集中するような出土状況にはなく、台地の上位面から斜面にかけて点在するような傾向にある。

光山遺跡群における、旧石器・縄文時代の様相は、落とし穴、尖頭器や石鏃といった狩猟に関わる遺構・遺物で中心で、土器は早期から後期まで見られるが、その数は少なく、最も多い中期ですら10数点である。また、笹原地区では土壌が検出されているが、遺物は皆無である。周辺の表面観察・分布調査でも縄文土器は採集されておらず、おそらく集落は存在しないのであろう。

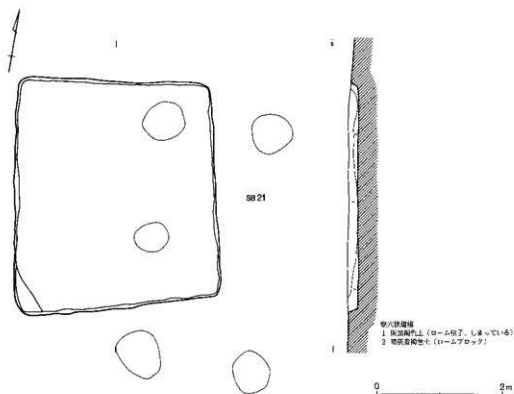
(2) 中・近世

中世については、竪穴状遺構1基とここから出土した陶器片1、およびグリッドから青磁碗の破片が出土している。また、時期不明の塚が調査区内に2基と周辺に3基あるが、ここでは近世に所属するものとして扱った。

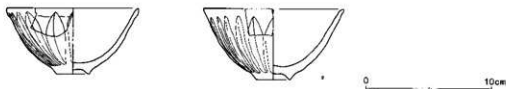
竪穴状遺構は上位台地の平坦面である、R-12グリッドに位置し、21号掘立柱建物跡を削平して構築されている。主軸方向はN-12°-Wを指し、プランは南北にやや長い若干歪んだ長方形を呈している。規模は南北3.6m、東西3.2mを測り、深さは18cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平であるが特に堅緻な部分はない。カマドや柱穴などの施設はない。

遺構に伴う遺物は淡緑色の釉が掛かった陶器の細片が1点だけである。中世に関しては、調査区の東に接するように、堀で区画された館跡と思われる遺構とともに東には板碑や五輪塔が置かれた一面がある。また、東にある現道は鎌倉街道・柏原街道に比定されており、中世的な色彩の強い地域でもある。

中世の遺物は4点あるが、実測可能なものは青磁碗2点である。1は下位台地面の攪乱から出土した口縁部の破片で、淡い緑灰色の釉が掛かり、外面には蓮弁文が見られる。2は42号竪穴住居跡の覆土中から出土した口縁部破片で、1とは別個体である。釉の色調は1と類似しており、同様に蓮弁文が施されている。



第261図 竪穴状遺構



第262図 青磁

近世の遺構と遺物は、小畔川に近い台地縁辺の比留間家の跡地から集中して検出されている。遺構は井戸1基と墓墳13基および溝3条で、ここから陶磁器や鏡が出土している。また、時期が不明ではあるが、塚も近世に含めて考えた。この他に笹原地区で時期不明の溝が1条検出されており、ここで扱うものとする。遺物は土壌出土のカワラケや古銭などと、井戸出土の陶磁器類に大別できる。土壌出土の古銭には寛永通宝と元祐通宝・皇宋通宝などの中国銭がある。

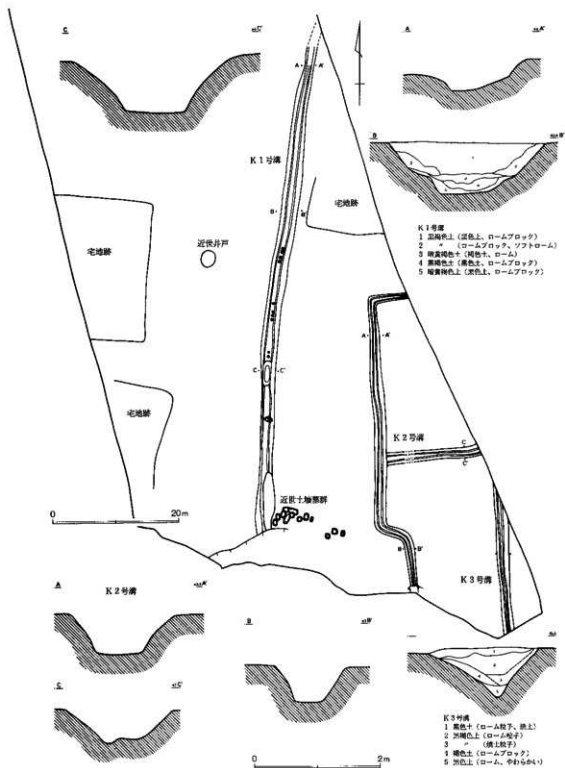
近世井戸

53号竪穴住居跡を破壊して穿たれており、確認面での直径は2.5mであるが、最上層には現代の瓦や瀬戸物が堆積しており、ゴミ穴として最近まで使用されていた。このため当初は攪乱として認識していたが、竪穴住居跡の調査に伴って掘り下げたところ、江戸時代の遺物が出土したため近世の井戸と判明した。しかし、ゴミ穴として使用する際に崩したり埋め戻したりしているようで、開口部以外の規模や構造は不明である。

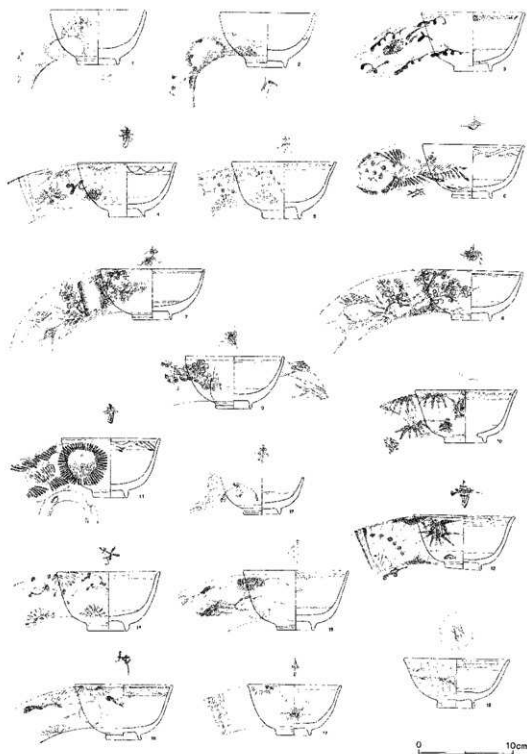
遺物の大部分は伊万里系の製品で、これに瀬戸・美濃系と在地系陶器、焙烙などがある。時代的には江戸時代から現代まで含んでいるが、ここでは現代の陶磁器類は除外した。

近世の遺物は第264図～第267図までと第268図の1～11および第269図は、53号竪穴住居跡の東壁で検出された井戸からの出土である。1と2は厚手で、草花文が淡いコバルト色で描かれた、波佐見の所謂「くらわんか茶碗」である。3～20・22～24・26～28までは、体部に丸みをもって緩やかに立ち上がるもので、33～42はやや小型であるが、ほぼ垂直に立ち上がるものである。28は刷毛目状に灰釉が掛かる瀬戸・美濃系の陶器である。29も灰釉が掛かり、貫入が入る陶器である。43は梅や竹が描かれたコンニャク版の絵皿で、口縁部は波状を呈している。44は飯能焼の片口で、灰緑色の釉が掛かる。48は菊花文の描かれた仏飯具である。49は伊万里系の髪油壺で、胎土は白色で釉は透明である。50は三島唐津の鉢で、赤褐色の胎土で白土を刷り込んで波状文を描いている。51は伊万里系の大皿で裏には「ツル」と釘描きされている。57は蛇の目高台の仏飯具、58は灯明台、59はひょうそくである。61は瓦質の土器で、62は鉄釉の灯明受台。70～72は焙烙で、把手は3ヵ所に付けられている。72には補修孔が穿たれている。73は瓦質の火鉢である。第268図1～11は砥石で、第269図は石臼である。

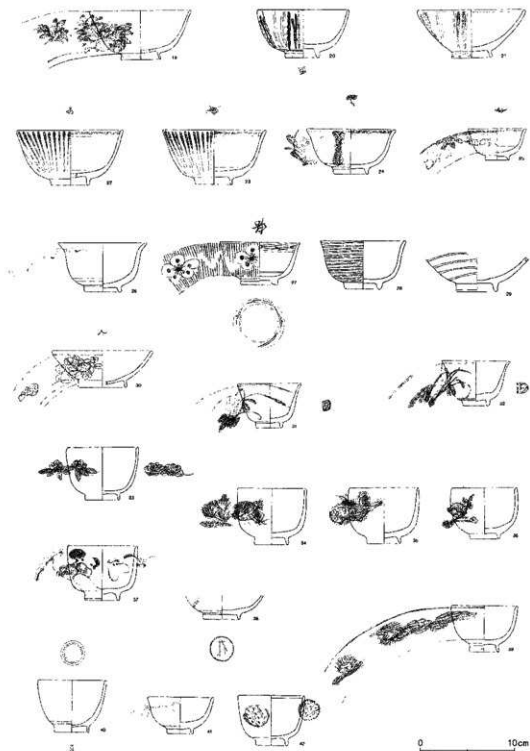
第268図の12～22は、グリッドや奈良時代の遺構などから出土したものであるが、全て近世の井戸や溝の周辺から検出されたものである。



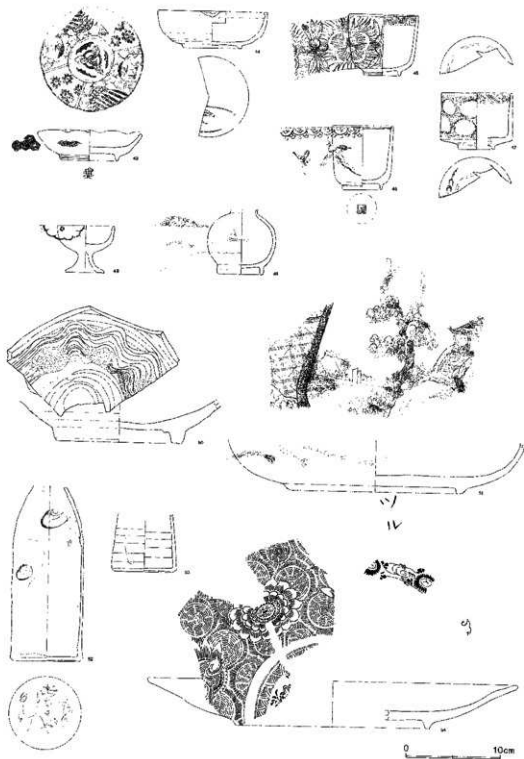
第263図 近世遺構分布図



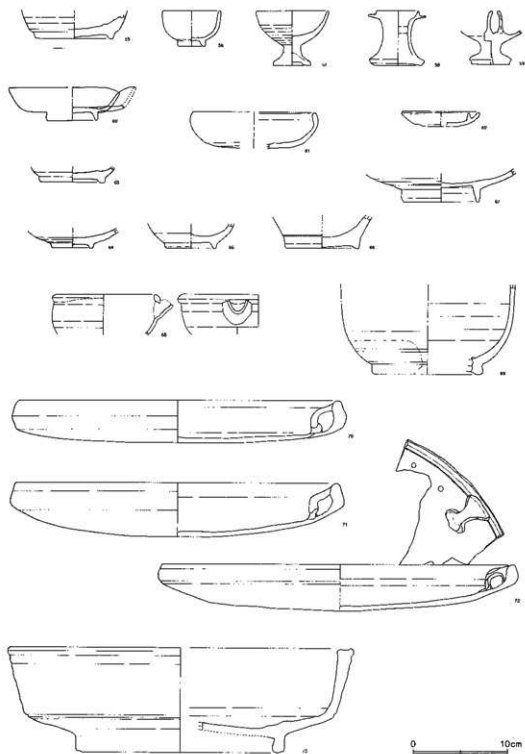
第264圖 近世陶磁器（1）



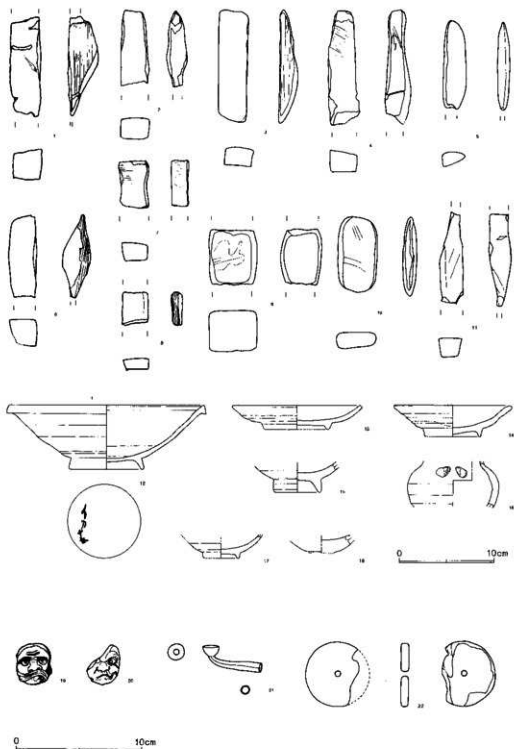
第265图 近世陶磁器 (2)



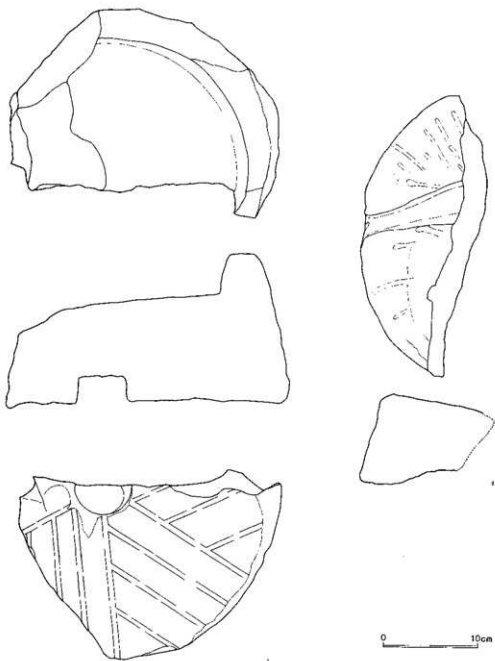
第266圖 近世陶磁器 (3)



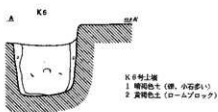
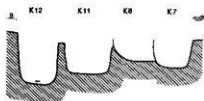
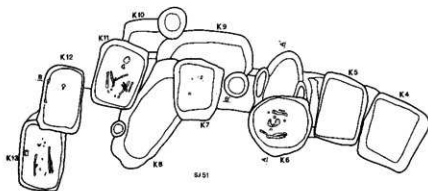
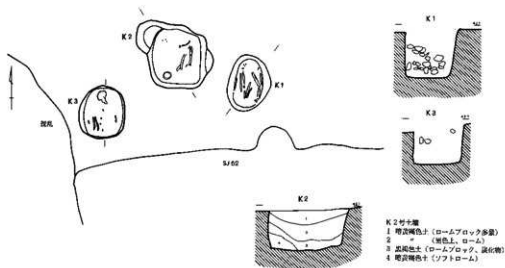
第267圖 近世陶磁器（4）



第268图 近世遺物(1)



第269図 近世遺物 (2)



0 2m

第270図 近世土壌

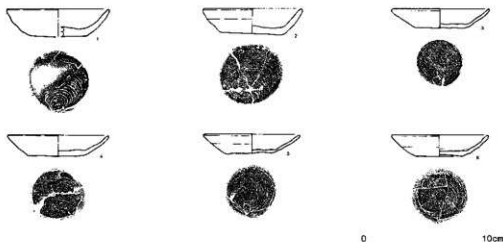
K 1号～13号土壌

近世の土壌は全て墓墳であり、小畔川河畔の一面に2群に分かれている。K 1号～3号土壌までの1群は、52号竪穴住居跡の北に並んでおり、2群は1群の西側に、10基が重複しながら集中している。遺物はカワラケ、古銭、鏡、銅像などが出土している。

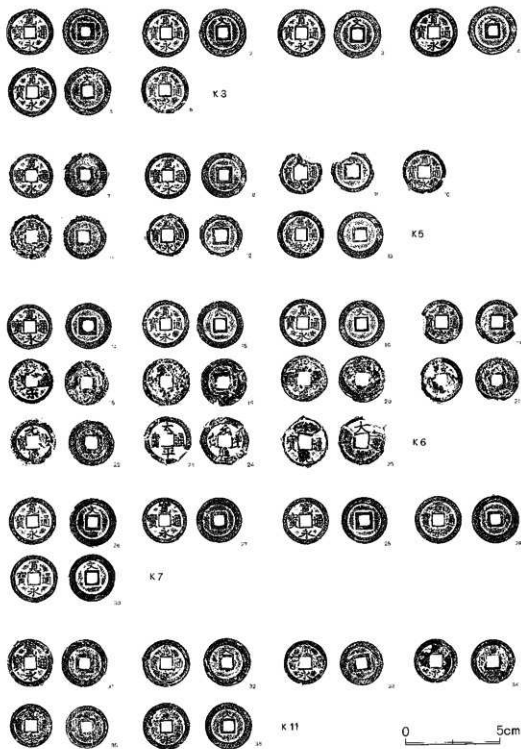
1～2はK 1号土壌、3～4はK 12号土壌、5～6はK 13号土壌出土のカワラケである。古銭は1～6まではK 3号土壌、7～13がK 5号土壌、14～25がK 6号土壌、26～30がK 7号土壌、31～36がK 11号土壌、37～41がK 13号土壌出土である。42～47はグリッドからの出土である。古銭はK 6号土壌以外は全て寛永通宝で、K 6号土壌からは寛永通宝の他に皇宋通宝・元祐通宝・太平通宝・元豊通宝・洪武通宝が出土している。また、48と49はK 12号土壌から出土した手鏡と銅像で、手鏡には「天下一藤原作」の文字が陽刻されている。

近世土壌一覧表

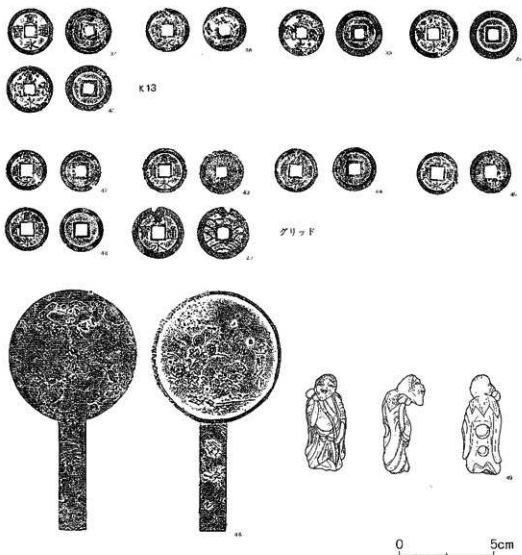
番号	位置	形態	規模(長×短×深)m	主軸方向	出土遺物	時期	その他
K 1	1 群	楕円形	0.9 × 0.7 × 0.76	N-7°-E	人骨、カワラケ	近世	
K 2	1 群	隅丸方形	1.0 × 0.94 × 0.64	N-S	人骨	近世	
K 3	1 群	円形	7.9 × 0.58	円	人骨、古銭	近世	
K 4	2 群	隅丸方形	1.06 × 0.96 × 1.32	N-28°-E	なし	近世	
K 5	2 群	隅丸方形	1.06 × 0.75 × 1.08	N-13°-E	古銭	近世	
K 6	2 群	円形	0.96 × 0.8	円	人骨、古銭	近世	
K 7	2 群	隅丸方形	0.97 × 0.75 × 0.42	N-8°-E	古銭	近世	
K 8	2 群	長楕円形	1.6 × 0.88 × 0.36	N-33°-E	なし	近世	
K 9	2 群	隅丸方形	1.54 × 不明 × 0.3	N-82°-W	なし	近世	
K 10	2 群	隅丸方形	不明 × 0.62 × 0.3		なし	近世	
K 11	2 群	隅丸方形	1.06 × 0.75 × 0.48	N-23°-E	人骨、古銭	近世	
K 12	2 群	隅丸方形	1.04 × 0.64 × 0.76	N-80°-E	鏡、カワラケ	近世	銅像、磁器片
K 13	2 群	隅丸方形	1.0 × 0.72 × 0.72	N-5°-E	人骨、カワラケ	近世	古銭



第271図 土壌出土カワラケ



第272图 古钱 (1)



第273図 古銭（2）

土墳墓からの古銭の出土状態からは、基本的には六文銭を意識していると考えられるが、実際に6枚出土しているのは、K 3号土墳とK 11号土墳で、他はやや増減がある。また、K 6号土墳からは、寛永通宝の他に北宋銭などの中国銭が7枚検出されている。K 12号土墳からは古銭の出土はないが手鏡と塑像が出土している。手鏡は全長12.6cmで、鏡部の直径は6.8cmである。

重複や形態から見ると、P1形のK 6号土墳が古く、古銭の出土していないK 12号土墳が新しいと考えられる。

K 1号溝

I-19グリッドからQ-18グリッドにかけて、ほぼ南北に80mに涉って直線的に確認できた。幅は1.5～2.5mで、深さは北側の浅い部分で30cm、最深部で90cmを測る。溝底は平坦で南に向かって傾斜している。

K 2号溝

M-20グリッドからQ-20グリッドにかけて約45mに涉って確認できたが、北端で東に直角に曲がり、南端では蛇行している。また、北のコーナーから25mの地点で、東へ向かう同規模の溝が接続している。幅は1.3～2mで、深さは60cmを測る。溝底は平坦で、北から南に傾斜をし、東西に走る枝溝は西に傾斜している。

K 3号溝

調査区の東南端を南北に走り、25mを調査できた。幅は2mで、深さは80cmを測り、断面形はV字状を呈している。溝底は南に傾斜している。

1号塚

遺跡北端に近いJ-9グリッドに位置し、直径5m、表土からの高さ52cmを測る。塚頂部の標高は49.26mで、木の根が多くやや崩れているが、ほぼ円形プランを呈している。盛土は黒褐色土を主体とし、全体に表土的でやわらかい。遺物は奈良時代の須恵器などが多量に出土したが、塚とは直接関連するものではなく、周辺の同時代の竪穴住居跡の覆土を盛土に使用したためであろう。

2号塚

斜面の肩部にあたるZ-11グリッドに位置し、西の調査区外には3号、4号塚および日枝神社の境内にある疱瘡様と呼ばれる塚の上に乗った小さな社がある。本塚を含めてこれら4基の塚は、川越と日高の市境に並び、元来これは笠橋村と下高萩村の境界にも相当する。

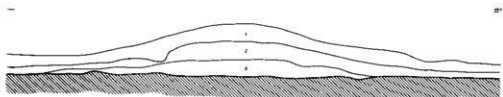
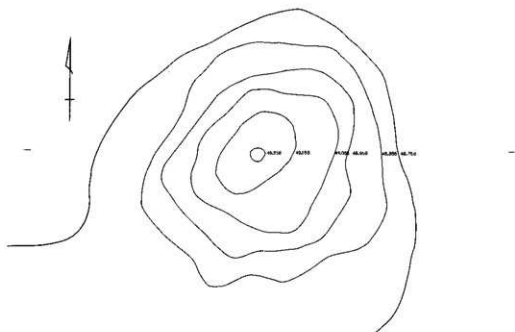
2号塚は直径5.2mの円形を呈すが、南側が斜面を削平した段になっているので、やや南に崩れている。現地表面からの高さは53cmを測り、盛土は大部分が表土と同様な土である。塚頂部の標高は、49mである。出土遺物はない。

3・4号塚

調査区外であるが、2号塚の西7mに2基が東西に接するように並び、両者とも直径5m、高さ50cm程で、塚頂部の標高は3号が49.4m、4号が49.5mを測る。これらの塚は同一目的で近い時期あるいは同一時期に構築されたもので、日枝神社とは有機的な関連を持つものである。塚頂部の社の存在を考えると、江戸時代の所産と考えるのが妥当ではなかろうか。

笹原地区溝

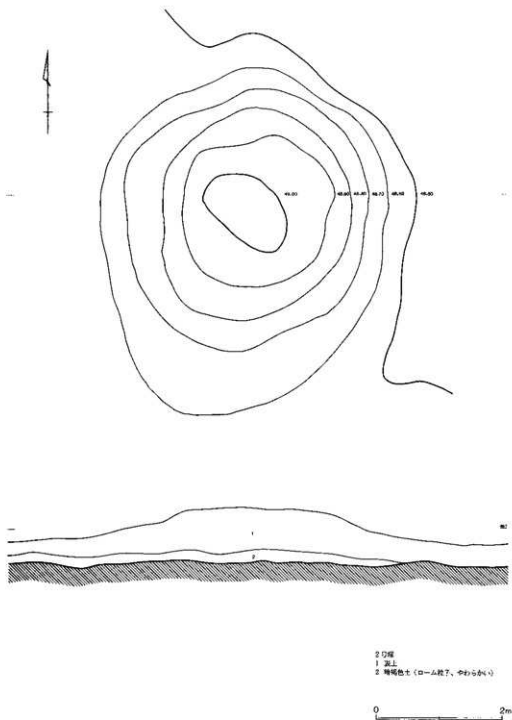
鶴ヶ島市との境に近い台地奥部に位置し、調査区を東西に横切るように検出された。幅35cm、深さ45cmで、断面形はU字状を呈し、溝底は東から西に傾斜をしている。出土遺物はないが、覆土全体が軟弱で、近世以降の所産であろう。



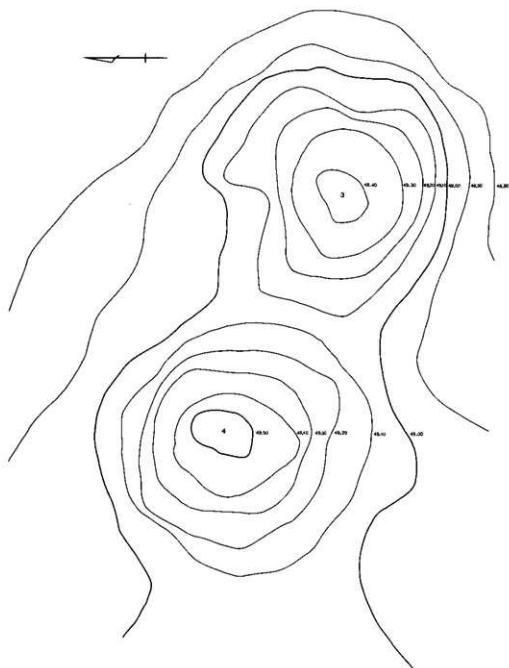
- 1 塚
1 表土
2 埋藏物土（ローム地子、やわらかい）
3 赤褐色土（ローム段了、しまっている）

0 2m

第274図 1号塚



第275図 2号塚



第276図 3・4号塚

光山道路群遺構新旧対照表

光山=光山道路・上猿=上猿ヶ谷戸遺跡・笹原=笹原遺跡

報告番号	発掘番号	遺物注記
1号住居跡	光山1号住居跡	KZN-SJ1
2号住居跡	光山2号住居跡	KZN-SJ2
3号住居跡	光山3号住居跡	KZN-SJ3
4号住居跡	光山4号住居跡	KZN-SJ4
5号住居跡	光山5号住居跡	KZN-SJ5
6号住居跡	光山6号住居跡	KZN-SJ6
7号住居跡	光山7号住居跡	KZN-SJ7
8号住居跡	光山8号住居跡	KZN-SJ8
9号住居跡	光山9号住居跡	KZN-SJ9
10号住居跡	光山10号住居跡	KZN-SJ10
11号住居跡	光山11号住居跡	KZN-SJ11
12号住居跡	光山12号住居跡	KZN-SJ12
13号住居跡	光山13号住居跡	KZN-SJ13
14号住居跡	光山14号住居跡	KZN-SJ14
15号住居跡	光山15号住居跡	KZN-SJ15
16号住居跡	光山16号住居跡	KZN-SJ16
17号住居跡	光山17号住居跡	KZN-SJ17
18号住居跡	光山18号住居跡	KZN-SJ18
19号住居跡	光山19号住居跡	KZN-SJ19
20号住居跡	光山20号住居跡	KZN-SJ20
21号住居跡	光山21号住居跡	KZN-SJ21
22号住居跡	光山22号住居跡	KZN-SJ22
23号住居跡	光山23号住居跡	KZN-SJ23
24号住居跡	光山24号住居跡	KZN-SJ24
25号住居跡	光山25号住居跡	KZN-SJ25
26号住居跡	光山26号住居跡	KZN-SJ26
27号住居跡	上猿1号住居跡	KZN-2-SJ1
28号住居跡	上猿2号住居跡	KZN-2-SJ2
29号住居跡	上猿3号住居跡	KZN-2-SJ3
30号住居跡	上猿4号住居跡	KZN-2-SJ4
31号住居跡	上猿5号住居跡	KZN-2-SJ5
32号住居跡	上猿6号住居跡	KZN-2-SJ6
33号住居跡	上猿7号住居跡	KZN-2-SJ7
34号住居跡	上猿8号住居跡	KZN-2-SJ8
35号住居跡	上猿9号住居跡	KZN-2-SJ9
36号住居跡	上猿10号住居跡	KZN-2-SJ10
37号住居跡	上猿11号住居跡	KZN-2-SJ11
38号住居跡	上猿12号住居跡	KZN-2-SJ12
39号住居跡	上猿13号住居跡	KZN-3-SJ13
40号住居跡	上猿14号住居跡	KZN-3-SJ14
41号住居跡	上猿15号住居跡	KZN-3-SJ15
42号住居跡	上猿16号住居跡	KZN-3-SJ16
43号住居跡	上猿17号住居跡	KZN-3-SJ17
44号住居跡	上猿18号住居跡	KZN-3-SJ18
45号住居跡	上猿19号住居跡	KZN-3-SJ19
46号住居跡	上猿20号住居跡	KZN-3-SJ20
47号住居跡	上猿21号住居跡	KZN-3-SJ21
48号住居跡	上猿22号住居跡	KZN-3-SJ22

報告番号	発掘番号	遺物注記
49号住居跡	上猿23号住居跡	KZN-3-SJ23
50号住居跡	上猿24号住居跡	KZN-3-SJ24
51号住居跡	上猿25号住居跡	KZN-3-SJ25
52号住居跡	上猿26号住居跡	KZN-3-SJ26
53号住居跡	上猿27号住居跡	KZN-3-SJ27
54号住居跡	上猿28号住居跡	KZN-3-SJ28
55号住居跡	上猿29号住居跡	KZN-3-SJ29
1号掘立	光山1号掘立	KZN-SB1
2号掘立	光山2号掘立	KZN-SB2
3号掘立	光山3号掘立	KZN-SB3
4号掘立	光山4号掘立	KZN-SB4
5号掘立	光山5号掘立	KZN-SB5
6号掘立	光山6号掘立	KZN-SB6
7号掘立	光山7号掘立	KZN-SB7
8号掘立	光山8号掘立	KZN-SB8
9号掘立	光山9号掘立	KZN-SB9
10号掘立	光山10号掘立	KZN-SB10
11号掘立	光山11号掘立	KZN-SB11
12号掘立	光山12号掘立	KZN-SB12
13号掘立	光山13号掘立	KZN-SB13
14号掘立	光山14号掘立	KZN-SB14
15号掘立	光山15号掘立	KZN-SB15
16号掘立	光山16号掘立	KZN-SB16
17号掘立	光山17号掘立	KZN-SB17
18号掘立	光山18号掘立	KZN-SB18
19号掘立	光山19号掘立	KZN-SB19
20号掘立	光山20号掘立	KZN-SB20
21号掘立	光山21号掘立	KZN-SB21
22号掘立	上猿1号掘立	KZN-2-SB1
23号掘立	上猿2号掘立	KZN-2-SB2
24号掘立	上猿3号掘立	KZN-2-SB3
25号掘立	上猿4号掘立	KZN-2-SB4
26号掘立	上猿5号掘立	KZN-2-SB5
27号掘立	上猿6号掘立	KZN-2-SB6
28号掘立	上猿7号掘立	KZN-2-SB7
29号掘立	上猿8号掘立	KZN-2-SB8
30号掘立	上猿9号掘立	KZN-2-SB9
31号掘立	上猿10号掘立	KZN-2-SB10
32号掘立	上猿11号掘立	KZN-2-SB11
33号掘立	上猿12号掘立	KZN-2-SB12
34号掘立	上猿13号掘立	KZN-2-SB13
35号掘立	上猿14号掘立	KZN-2-SB14
36号掘立	上猿15号掘立	KZN-2-SB15
37号掘立	上猿16号掘立	KZN-2-SB16
38号掘立	上猿17号掘立	KZN-3-SB17
39号掘立	上猿18号掘立	KZN-3-SB18
40号掘立	上猿19号掘立	KZN-3-SB19

報告番号	発掘番号	遺物注記
1号井戸	上猿14号住居跡	KZN 2-SJ14
2号井戸	上猿9号土壇	KZN 2-SK 9
3号井戸	上猿13号住居跡	KZN 2-SJ13
1号土壇	光山21号土壇	KZN-SK21
2号土壇	光山24号土壇	KZN-SK24
3号土壇	光山25号土壇	KZN-SK25
4号土壇	光山26号土壇	KZN-SK26
5号土壇	上猿1号土壇	KZN 2-SK 1
6号土壇	上猿2号土壇	KZN 2-SK 2
7号土壇	上猿3号土壇	KZN 2-SK 3
8号土壇	上猿4号土壇	KZN 2-SK 4
9号土壇	上猿5号土壇	KZN 2-SK 5
10号土壇	上猿6号土壇	KZN 2-SK 6
11号土壇	上猿8号土壇	KZN 2-SK 8
12号土壇	上猿10号土壇	KZN 2-SK10
1号溝	上猿1号溝	KZN 2-SD 1
2号溝	上猿4号溝	KZN 2-SD 4
3号溝	上猿15号溝	KZN 3-SD15
J 1号土壇	光山2号土壇	KZN-SK 2
J 2号土壇	光山23号土壇	KZN-SK23

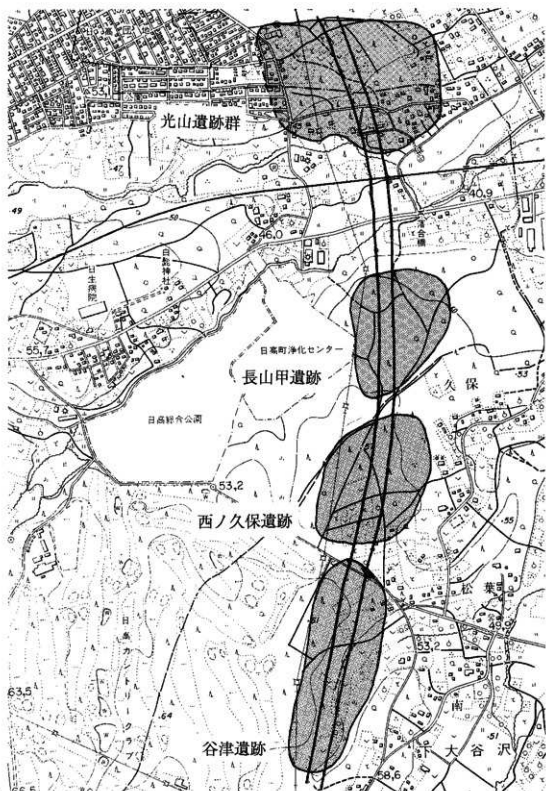
報告番号	発掘番号	遺物注記
J 3号土壇	光山29号土壇	KZN-SK29
J 4号土壇	光山33号土壇	KZN-SK33
J 5号土壇	上猿7号土壇	KZN 2-SK 7
J 6号土壇	笹原1号土壇	SSIIR-SK 1
K 1号井戸	上猿3号井戸	KZN 3-SE 3
K 1号土壇	上猿17号土壇	KZN 3-SK17
K 2号土壇	上猿18号土壇	KZN 3-SK18
K 3号土壇	上猿19号土壇	KZN 3-SK19
K 4号土壇	上猿22号土壇	KZN 3-SK22
K 5号土壇	上猿23号土壇	KZN 3-SK23
K 6号土壇	上猿24号土壇	KZN 3-SK24
K 7号土壇	上猿25号土壇	KZN 3-SK25
K 8号土壇	上猿26号土壇	KZN 3-SK26
K 9号土壇	上猿27号土壇	KZN 3-SK27
K10号土壇	上猿28号土壇	KZN 3-SK28
K11号土壇	上猿29号土壇	KZN 3-SK29
K12号土壇	上猿30号土壇	KZN 3-SK30
K13号土壇	上猿31号土壇	KZN 3-SK31
K 1号溝	上猿11号溝	KZN 3-SD11
K 2号溝	上猿12号溝	KZN 3-SD12
K 3号溝	上猿18号溝	KZN 3-SD18

Nagayamakou

Nisinokubo

長山甲・西ノ久保





第277図 長山甲・西ノ久保遺跡位置図

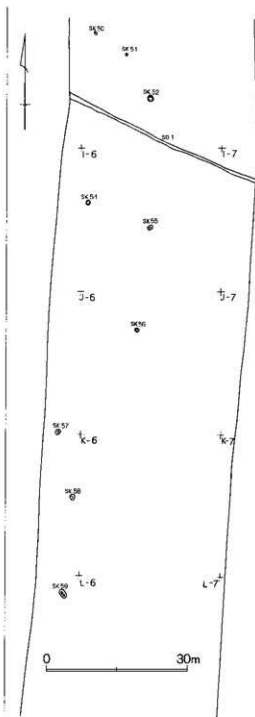
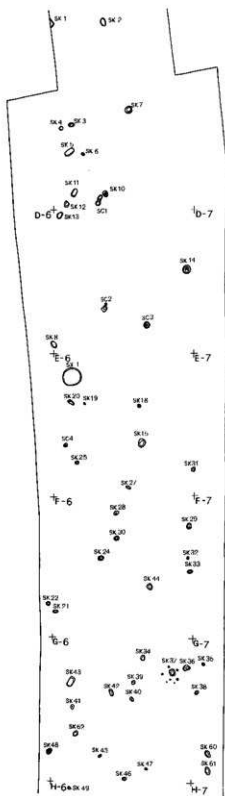
V 長山甲遺跡の遺構と遺物

長山甲遺跡は西ノ久保遺跡と小さな谷を挟んだ北側に位置し、南は小畔川とその対岸の光山遺跡群を望むことができる。遺跡の標高は中央部で53mを測り、南に向かって傾斜をするが、遺跡の範囲が明瞭な程に傾斜が強くなり、標高約42mの低地面との間に緩やかな崖を形成している。途中、標高44.5～45.3mの斜面には、3ヵ所の湧水が認められる。崖と低地部の調査も実施したが、遺構と遺物は発見できなかった。調査前の状況は全域が雑木林であり、雑草や野うさぎも多く、人乎もほとんど加わっていなかった。このような状況であたので、調査はテントを移動しながら、そして調査用器材や機械類の運搬路を造りながら、南から北へ作業を進めた。

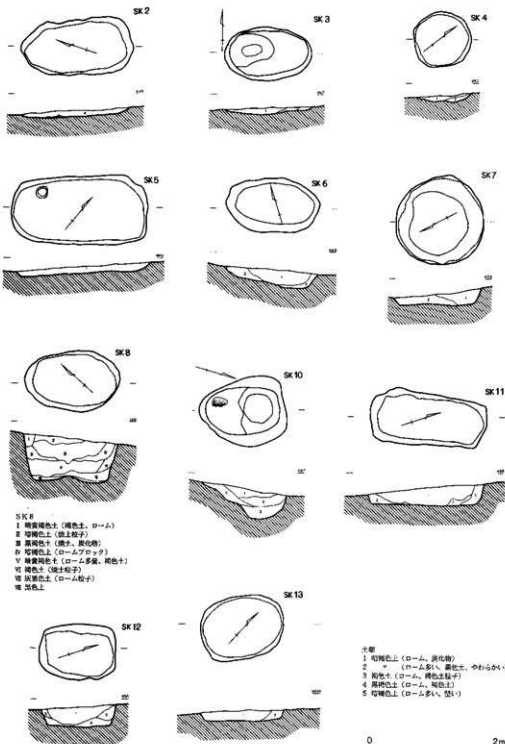
確認された遺構は土壇59基と集石4基および溝1条であるが、遺物は縄文時代以外には須恵器破片が2点出土しているだけである。土器の他には、石鏃やスタンプ形石器などがある。なお、遺構確認時に全ての落ち込みに番号を付けたので、調査によって遺構ではないことが判明したものについては削除し、これらの遺構番号は欠番とした。



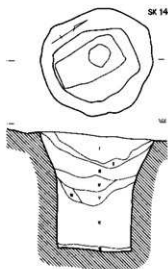
北から見た調査区南端



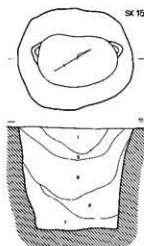
第278圖 長山甲道跡全圖



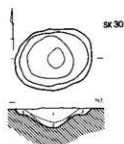
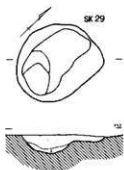
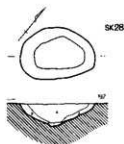
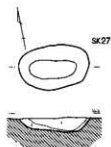
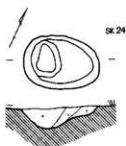
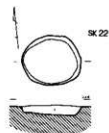
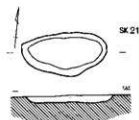
第279図 長山甲遺跡土層 (1)



- SK 14
 I 灰褐色土 (ローム、焼土、炭化物)
 II 暗褐色土 (ローム)
 III 〃 (ローム多量)
 IV 褐色土 (ローム多量)
 V 灰褐色土 (ローム、黒色土)
 VI 暗褐色土 (ロームブロック、灰土)
 VII 灰褐色土 (ローム多い)
 VIII 暗褐色土 (ロームブロック多量)

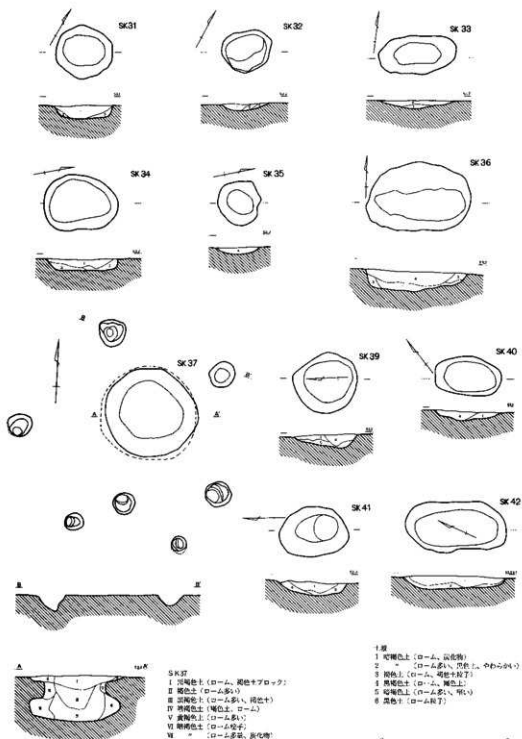


- SK 15
 I 灰褐色土 (ローム、褐色土)
 II 暗褐色土 (ローム灰土、やわらかい)
 III 〃 (ロームブロック)
 IV 褐色土 (ローム多い)
 V 暗褐色土 (ローム多い、やわらかい)

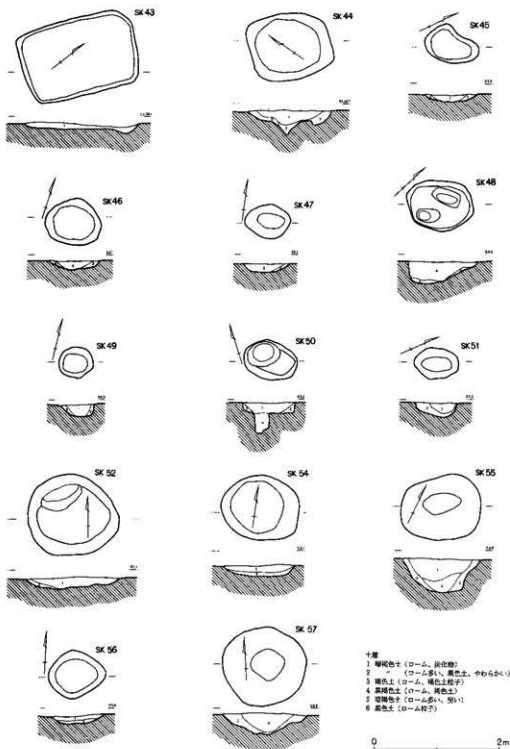


- 十層
 I 暗褐色土 (ローム、灰褐色)
 II 〃 (ローム多い、褐色土、やわらかい)
 III 褐色土 (ローム、暗褐色土)
 IV 灰褐色土 (ローム、褐色土)
 0 2m

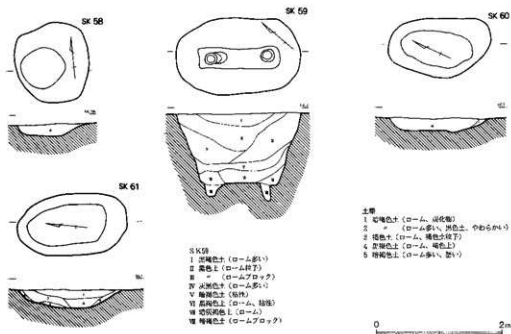
第280図 長山甲遺跡土壌 (2)



第281図 長山甲遺跡土壌(3)



第282図 長山甲遺跡土坑 (4)

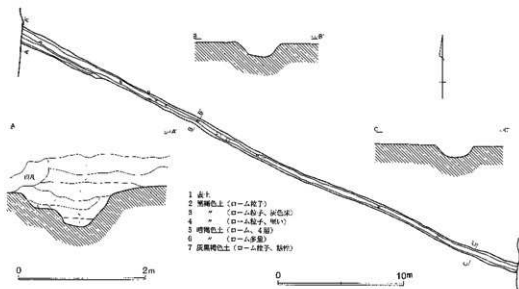


第283図 長山甲遺跡土坑(5)

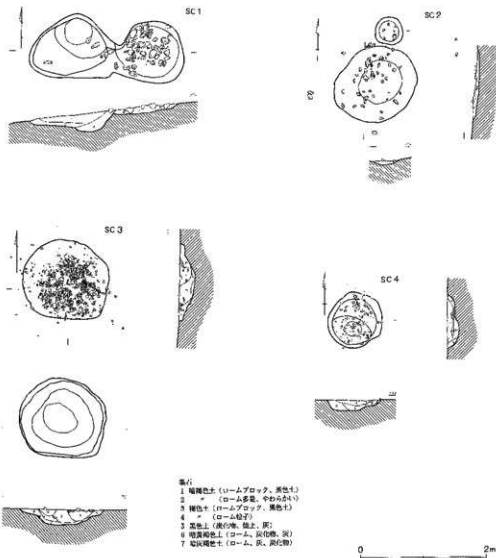
長山甲遺跡土坑一覧表

番号	位置	形態	規模(長×短×深)m	主軸方向	出土遺物	時期	その他
2	B-6	楕円形	1.8 × 0.86 × 0.1	N-18°-W	縄文土器	縄文時代	落とし穴
3	C-6	楕円形	1.4 × 0.86 × 0.1	N-89°-W		縄文時代	
4	C-6	円形	0.9 × 0.1	円		縄文時代	
5	C-6	楕円方形	2.18 × 1.08 × 0.12	N-51°-E		縄文時代	
6	C-6	楕円形	1.48 × 0.84 × 0.26	N-71°-W		縄文時代	
7	C-6	円形	1.4 × 0.28	円		縄文時代	
8	D-5	楕円形	1.58 × 0.96 × 0.64	N-49°-W		縄文時代	
10	C-6	不整形	1.38 × 1.08 × 0.44	N-16°-W		縄文時代	
11	C-6	楕円方形	1.86 × 0.9 × 0.32	N-18°-E		縄文時代	
12	C-6	楕円方形	1.22 × 0.88 × 0.32	N-19°-E		縄文時代	
13	D-6	楕円形	1.32 × 1.0 × 0.18	N-48°-E	縄文土器	縄文時代	落とし穴
14	D-6	円形	1.7 × 1.82	円		縄文時代	
15	E-6	楕円形	1.84 × 1.58 × 1.64	N-32°-E		縄文時代	
21	F-6	楕円形	1.34 × 0.7 × 0.12	N-84°-E		縄文時代	
22	F-5	円形	0.85 × 0.15	円		縄文時代	
24	F-6	楕円形	1.2 × 0.8 × 0.3	N-65°-E		縄文時代	
25	E-6	楕円形	1.0 × 0.78 × 0.18	N-57°-E		縄文時代	
27	E-6	楕円形	1.12 × 0.7 × 0.22	N-78°-W		縄文時代	
28	F-6	楕円形	1.2 × 0.82 × 0.35	N-51°-E		縄文時代	
29	F-6	楕円形	1.38 × 1.2 × 0.3	N-43°-E		縄文時代	
30	F-6	楕円形	1.22 × 0.98 × 0.32	N-88°-W	縄文時代	縄文時代	
31	E-6	円形	0.88 × 0.22	N-59°-E	縄文時代	縄文時代	

番号	位置	形態	規模(長×短×深)m	主軸方向	出土遺物	時期	その他
32	F-6	楕円形	0.78×0.64×0.1	N-62°-E		縄文時代	
33	F-6	楕円形	1.22×0.6×0.12	N-83°-E		縄文時代	
34	G-6	楕円形	1.18×0.86×0.18	N-9°-E		縄文時代	
35	G-7	円形	0.6×0.11	円		縄文時代	
36	G-6	楕円形	1.64×1.06×0.31	N-99°-E		縄文時代	
37	G-6	円形	1.43×0.62	円		縄文時代	貯蔵穴
39	G-6	円形	1.02×0.2	円		縄文時代	
40	G-6	楕円形	1.05×0.62×0.13	N-51°-W		縄文時代	
41	G-6	楕円形	1.07×0.79×0.2	N-1°-W		縄文時代	
42	G-6	楕円形	1.6×0.74×0.2	N-24°-W		縄文時代	
43	G-6	隅丸方形	1.85×1.23×0.1	N-22°-E		縄文時代	
44	F-6	隅丸方形	1.33×1.06×3.8	N-35°-W		縄文時代	
45	G-6	楕円形	0.84×0.45×0.1	N-25°-E		縄文時代	
46	G-6	円形	0.78×0.14	円		縄文時代	
47	G-6	楕円形	0.72×0.54×0.13	N-81°-E		縄文時代	
48	G-6	楕円形	1.03×0.78×0.35	N-43°-E		縄文時代	
49	H-6	円形	0.5×0.18	N-77°-E		縄文時代	
50	H-6	楕円形	0.85×0.52×0.16	N-44°-W		縄文時代	
51	H-6	楕円形	0.7×0.48×0.22	N-24°-E		縄文時代	
52	H-6	円形	1.34×0.18	円		縄文時代	
54	I-6	楕円形	1.25×1.03×0.17	N-81°-W		縄文時代	
55	I-6	楕円形	1.26×0.92×0.54	N-64°-E		縄文時代	
56	J-6	楕円形	0.9×0.68×0.12	N-86°-E		縄文時代	
57	J-5	円形	1.25×0.34	円		縄文時代	
58	K-5	円形	1.25×0.2	円		縄文時代	
59	L-5	楕円形	1.98×1.2×1.15	N-40°-W		縄文時代	落とし穴
60	G-7	楕円形	1.62×0.88×0.22	N-30°-W		縄文時代	
61	G-7	楕円形	1.74×0.98×0.28	N-6°-W		縄文時代	



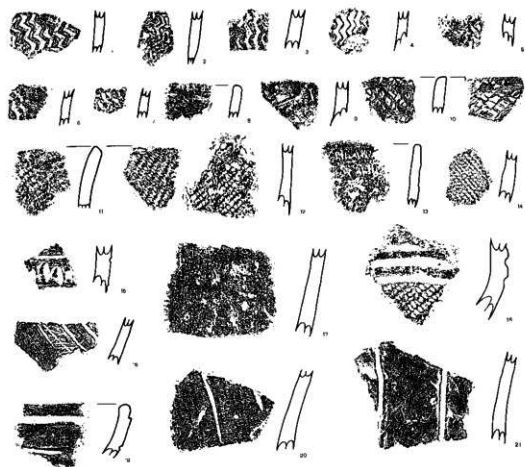
第28図 長山甲遺跡溝状遺構



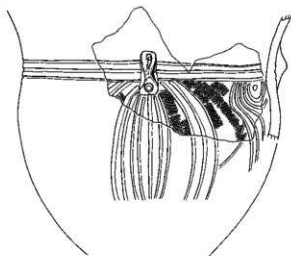
第285図 長山甲遺跡集石

遺物は3号集石から出土した、第258図の21と第259図の5および2号集石から第259図の4が出土している他は、全てグリッド出土である。1～10は押型文土器で、10は格子目状である。11は表裏縄文、12～14は燃糸文で、15と16は沈線文土器である。17は沈線文土器の無文の胴部であろう。18は加曾利E2式で、19～23は堀之内1式土器である。

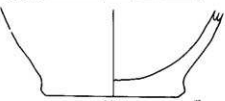
石器は、石鏃2点とスタンプ形石器1点、擦石5点である。6～8の擦石も3号集石周辺から出土している。



0 10cm



22

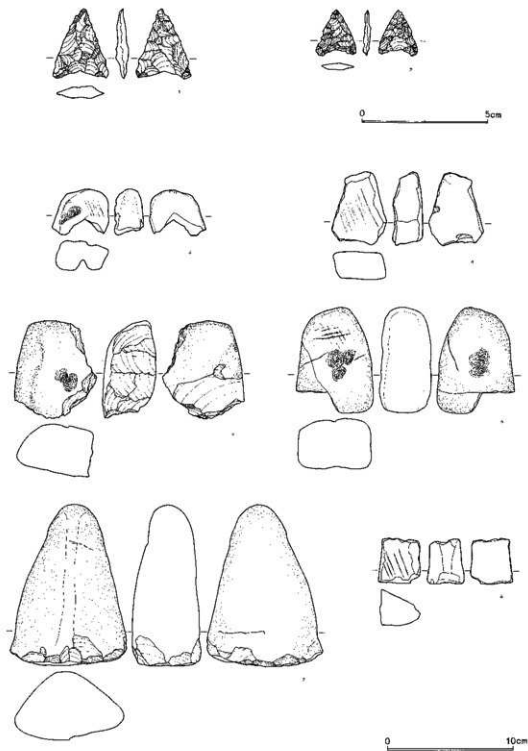


23



0 10cm

第286图 長山甲遺跡出土土器



第287圖 長山甲遺跡出土石器

VI 西ノ久保遺跡の遺構と遺物

西ノ久保遺跡は光山遺跡群の小畔川対岸の台地奥部に立地し、縄文時代を中心とした遺構と遺物が検出されている。標高は最高部で55.7mと光山遺跡群より6m近く高く、小畔川に向かって緩やかに傾斜し、長山甲遺跡では52m程になる。また、本遺跡は小畔川の支流である南小畔川の左岸に立地し、南には接するように谷津遺跡が所在する。周辺は南小畔川に向かって開析する小さな谷地形が複雑に入り組み、小規模な遺跡が点在している。調査前の状況は一部桑畑を除いて雑木林となっていた。

西ノ久保遺跡で検出されたのは、縄文時代の土壌23基と縄文時代中期の包含層2ヵ所、中世の土壌12基と時期不明の溝1条である。これらの遺構は、標高54.7mを中心とした調査区の中央部西よりに集中している。包含層は遺跡南端の緩斜面で2ヵ所が確認されたが、50片と30片程であり集中する面積も200㎡と広くはない。また、包含層といっても特別な土層は存在せず、表土直下に土器が分布しているような状況である。

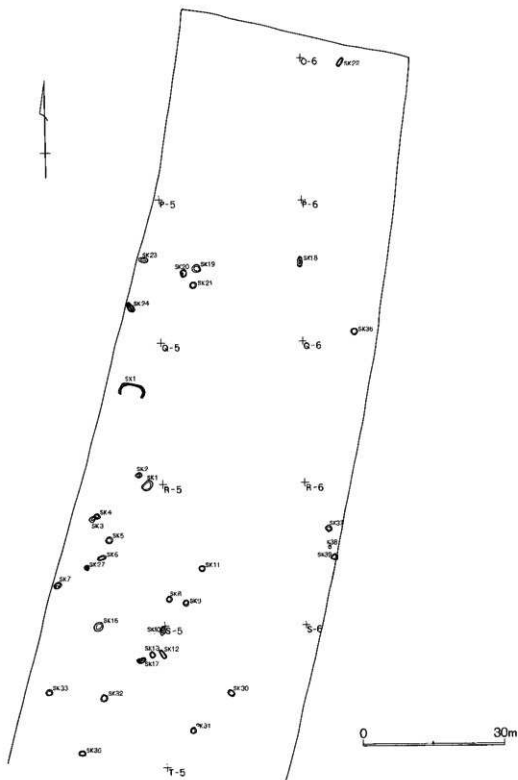
遺物は縄文土器の他に、打製石斧や石鏃などの石器と中世陶器があるが、遺構からの出土は少ない。なお、遺構確認時に全ての落ち込みに番号を付けたので、調査によって遺構ではないことが判明したものについては削除し、これらの遺構番号は欠番とした。



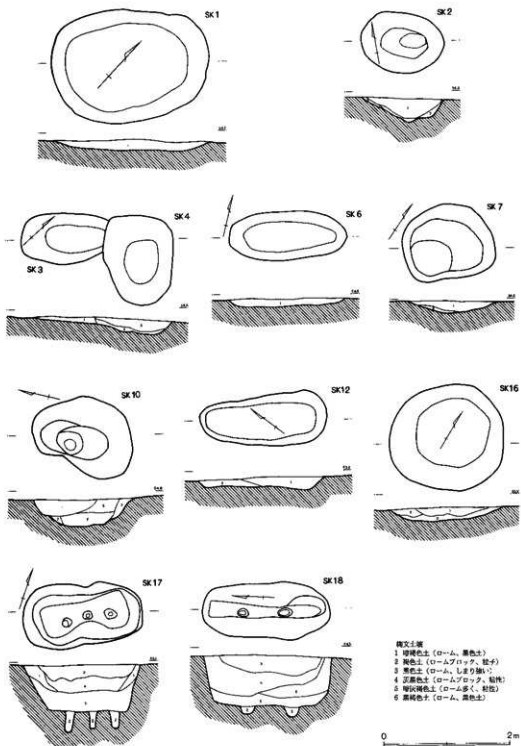
小畔川

長山甲遺跡

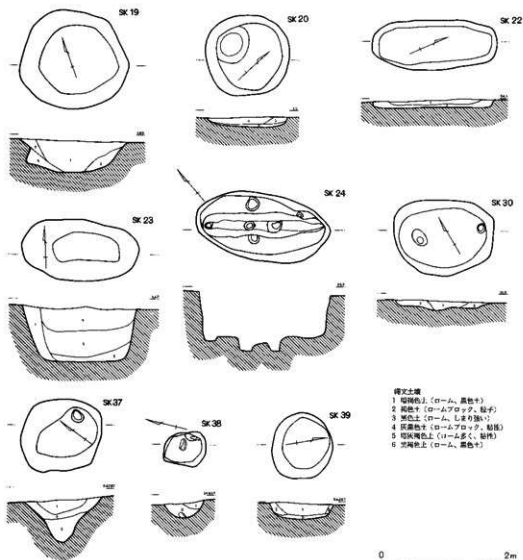
西ノ久保遺跡



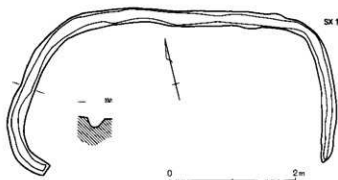
第288図 西ノ久保遺跡全測図



第289図 西ノ久保遺跡縄文時代土坑 (1)



第290図 西ノ久保遺跡縄文時代土壌 (2)



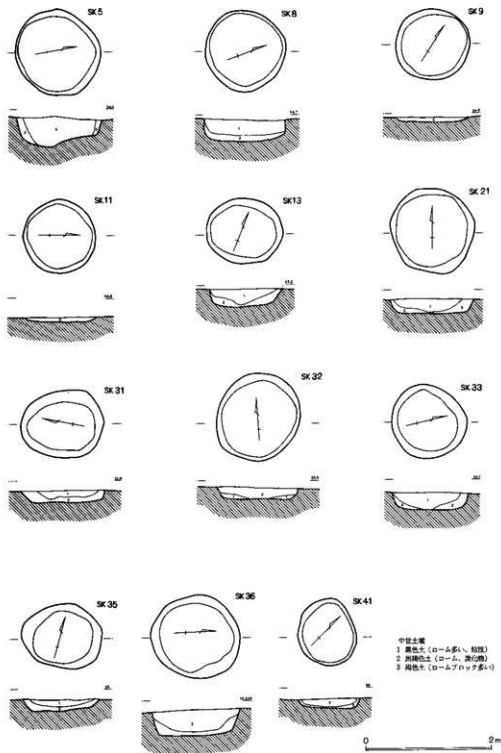
第291図 西ノ久保遺跡溝状遺構

西ノ久保遺跡縄文土壌一覽表

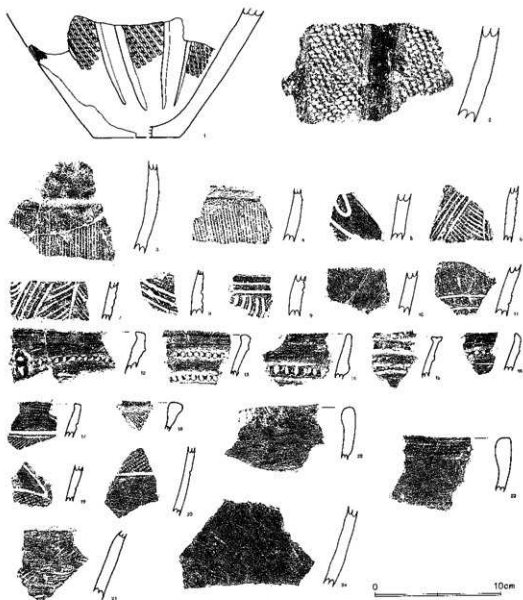
番号	位 置	形 態	規模(長×短×深)m	主軸方向	出土遺物	時 期	そ の 他
1	Q-4	楕円形	2.53×1.80×0.18	N-45°-E	石鏃	縄文時代	落とし穴
2	Q-4	楕円形	1.33×0.96×0.39	N-80°-W		縄文時代	
3	R-4	楕円形	(1.46)×0.81×0.11	N-42°-E		縄文時代	
4	R-4	楕円形	1.42×1.09×0.23	N-48°-W		縄文時代	
6	R-4	楕円形	1.86×0.76×0.13	N-77°-W		縄文時代	
7	R-4	楕円形	1.47×1.17×0.20	N-54°-E		縄文時代	
10	S-4	不整形	1.81×1.11×0.42	N-6°-E		縄文時代	
12	S-4	楕円形	2.01×0.83×0.20	N-36°-W		縄文時代	
14	S-4	楕円形	0.96×0.78×0.18	N-37°-W		縄文時代	
15	S-4	円形	0.80×0.20			縄文時代	
16	R-4	円形	1.78×0.22			縄文時代	
17	S-4	不整形	1.90×0.90×0.74	N-73°-E		縄文時代	
18	P-5.6	楕円形	2.03×0.85×0.82	N-3°-W		縄文時代	
19	P-5	楕円形	1.74×1.55×0.50	N-70°-W		縄文時代	
20	P-5	円形	1.35×0.16			縄文時代	
22	O-6	楕円形	1.98×0.79×0.13	N-24°-E		縄文時代	
23	P-4	楕円形	1.87×0.97×0.86	N-87°-W		縄文時代	
24	P-4	楕円形	2.15×1.06×0.73	N-45°-W		縄文時代	
27	R-4	楕円形	0.98×0.78×0.24	N-16°-E		縄文時代	
30	S-5	楕円形	1.58×0.15×0.15	N-58°-W		縄文時代	
37	R-6	楕円形	1.40×1.14×0.68	N-73°-W		縄文時代	
38	R-6	楕円形	0.73×0.51×0.22	N-50°-W		縄文時代	
39	R-6	円形	1.05×0.25			縄文時代	

西ノ久保遺跡中世土壌一覽表

番号	位 置	形 態	規模(長×短×深)m	主軸方向	出土遺物	時 期	そ の 他
5	R-4	円 形	1.37×0.47	N-68°-E	常滑	中 世	
8	R-5	円 形	1.29×0.45			中 世	
9	R-5	円 形	1.16×0.08			中 世	
11	R-5	円 形	1.06×0.08			中 世	
13	S-4	楕円形	1.21×1.04×0.28			中 世	
21	P-5	円 形	1.33×0.24	N-12°-W		中 世	
31	S-5	楕円形	1.34×1.08×0.19			中 世	
32	S-4	円 形	1.37×0.20			中 世	
33	S-4	円 形	1.29×0.28	N-75°-E		中 世	
35	S-4	楕円形	1.26×1.0 ×0.19			中 世	
36	P-6	円 形	1.34×0.41			中 世	
41	T-5	円 形	1.00×0.16			中 世	

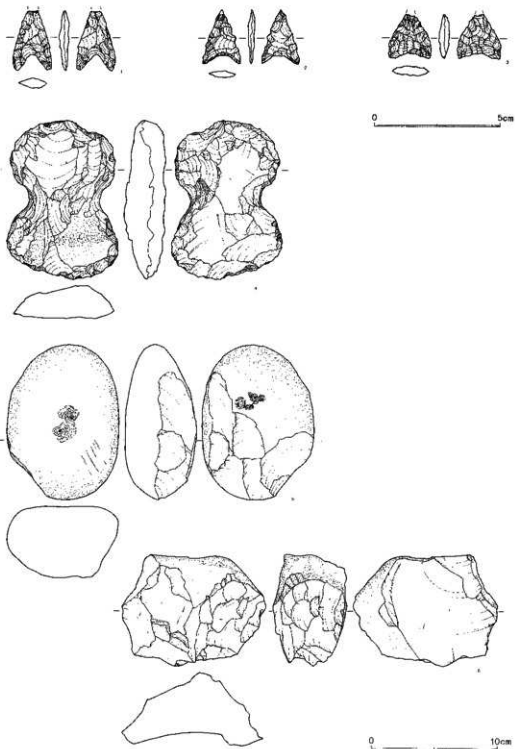


第292図 西ノ久保遺跡中世土壌



第293図 西ノ久保遺跡出土土器

出土遺物は中期から後期の土器片と、石鏃や打製石斧などの石器である。第293図の1～4は加曾利E3式土器で、遺跡南端の包含層から出土している。包含層といっても表土直下で中期の土器小片が点在する程度で、遺構を伴うような状況ではない。5～11は堀之内1式で、12～24は堀之内2式土器である。これらは集中することなく、遺跡全体から出土したものである。石器は第294図の6点で、石鏃3点と打製石斧2点、凹石1点である。石鏃は1がチャート製、2と3が黒曜石製である。これらの石器も遺構に伴うものではない。



第294図 西ノ久保遺跡出土石器

Ⅶ 調査成果のまとめ

光山遺跡群からは多くの遺構と遺物が検出されたが、中心となるのは古墳時代終末から奈良時代の集落である。今回の調査は、この集落の中央に幅50mのトレンチを南北に設定したような状況であったが、結果的には集落全体の規模や時期を検討する上で有効な手段となった。本章では集落や遺構・出土遺物の検討を行うが、各々遊離したものにならないよう記述を進めたい。

なお、ここで使用する土器の実測図は、基本的に1/6に統一したものである。

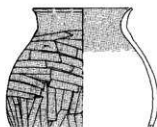
1 奈良時代の土器の変遷

集落の分析を含め、遺跡に歴史的な評価を与えるためには時間軸の設定が必要であり、その前提は出土土器の編年である。光山遺跡群からは竪穴住居跡などから多くの土器が出土しているが、多くの器種のなかでも須恵器環類の占有率は非常に高い。たとえば、10号住居跡では1099点、60個体の土器が識別できたが、須恵器：土師器は51：9で、さらに須恵器のうち供膳器の占める割合は約90%である。また、本遺跡出土須恵器の大部分は鳩山窯跡群の製品であり、供給側からの編年作業も進行しつつある(渡辺1990他)。そこで、出土量が最も多く、その変遷を比較しやすく、編年に関わる環境も整っている、須恵器環類を編年の軸に据えた。その上で共存関係を考慮して、器種ごとではなく土器群として編年した。

光山集落で最古に位置付けられるのは、46号竪穴住居跡や53号竪穴住居跡に代表される遺構から出土した、比企型環とこれに共存する土器群である。これらの土器群は、本集落の継続性を考えてやや距離を置く意味で、0群として扱いさらに1～3類に細別した。指標となる須恵器は、53号竪穴住居跡とグリッドから出土した蓋環の身である。口径や形態からは、陶色編年の第Ⅱ型式5段階に相当する。型式的には北武蔵型環と比企型環を伴う舞台2号窯跡期の1型式前に位置付けられよう。土師器については、3回の拡張(住居の変遷としては4段階)を行っている53号竪穴住居跡を例にして、その変遷を考えてみる。最も古い土器は、貼床内出土の前述の須恵器環と53号竪穴住居跡第1段階の貯蔵穴出土の皿18である。第2・3段階の貯蔵穴からは、環8・12が、最後の第4段階のカマドからは皿19が出土している。環8・12は口縁内面に稜をもち、稜のない13・14よりは古相を示すが、大型で深い形態の11よりは新しい様相が見られる。53号竪穴住居跡は、遺構としては4段階の変遷を確認できたが、土器の変化を観察した場合は、無理のないところで2細分が可能である。比企型環の8・11・12から13・14へと、土師器皿の18から19へ、さらに土師器壺は28から22への推移を辿ることができる。ここでは、前者を0期1段階、後者を2段階とした。

3回の拡張からは、53号竪穴住居跡は長期間の使用が考えられるが、覆土から出土している須恵器(1～3)や南関東系の盤状環7には連続せず、本遺跡Ⅰ期に位置付けられるこれらの土器群との間には時期差がある。明確な指標となる土器はないが、あるいは43号竪穴住居跡の土師器が七世紀第3四半期から末葉にかかる可能性がある。ここではその可能性を重視し、この土器群を0期3段階とした。

七世紀末の資料が少なく、続く時期との関連が明瞭ではないが、Ⅰ期以降は継続的に変遷し、以



SJ8-2



SJ53-6



SJ8-1



SJ53-8



SJ53-11

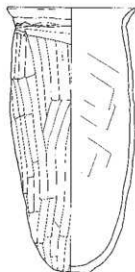


SJ53-9

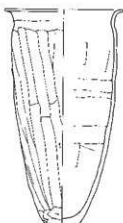


SJ53-18

0-1



SJ40-9



SJ53-22



SJ53-14



SJ53-13



SJ46-2



SJ40-7



SJ46-7



SJ53-19

0-2



SJ43-9



SJ43-1

0 10cm

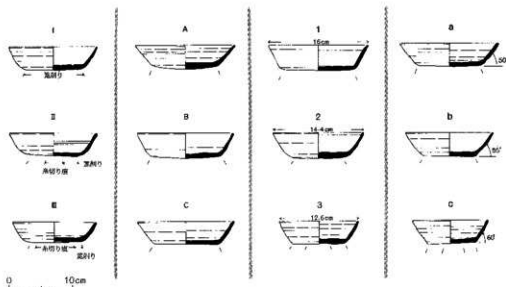
0-3

第295図 0期の土器群

下のような須恵器環の分類を行って編年の基礎とした。

須恵器環の分類 (296図)

須恵器環の分類については、その基準となるものは、器形や整形技法あるいは法量などいくつかある。また、口径と底径の比率なども時期の検討に有効な手段として用いられている。ここではこれらのうち、底部の整形・底部の形態・口径・体部の立ち上がり角度の4つの要素を組み合わせて分類した。分類の項目と基準は以下のとおりである。なお、分類には器形・法量・底部の整形が明確で、残存率が50%以上の65個体を使用した。



第296図 須恵器環分類図

	I	II	III	A	B	C	1	2	3	a	b	c
I				6	5	25	16	8	12	12	12	12
II						16	2	9	6	5	6	6
III						10	1		11	1	2	9
A	6						5	2		2	1	4
B	5						4	3	1	4	2	2
C	25	16	10				11	12	28	12	18	21
1	16	2	1	5	4	11				8	8	4
2	8	9		2	3	12				12	5	7
3	12	6	11		1	28				5	8	16
a	12	5	1	2	4	12	8	5	5			
b	12	6	2	1	2	18	8	5	8			
c	12	6	9	4	2	21	4	7	16			

第297図 須恵器環分類統計図

底部の整形	I 全面寛削り（寛削り離しを含む）
	II 周辺寛削り（糸切り離し痕が寛削り部分より少ない凡例のB a）
	III // （糸切り離し痕が寛削り部分より多い凡例のB b）
底部の形態	A 丸底
	B 凸底（底部中央部が突出しているもの）
	C 平底
口径	1 15.1cm以上
	2 15～14cm
	3 13.9cm以下
体部立ち上がり角度	a 50°
	b 55°
	c 60°

以上のような分類を基礎として、その組み合わせを表したのが第297図である。このように、単純な器形である坏の諸要素を分解して、各分類の組み合わせを見た場合でも複雑で繁雑な結果となった。しかし、これによりいくつかの傾向を看取することができ、各要素の組み合わせを以下の通り順に観察した。

底部の整形

- I 他の全てと組み合わせができるが、口径に関しては1に偏在している。
- II AとBにはなく、Cに集中し1～3、a～cに存在する。
- III IIと同様にAとBにはなく、全体の組み合わせではI C 3 cが中心となる。

底部の形態

- A Iと1に集中し、II・IIIと3には存在しない。
- B Aと類似した傾向を示す。
- C 全ての組み合わせができるが、3に集中し、IIとIIIにも存在する。

口径

- 1 全ての類に及ぶが、Iに集中し、2と3に比べAとBが多く、cが少ない。
- 2 IIIにはなく、Cに多く、a～cに存在する。
- 3 I～IIIに及び、Cとcに集中する。

体部立ち上がり角度

- a 全てと組み合わせができる。
- b 全てに及ぶが、Cが多い。
- c a～cにかけてIは同数であるが、IIIが増加し、Cと3が多い。

須恵器坏の分類とその組み合わせの検討結果から、光山遺跡群の集落は0期以降の八世紀代の土器群をI～III群に大別でき、さらに、I群とIII群を各2段階に細分した。各群類の特徴は以下の通りである。

I 群

A～Cが存在するが、基本的な属性としてはA・Bで、これにI・II、1・2が組み合うものである。共存関係から、A・Bだけで構成されるものを1類とし、Cを伴う土器群を2類とした。供膳器の土師器の占める割合が高く、須恵器の出土しない堅穴住居跡も多い。

1類 坏・蓋ともに山下6号窯跡（以下Y6と表記する）に類似し、坏はI、Aと1・2が基本となっている。蓋には小さな返りを持つ28号堅穴住居跡3、37号堅穴住居跡7と、中央を押さえ込んだ門板状の鈕のある43号堅穴住居跡1や53号堅穴住居跡1が見られる。土師器坏については、北武蔵型の37号堅穴住居跡1・38号堅穴住居跡2と、赤彩された37号堅穴住居跡2・3及び、25号堅穴住居跡1・31号堅穴住居跡1・33号堅穴住居跡2～4のような口縁が小さくS字状に外反するタイプがある。この他に53号堅穴住居跡7の南関東系の盤状坏が伴う。土師器甕は口縁が大きく外反して、胴部最大径が口径を上回らなくなる。

2類 23図の4号堅穴住居跡出土遺物は全て床面かカマド出土で、共存するものである。ここではBとC、1と2、a～cまで存在するが、CはIIIと、BはIとの組み合わせになる。6号堅穴住居跡ではAとCが伴っている。蓋はY6を小型・扁平化した36号堅穴住居跡13と大型の17号堅穴住居跡6がある。土師器坏は、IA2cと共存する、丸みのある底部から緩やかに立ち上がる23号堅穴住居跡2があるが、1類のようなS字状の口縁は存在しない。44号堅穴住居跡1は器高が低いタイプであるが、口縁部形態は同じである。

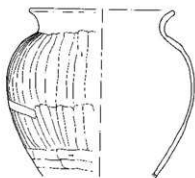
II 群

この群の須恵器坏の特徴は平底のCが基本で、2・3が主体となり、大型の1も存在するがかなり減少している。I～IIIまでであるが、II・IIIの増加が目立つ。蓋にはかなりのバリエーションがあるが、19号堅穴住居跡3、35号堅穴住居跡18～20のような環状つまみが多い。土師器坏はI群に比べるとかなり減少はするが、35号堅穴住居跡16と17のような赤彩するものが残っている。赤彩する坏としては最も新しい部類に属するものである。基本的にはI群1類の37号堅穴住居跡3の系譜にあるものであろうが、器高は低く平底化し、外面の赤彩も口縁端部のみとなっている。35号堅穴住居跡出土土器群は、この群のなかでもやや新しい様相が伺えるが、全体の構成や赤彩された土師器坏の共存などを考慮してII群に位置付けた。

III 群

Cと2の組み合わせを基本として、3とb・cが共存する1類と、III C3cを主体としている2類に分けることができる。また、本群から高台坏が出現し、土師器坏類は減少し、赤彩された土師器坏は見られなくなる。

1類 1号堅穴住居跡1～3は共存関係にあり、I・II、C、2・3の組み合わせになっている。本類にはIIIも存在するが少数で、IIを主体にし、2と3では僅かに3が上回る。蓋には5号堅穴住居跡1や30号堅穴住居跡8がある。須恵器の器種が増加し、1号堅穴住居跡14のコップ型土器、14号堅穴住居跡5の佐波理模倣碗、30号堅穴住居跡7の無頸壺、1号井戸21の短頸壺、3号井戸18の高台盤、19の高坏などが見られるようになる。土師器は供膳器が減少し、30号堅穴住居跡2は小型化した坏である。



SJ49-9



SJ49-7



SJ38-2



SJ37-1



SJ27-2



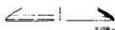
SJ37-3



SJ48-1



SJ53-1



SJ28-3



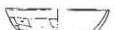
SJ37-7



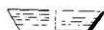
SJ53-7



SJ33-3



SJ48-3



SJ48-2



SJ49-2



SJ21-1



SJ31-1

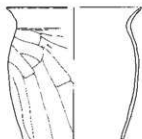


SJ25-1



SJ48-4

I-1



SJ54-1



SJ44-1

0 10cm



SJ36-13



SJ17-6



SJ4-2



SJ4-3



SJ6-2



SJ36-8



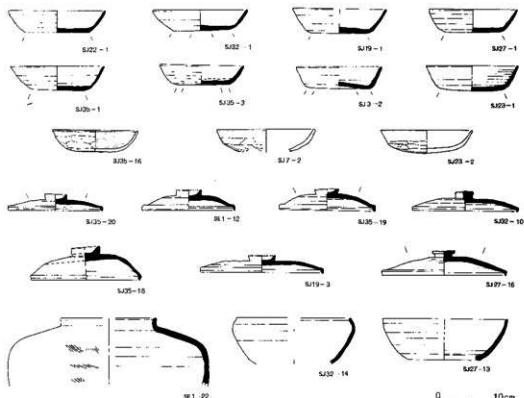
SJ4-1



SJ36-6

I-2

第298図 I期の土器群

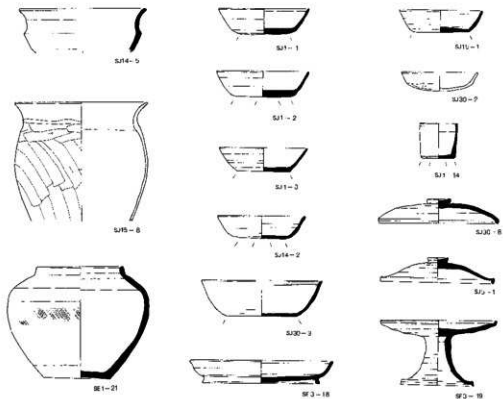


第299図 II期の土器群

2類 須恵器環は小型化し、Ⅲを主体としてⅡが含まれ、これにCと3の組み合わせが基本で、同伴例に2が数点加わる程度である。佐波理模倣碗・蓋や小型高台杯・蓋を含んだ、10号竪穴住居跡6・12・13・15・16・19・20・23はセットとなるものである。10号竪穴住居跡2や1号井戸1、3号井戸1のような底径の小さなものは、あるいはやや新しくなる可能性があるが、糸切り離しのままのものは存在せず、本類の範疇として考えた。土師器環は見られない。

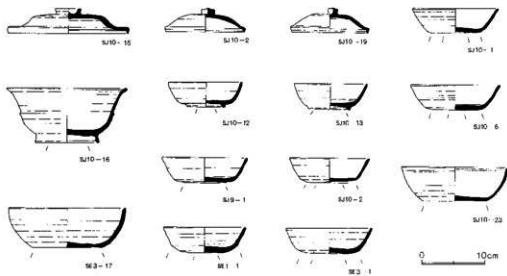
以上のⅠ～Ⅲ群の土器群は、時期的な変遷も示しており、Ⅰ群1類はⅠ期1段階のように置き替えることができる。鳩山窯跡群の編年と対照すると、本遺跡Ⅰ期からⅢ期までと鳩山Ⅰ期からⅢ期は重複する部分が多いが、Ⅲ期2段階は鳩山Ⅲ期からⅣ期にかかる。基本的には鳩山編年を援用できるが、生産遺跡と集落遺跡との差異も考慮している。

年代の比定については、七世紀代は飛鳥宮の編年や陶器編年とこれまでの比企型環の変遷から、0期1段階を七世紀第2四半期、2段階を七世紀中頃、3段階は七世紀第3四半期から第4四半期を中心とした時期を考えている。3段階については、この地域では出土例が少ないため、Y6以前の城見上遺跡3号・5号住居跡に並行する時期の様相が明らかではなく、舞台C2号窯跡や立野遺跡の年代の再検討なども必要ではなかろうか。Ⅰ期1段階はY6にほぼ並行し、これをこれまでの指摘どおり八世紀第1四半期前半に置きたい。Ⅱ期以下の基礎となる資料については、武蔵国分寺



Ⅲ-1

Ⅲ-2



第300図 Ⅲ期の土器群

創建期の土器を上げることができる。特に具注暦の出土で年代観が比較的明瞭な、武蔵台遺跡23号堅穴住居跡の資料がある。これはⅡC3cとⅢC3bで、本遺跡ではⅢ期1段階に相当し、ここを八世紀第3四半期前半に置くことができる。この2点と鳩山編年などを参考に、Ⅰ期2段階は八世紀第1四半期後半から第2四半期初頭に、Ⅱ期は八世紀第2四半期後半から中葉に、Ⅲ期1段階は八世紀第3四半期前半、2段階は八世紀第3四半期後半を中心とした時期に考えている。

高麗郡域から出土する須恵器は、本遺跡では南比企窯跡群産が大部分を占めているが、八世紀後半以降では東金子窯跡群産が主体的になるようである。さらに本遺跡Ⅰ期に相当する資料も発見されつつあり、建群前後の様相も徐々に判明しつつある。本報告書では、年代観をこれまでの成果に依存したが、光山遺跡群の調査を契機に高麗郡を中心とした地域の土器編年と、須恵器供給の変遷を今後の課題としたい。

(井上尚明)

引用・参考文献

- 井上尚明「七世紀における集落の再編成とその背景」『埼玉県史研究20』埼玉県 1988
- 小笠原好彦・西弘海他「平城宮発掘調査報告Ⅶ」奈良国立文化財研究所 1976
- 金子真土「北武蔵の須恵器」『研究紀要4』埼玉県立歴史資料館 1982
- 埼玉県立歴史資料館編『埼玉の古代窯業調査報告書』1987
- 埼玉考古学会編『奈良時代前半の須恵器編年とその背景』1987
- 酒井清治「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要9』埼玉県立歴史資料館 1987
- 富田和夫「稲荷前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 中村 浩『陶邑Ⅱ』大阪文化財センター 1978
- 西 弘海『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1978
- 西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986
- 早川 泉『武蔵国分寺跡出土の漆紙文書』府中病院内遺跡調査会 1989
- 松村恵司他『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会 1977
- 渡辺 一『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山町教育委員会 1990
- 渡辺 一「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古27号』1990

2 集落構成について

土器の編年作業の結果、光山遺跡群の集落は大別4期、細別8期に分類でき、集落の継続性から七世紀代を0期とし、八世紀代をⅠ～Ⅲ期とした。この編年を基にして光山集落がどのような変遷を辿り、盛衰を経たのかを検討したい。なお、共伴土器群が時間幅を持っているような遺構の場合は、とりあえず古い時期の土器を基準とし、重複して掲載した。また、遺物の出土していないか目安になるものが少ない遺構については、主軸方向や他の竪穴住居跡や掘立柱建物跡の位置などを参考にして想定した。

0期の集落

集落の出現は、小群川に近い台地の下位面から始まり、53号竪穴住居跡の第1段階と39号掘立柱建物跡を中心として展開している。39号掘立柱建物跡については遺物は出土していないが、重複関係から0期3段階の43号竪穴住居跡より古く、主軸方向と46号竪穴住居跡との位置関係から本期に含めた。このように0期1段階から、拡張前とはいえ1辺10mクラスの53号竪穴住居跡と、5×3間の大形建物を持している。出土遺物はないが重複関係からは、3号溝もこの時期に伴う可能性が高く、小群川あるいは水を意識した、計画的な集落の出現を看取できる。台地の上位面にも8号竪穴住居跡が確認されているが、この平坦面にも小規模な住居群が展開しているのであろう。なお、8号竪穴住居跡は火災住居であり、台地上位面では0期1段階以後はⅠ期になるまで遺構は検出されていない。2段階も53号竪穴住居跡を中心に、台地下位面に遺構が点在する。土師器小型鉢から38号掘立柱建物跡はこの段階に属し、39号掘立柱建物跡より規模は小さくなるが、溝持ちの構造となり、性格的にも39号掘立柱建物跡に代わるものと考えられる。3段階は43号竪穴住居跡1軒だけであるが、38号掘立柱建物跡がこの段階まで存続している可能性もあり、中心となる住居は見られないが、0期の基本的な性格は一貫しているようである。

0期の集落は小群川に向かって開かれた計画的な様相や、大型住居・大型建物の存在、さらに釘や鉄條の出土から、農業以外を指向した集落と考えておきたい。

Ⅰ期の集落

0期に比べ、広範囲に集落が展開するようになり、斜面から台地の上位面に進出する。0期の53号竪穴住居跡のような中心となる遺構はないが、主軸方向を整えた竪穴住居と掘立柱建物はいくつかの群を形成し、1号溝もこの時期に造られている。1段階の集落は、斜面を中心に上位面の台地縁辺から下位面のやや奥に広がり、37・38号竪穴住居跡と23・25・30号掘立柱建物跡などは、主軸や位置を揃えて東に開口する、1辺30から40mほどの群を形成している。2段階には、台地上位面の奥にまで集落が広がり、斜面の裾に3号井戸が開鑿されるが小群川の河畔にも掘立柱建物を含む1群がある。また、鍛造剥辺が出土し、鍛冶遺構の可能性が高い6号竪穴住居跡は、他の遺構とは距離を置いて単独で存在する。

Ⅱ期の集落

小群川の河畔には51号竪穴住居跡1軒だけで、他は斜面から台地の上位面に広がっている。さらに、2号竪穴住居跡のように台地のかなり奥部にまで進出し、この奥の1群と7号竪穴住居跡や19



第301図 0期・I期の集落

号掘立柱建物跡を中心とした群、さらに27号竪穴住居跡や29号掘立柱建物跡から構成される斜面の住居群などのグループに分けられる。特に斜面部には大型の部類に入る27号と馬具を出土した35号竪穴住居跡が存在し、集落の中核を成すと考えられる。井戸もこの時期に3号から1号に遣り代えられたと思われる。集落が拡散するような傾向を見せながら、下位面から撤退しつつあり、斜面を中心に大きく3つの群から構成されるようになる。

Ⅲ期の集落

2号溝が斜面の裾部に造られ、ここから南の台地下位面から集落は完全に撤退する。小畔川の水位の変化か、集落の台地奥部への進出によるものかは不明であるが、人為的に埋め戻されて耕地などに転用された形跡はなく、溝の存在からは水位に関わることを考えられる。

1段階には1号井戸と35号竪穴住居跡もⅡ期から引続き、30号竪穴住居跡や31号掘立柱建物跡と斜面部の群を構成している。30号竪穴住居跡もⅡ期の27号竪穴住居跡と同様に大型住居であり、31号掘立柱建物跡からは鍵が出土している。台地の上位面にもⅡ期と同じ位置に2つの住居群が展開している。2段階には、上位面の奥部には張り出し部のある大型住居9号竪穴住居跡を中心とした1群、その南にはやはり張り出し部のある10号竪穴住居跡と、庇を持つ18号掘立柱建物跡などで構成される1群がある。これまで集落の中核を成してきた斜面部の住居群は縮小し、井戸も小規模な2号井戸になる。

Ⅲ期2段階、つまり八世紀第3四半期後半を境に集落は消滅するが、集落が衰退していく様相は看取できず、集落経営途中で打ち切ったような消滅の仕方である。出現も消滅も計画的・目的的な集落と言えるのではなかろうか。

以上のように、各期の集落を通観してきたが、遺構の同時存在については各期を図化することにより、画一的な変化を意識してしまうという弊害もある。実際の集落の変遷は、継続性がある場合には、暫時移行していくのが自然な姿であろうが、現状では土器編年と同様にデジタルな表現をせざるを得ない。しかし、共伴遺物が2時期にまたがるような場合には、土器編年では古い時期に含めたが、集落の変遷ではあえて両者に加えて図面を作成した。また、集落の構成要素の一つに、竪穴住居跡や掘立柱建物跡など目に見える遺構以外に、これらを含めた宅地の存在も重要な問題である。特に今回の調査では、後述するように掘立柱建物跡に住居の機能があることが確認されたが、竪穴住居跡との関係や使い分けといった問題については、類例の増加を持って再検討したい。

(井上尚明)



第302図 II期・III期の集落

3 遺構・遺物各論

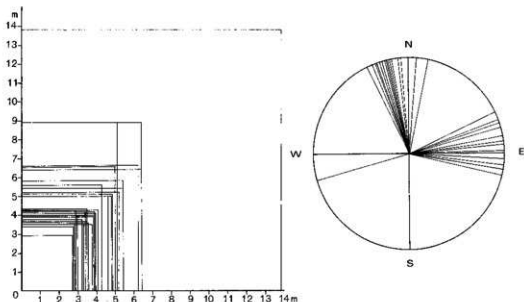
ここでは、光山遺跡群で調査され、検出された遺構・遺物のうち、特徴的なものあるいは一般的でありながら重要で注目すべきものをいくつか取り上げて、集成や検討を加えてみたい。

① 竪穴住居跡の構造について

光山遺跡群では55軒の竪穴住居跡を調査することができたが、台地の上位面では後世の開発が少なく、遺構が良好な状況で確認できたものが多かった。特に遺構確認を表土直下で行うことができたので、明瞭な状態でカマド脇に存在する棚状遺構を確認できた。ここではこの棚状遺構と、張り出し部や梯子穴が検出されているので、出入口に関する施設を中心に述べることにする。なお、カマドについては、ローム台地であることや斜面部の存在などで、細部を観察したり、構造を復元できるように良好な遺存状態ではなかった。

55軒の竪穴住居跡の規模は、一辺4～5mが主流であるのに対して、53号竪穴住居跡のように他を凌駕する規模を有するものも見られる。しかし、53号竪穴住居跡は七世紀代であり、奈良時代に限れば斜面裾部に並ぶ、27号と30号竪穴住居跡が長辺約9mと大型である。平面プランも、この2軒が長辺と短辺の差の大きい長方形である以外は、方形に近い形態をしている。

主軸方向については、大きく北向きと東向きに分けられる。傾向としては、立地で見ると台地上位面では北を、下位面では東を指向するものが多い。特に斜面部分に立地する4軒は、等高線に平行するように東を指向している。また、西を向くのは1号竪穴住居跡1軒だけである。

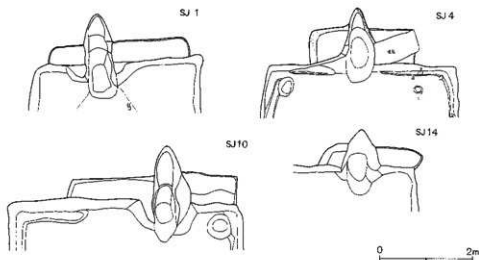


第303図 竪穴住居跡規模と主軸方向

棚状遺構については、すでに棚状施設（篠崎1991）あるいはカマド脇の中段（大江1992）などと表現されており、その存在が確認されているものであるが、調査時点（1990年）では一般的に認識されておらず、私も初めて目にした遺構であった。しかし、類例を調査したり各地の遺跡を見聞していると、竪穴住居跡と重複している別の遺構などと理解されている例もあるようだった。また、本遺跡でもそうであるが、遺構確認面があと10cm低ければ検出できない遺構であり、良好な遺存状態にない多くの遺跡では、本来の存在を確認できないものである。

本遺跡では、4軒の竪穴住居跡で棚状遺構が確認できたが、他の同様な時期・状況にある竪穴住居跡では、意識して調査したにも関わらず、発見することはできなかった。当初は竪穴住居跡の構造の要素の1つではないかと考えたが、結果的に4軒の住居でしか確認できなかったことから、棚状遺構は、全ての竪穴住居跡に付設される、普遍的な施設ではない可能性が高い。

形態については、①カマド並びに設けたもの ②全周するもの ③適宜設けたものに分けられているが（篠崎1991）、本遺跡では全てカマド両脇に設けるタイプである。3軒の竪穴住居跡では、カマド両脇を10cm前後掘り窪め、平坦にならしただけの構造であるが、4号竪穴住居跡では掘った壁面に粘土を貼ってある。この4号や10号竪穴住居跡の棚状遺構からは、土器が出土していることから、機能的には物置・収納スペースであったと考えるのが妥当であろう。しかし、構造的にも作業工程的にも簡単な施設であるにも関わらず、集落の7%程度の竪穴住居跡にしか付設されない点は、制限や規制が皆無であったとは言い切れない。逆説的には、棚状遺構は特定の竪穴住居跡に付設されるもので、単なる物置ではなく例えば神棚的な機能も具備していたとは考えられないであろうか。条件の良好な類例の増加を待って再検討したい。



第304図 棚状遺構集成

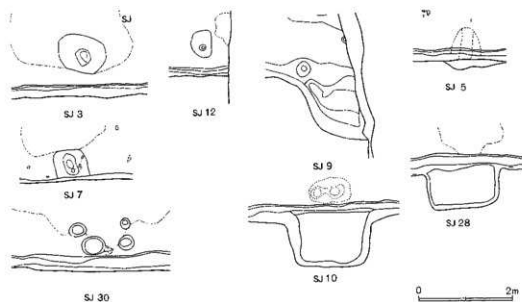
出入口施設に関しては、8軒の竪穴住居跡で確認できたが、構造的にいくつかのパターンを見ることができる。3号・7号・30号竪穴住居跡では、カマド対面に梯子穴を穿っているもので、梯子穴以外にも床面の堅緻範囲の観察とも一致した。これを出入口1類とする。2類は明瞭な梯子穴を持たないが、床面に非常に硬化した小さな窪みが検出できたもので、窪みの周囲は同様に硬化した土手状の高まりがある。該当するのは12号竪穴住居跡1軒である。3類は張り出し部を有するタイプで、9号・10号・28号竪穴住居跡の3軒である。特に10号竪穴住居跡では、張り出し部の床面上に堅緻な黒色土とロームが盛り上がるように堆積しており、出入りの繰り返しによってこれらの堆積土が形成されたと判断した。また、9号・10号竪穴住居跡の張り出し部前面には床下から柱穴が確認された。これが出入口に伴う施設の柱穴か、出入口構造の変更によるものかは現状では不明である。4類は5号竪穴住居跡で、1～3類と異なり階段状の施設を土で構築したものである。カマド対面の壁中央にやや内側に傾斜を付けた、段を設けているもので、ロームを含んだ褐色土・暗褐色土を堅く貼っている。この部分の壁上場ラインはやや広がっており、緩いスロープがある。この階段の下面には壁溝が走っているの、竪穴住居構築の最終段階で取付けたのであろう。

引用文献

荒井健治「武蔵国府にみる古代の住環境」『東京考古9』1991

大江正行『史跡十三宅塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992

篠崎譲治「沖積地における奈良・平安時代の住居構造および調査方法」『東京考古9』1991



第305図 出入口施設集成

野穴住居跡一覧表

番号	位置	形態	規模 (m)	主軸方向	カマド	柱穴	壁溝	貯蔵穴	欄	備考
1	Q-10	長方形	3.5 × 3.77	N-106°-W	西	なし	なし		○	墨書2、刀子3
2	N-10-11	長方形	3.4 × 2.75	N-90°-E	東	なし	全周			
3	O-10-11	長方形	4.25 × 3.5	N-6°-W	北	なし	全周			出入口
4	O-11	方形	4.3 × 4.1	N-20°-W	北	なし	一部		○	墨書2、硯、漆
5	R-8	長方形	3.5 × 2.8	N-25°-W	北	なし	全周			出入口、硯
6	S-T-8-9	方形	5 × 4.8	N-75°-E	東	4	全周	○		小鍛冶、墨書1
7	V-10	方形	3.7 × 3.5	N-19°-W	北	なし	なし			出入口、硯
8	W-10	方形	3.9 × 3.8	N-S	北	なし	全周	○		火災住居
9	O-11	西壁6.5		N-16°-W		有	一部			張出し部
10	V-11	方形	5.2 × 5.1	N-83°-E	東	なし	全周	○	○	張出し部、刀子
11	S-13	長方形	3.95 × 3.35	N-11°-W	北	なし	全周			
12	U-14	西壁3.1				なし	一部			出入口、刀子
13	K-10	西壁3.9				なし	一部			
14	Y-11	方形	4.1 × 3.9	N-98°-E	東	なし	なし		○	刀子
15	Q-11	長方形	5.1 × 4.3	N-4°-W	北	なし	全周	○		墨書
16	Q-12	西壁一部								
17	U-12	方形	5 × 4.6	N-17°-W	北	なし	全周	○		漆付着土器、桃種子
18	U-V-13	方形	一辺3.55	N-94°-E	東	なし	全周			紡錘車
19	U-V-13	方形	一辺3.5	E-W	東	なし	一部			
20	Y-12	方形	3.65 × 3.4	N-4°-W	北	なし	全周			
21	X-10	長方形	3.84 × 3.2	N-100°-E	東	なし	全周			
22	X-10	方形	一辺5.2	N-10°-W	北	有	全周	○		火災住居、硯
23	Y-14	方形	4.2 × 3.9	N-85°-E	東	なし	全周			
24	Z-15-16	西壁4.2				有				硯
25	AA-16	西壁3				有				
26	X-10	隅丸方形	3.5 × 3.25	N-10°-W	北		一部			
27	AD-16	長方形	8.9 × 6.4	N	北	6				大型住居、桃種子
28	AD-14	長方形	4.35 × 3.5	N	北	1	全周			張出し
29	AE-14	長方形	4.3 × 2.95	N	なし	なし	なし			27号掘立が切る
30	AD-14	長方形	8.9 × 5.1	N-4°-E	北東	4	全周	○		出入口、漆、刀子
31	AA-14	隅丸方形	3.5 × 3.3	N-89°-E	東		全周			
32	AB-13	長方形	4.2 × 3.4	N-85°-E	東		一部			墨書
33	AD-12				東	2	一部			
34	AC-13	長方形	4.2 × 3.5	N-70°-E	東	なし	一部			刀子
35	AF-17		6.55 × 5	N-104°-E	東	2	一部	○		墨書、費
36	AG-16	隅丸台形	4 × 3							墨書
37	AF-14	方形	5.8 × 5.4	N-14°-W	北		全周	○		鎌、手鐲、刀子、釘
38	AF-16	方形	5.4 × 5.1		北	2	一部			墨書、略文、手鐲
39	AF-16									紡錘車
40	AI-17	方形	一辺6.4	N-65°-E	東	4	一部			
41	AR-22						なし			
42	AP-19	長方形	4.1 × 3.5	N-89°-E	東		全周			刀子
43	AO-19	方形	一辺5.4		北	4	全周	○		
44	AO-19	隅丸方形	4 × 3.9	N-80°-E	東	なし	一部	○		
45	AP-21	長方形	4.1 × 3.5	N-13°-W	北		一部			
46	AO-16	隅丸方形	6.6 × 6.3	N	北	有		○		
47	AQ-22					有				
48	AK-19		5.6 × 4.3?	N-22°-W	北・西	4	全周	○		刀子

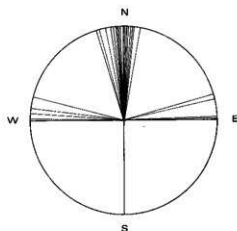
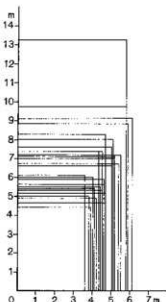
番号	位置	形態	規模 (m)	主軸方向	カマド	柱穴	礎溝	竪穴・棚	備考
49	AK-15	方形	5.1 × 4.8	N-12°-W	北・東・西	11	全周	○	刀子、紡錘車
50	AM-15		南北4.2	N-20°-W	北	9			
51	AP-18			N-12°-E	北				
52	AQ-19			N	北・東			○	
53	AL-16	方形	一辺13.8	N-5°-E	北	8	全周	○	簾、刀子、鏝、鋤先
54	AL-15			N-80°-E	東		なし	○	
55	AK-19	方形	2.9 × 2.7	N-72°-E		なし	一部		

② 掘立柱建物跡の分析

調査できた40棟の掘立柱建物跡のうち、小畔川に面した台地の下位面からは数棟が検出されただけで、他の大部分が台地の上位面と斜面部で確認できた。台地の上位面では竪穴住居跡と同様に、遺構の遺存状態が非常に良好で、焼土の堆積や硬化面などを調査できた。また、柱穴の配置や形態などに特徴的な様相が観察できたので、これらの点について検討してみたい。

建物の形態は、庇を持つもの1棟、溝持ち3棟で、総柱はない。主軸は南北棟が75%を占め、竪穴住居跡と違って、台地の上位面と下位面での主軸の相違傾向は見られない。規模は桁行は4m位から13mを越えるもの、梁行も3.5m程から6m以上とかなりのばらつきがあり、梁行で4m前後に集中がある他は規則的なものはない。桁行については、39号が間数でも5間と他を圧倒して大きい。桁行×梁行は、規模の判明している32棟のうち、2×2=12棟、3×2=16棟、4×2=3棟、5×2=1棟で、梁行についてはすべて2間である。また、桁行4間以上の4棟は南北棟で、斜面裾部から台地下位面に分布するものである。

9号掘立柱建物跡で検出できた焼土は、規模・構造ともに炉と呼べるもので、位置的にはコーナーに近いきらいがあるが、確認面や遺物からは掘立柱建物跡に伴うものである。掘立柱建物の床面に



第306図 掘立柱建物跡規模と主軸方向

については、9号掘立柱建物跡では確認できなかったが、表土から断面の観察が可能であった4・5号掘立柱建物跡では、ソフトローム直上の暗褐色土面に硬化した部分が点在していた。また、21号掘立柱建物跡では焼土を含んだ暗褐色土の硬化面が検出され、これらは床面として認定できるものであろう。このような調査成果からは、掘立柱建物には内土間式の住居が含まれていることは明らかであり、遺構確認時の土器分布状況を見ると、身舎内部で土器が検出されるものと、6号掘立柱建物跡のように柱穴以外から土器が出土しないものがある。炉を持つ9号掘立柱建物跡も炉の周辺を含め、内部に土器が分布しており、竪穴住居跡と同じような空間利用をしていたことが考えられる。逆に6号掘立柱建物跡のように身舎内部に土器が存在しないタイプは、土器を用いない空間利用のしかた、つまり物置や作業小屋のような用途を想定できるであろう。しかし、現状の調査レベルと認識では、想定はできても多くの掘立柱建物を機能別に分類することは不可能である。

次に、斜面における建物の特徴を指摘しておきたい。23号と29号掘立柱建物跡は、傾斜角度5°以上もある斜面に構築されており、両者とも3×2間である。残念ながら、2棟とも攪乱で全体像は確認できなかったが、両者補完しながら構造を見ていきたい。23号は桁行北側、29号は桁行の南側の中央2本の柱間距離がやや狭く、他の掘立柱建物跡と比べるとバランスが悪いのである。調査時点では、掘立柱建物跡が2棟分も想定して精査したが、他の平坦面の掘立柱建物では観察できなかったことであり、斜面と関連する特徴ではないかと考えた。斜面地における建物の建築には、平坦地よりも労力と時間が必要であることは想像に難くない。さらに地面の流失や建物の傾斜など、注意を払わなければならないことも多い。また、床についても、土間とするにはかなりの土量の切り盛りが必要で、板を水平に張った床構造が考えられる。桁行中央の2穴が接近しているとはいっても、梁行側の柱間距離と比較するとこの2穴間だけが短いのであって、3×2間ではあっても実際には規模的に一般の建物よりも桁行側をやや短くした結果となっている。このことは、建物自体の強度が増したと考えられ、さらに、風雨による床下の削平・流失を防止するためには、柱穴に沿って板などで床下を遮断する方法がある。このような根絡み工法は比較的簡単であり、沈下・傾斜に対する強度の面でも有効である。根絡み工法に関しては、遺構としては確認できないが、敢て斜面に建物を構築する場合には、何等かの対策が講じられたであろうが、施工の簡単な柱穴の増加と根絡み工法は、その有力な候補ではなかろうか。

引用・参考文献

石田広美『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会 1977

井上尚明「古代集落における掘立柱建物について」『土曜考古10』1985

③ 特殊な形態の遺構

本遺跡で特徴的な遺構として、36号竪穴住居跡と11号土壌が上げられる。36号竪穴住居跡については、竪穴住居跡という言葉は使用したが、カマドの存在が明確でなく、間仕切状の施設や全体の形態からも、一般の竪穴住居跡とは異なる。ほぼ全面に大木の根が入り込んでいたので、遺物の出土状態やカマドを含めた構造の観察はできなかったが、オーバーハングした壁と間仕切は確認できた。南東コーナーで床面の乱れと壁上面の崩れがあり、間仕切によって2分割された北側の区画が



第307图 掘立柱建物跡群土層分布図

掘立柱建物跡一覧表

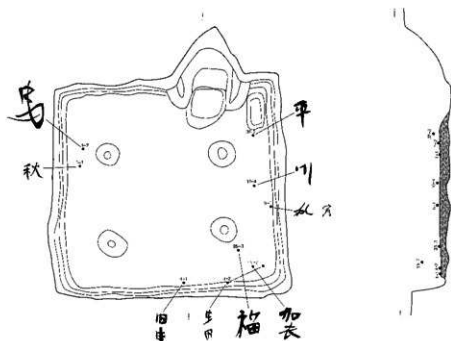
番号	位 置	規 模	桁行×深行 (m)	主軸方向	備 考
1	M-7・8	2×2	4.45×3.9	N-76°-W	
2	Q-12				
3	Q-12				土器
4	N-11				
5	N-11				硬化面
6	P-11	2×2	4.9×4.2	N-8°-W	土器
7	Q-11	2×2	5.6×4.6	N-6°-W	土器
8	Q-12	2×2	5.4×4.1	N-88°-E	土器
9	R-11・12	3×2	7.2×5.2	N-78°-E	焼土、土器
10	R-11・12	3×2	7.1×5.2	N-11°-E	土器、小丸
11	U-13	3×2	7×5.2	N-75°-E	
12	V-12	3×2	6×4	N-89°-W	土器、一部溝持ち
13	V-13	2×2	5.2×4.7	N-3°-E	土器
14	V-13	2×2	5×3.8	N-84°-W	土器
15	X-11	3×2	6.1×3.6	N-11°-W	土器
16	Y-15	3×2	7.4×4.8	N-2°-E	
17	X-13	3×2	7.6×5	N-2°-W	土器
18	W-12・13	2×2	7.1×5	N-3°-E	灰土、土器
19	W-12	3×2	5.3×4.5	N-3°-W	土器
20	X-13	3×2	7.4×4.5	N-2°-W	土器
21	R-12・13	2×2	4.4×4.4	N-5°-W	土器
22	AC-16	2×2	5.9×4.6	N-2°-W	焼土、土器
23	AC-16	3×2	6.7×5.4	N-88°-E	
24	AE-13			N-4°-W	土器
25	AD-13	3×2	7.2×5.5	N-89°-E	土器
26	AE-13	2×2	5.5×4.4	N-86°-W	土器
27	AE-15	3×2		N-4°-E	土器
28	AE-14			N-6°-E	
29	AC-13	3×2	6.6×5	N-90°-E	土器
30	AC-14	3×2	7×4.8	N-90°-E	土器
31	AD-12	4×2	9.7×5.8	N-6°-W	焼土、土器、鉄製鍬
32	AD-13	2×2		N-5°-E	土器
33	AD-12				土器
34	AII-17			N-4°-W	土器
35	AF-17	3×2	8.8×5.9	N-11°-W	土器
36	AG-17	2×2		N-17°-W	
37	AH-14	4×2	8×5.1	N	土器
38	AO-20	4×2	9.1×6.1	N-2°-E	土器、一部溝持ち
39	AO-19	5×2	13.3×5.8	N-1°-E	
40	AN-18	3×2	8.3×4.7	N-15°-W	

面積的にやや狭い。集落内の位置としては、斜面が終わり下位の平坦面が始まる部分にあり、南には集落を区画すると考えられる溝が東西に走り、西には3基の井戸が存在する。また、北には馬具が出土した35号竪穴住居跡が隣接しており、構造とともに特徴的な立地である。現状ではこの遺構の性格・用途については不明と言わざるをえないが、井戸の近くで、馬具の出土した竪穴住居に隣接していることから、馬の飼育に関わる施設ではないかと推察したい。

11号土壇は、斜面の傾斜が最も強い所に位置し、南北を基準とした場合集落のほぼ中央に相当する。壇底中央のピットは、覆土の堆積を観察すると柱穴であり、柱痕自体は土壇覆土には見られないことから、柱は廃絶時に壇底に沿って切られたようである。つまり、柱が立って土壇が機能していた時点では、土壇は開口して内部には人が立っていられる程度の空間が存在したと考えられる。斜面地であるにも関わらず、壇底が平坦で堅緻であることから、ここが床として機能していたことは想像に難くない。この遺構も現状では性格を云々できないが、旗やモニュメントとしての柱状建造物などが考えられ、覆土中にも土器・鉄器・石などが含まれており、埋没時にも人の手が加わっていたと想定すべきだろう。

④ 墨書土器とその出土状況

文字に関する資料としては、合計44点の墨書土器・窠書き土器・転用硬が出土している。墨書土器については、これまでに多くの研究がなされ、多量の土器の中でも注目され、特別視されている。以前、墨書土器の分析やその視点について述べたことがあるが、常にこのような方法で良いのかという疑問が払拭されないでいる。それは我々が土器に書かれた文字に対して、解説ではなく解釈をしているからで、墨書土器のコードブックを持たない我々では、特別な場合を除けば文字の内容に関する解釈には自ずから限界がある。ここでは、文字の解釈とは別の視点で墨書土器を考え直す立場から、意味や内容については簡単に触れる程度にし、墨書・窠書き土器と硯の、竪穴住居跡からの出土状況について検討してみたい。つまり、竪穴住居跡を模式化して、どの位置からこれらが出土する傾向が強いかを示し、発掘現場で得られた基礎情報を提示したい。



第308図 墨書土器出土位置模式図

墨書土器

17点の墨書土器は全てが須恵器で、器種は坏15点、高坏1点、蓋1点で、坏のうち書かれた部位は、底部外面13点と最も多い。出土遺構は、11点が竪穴住居跡、6点が3号井戸で、井戸出土の墨書は6点とも「平」である。これに対して竪穴住居跡出土の墨書は多様で、「平」2点、「平□」「秋」「馬」「内生」「生内」「袈」「福」が各1点と、墨痕だけで判読が不可能なもの2点（このうち内外面にあるが両者共不明なもの1点）がある。鳩山窯跡群からは、「内」の押印が出土しているが、本遺跡の「内生」「生内」との関係が考えられる。また、本遺跡の北に所在する鶴ヶ島市横田遺跡では、鳩山窯跡群のもうひとつの標識文字とも言える「木」の墨書が検出されており、押印と墨書の違いはあっても、墨書されている須恵器は鳩山窯跡群産であり、産地と消費地以上の関連をこれらの墨書が示唆しているのではなかろうか。

「馬」は文字が不明瞭であり、当初は「曳」の字と考えたが、赤外線カメラによる観察で「馬」の可能性が高くなった。馬といえは35号竪穴住居跡から轡が出土しており、遺跡の性格に大きな影響を与える文字である。馬具だけでも馬の存在を肯定する有力な資料となるが、「馬」の墨書により、馬とそれに関わる人間・集団の姿を想定させる。遺跡全体の性格などについては後述するが、「馬」の字だけから見た場合も、交通路や牧・駅などとの関係を考えておきたい。

「袈」は「加」と「衣」の2文字の可能性も残るが、袈裟の「袈」と読むのが自然であろう。袈裟とはもちろん僧のころもの意味で、法衣、僧衣のことである。袈と裟は単独では特に意味を有せず、袈裟の2文字で意味を形成するもののようで、この墨書の持つ意味も袈裟の「袈」と解してよいであろう。ここから導き出せるのは、僧侶の存在⇒寺院⇒仏教であり、光山遺跡群に宗教的な要素を想定させる有力な遺物である。

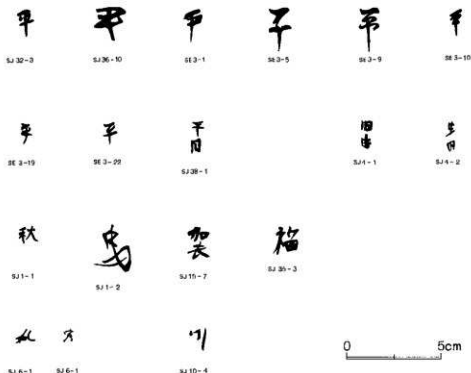
「福」は馬具の出土した35号竪穴住居跡の床面から検出されており、本遺跡のⅡ～Ⅲ期に相当する。この文字は栃木県向原南遺跡、埼玉県一ツ狗遺跡や新開Ⅰ遺跡などからも出土しており、一見吉祥句のような印象を受ける。しかし、光山遺跡群の位置を考える時、亡命高句麗王族のひとりである天平勝宝八年（756）には武蔵守を兼任していた、高麗朝臣福信の存在を忘れるわけにはいかない。

「福」の墨書を直ちに福信の名に結びつけるのは危険であるが、土器の編年からは年代的にもほぼ一致する。正倉院の『種々葉帳』にある福信の自署と比較すると、筆跡が同一ではないが達筆の部類であり、記号として「福」の字を書いたのではなく、意味や内容を理解している識字層の手によるものと想定できる。

「平」あるいは「平□」は井戸と3軒の竪穴住居跡から出土しており、坏以外でも高坏と蓋にも書かれている。「平」は埼玉県では、中郷遺跡、下田遺跡、古耕地遺跡などからも出土しており、全国的にも出土頻度の高い墨書のひとつであろう。この文字は吉祥句と考えるのが一般的であろうが、井戸から出土しているものが多いことから、水に関する祭祀も考えられる。特に最下層の高坏はその意味を強く感じる。

さて、墨書の出土状況であるが、竪穴住居跡以外からも出土しているため、これらは除外して住居跡出土土器のみ対象として、模式化した住居跡に出土位置を落としてみた。これによると、床面中央からカマドに向かって、右の壁際に集中している。出土層位は多くが床面からで、住居に伴う

土器と考えられることから、本来の位置を示しているといえるであろう。これを竊書き土器と硯の出土位置と比較すると、平面的には特に墨書のように壁際には固執しておらず、墨書が一点も出土していないカマドからも出土している。垂直分布では、墨書が床面付近が主体であるのに対して、最上層から床下に至っている。竊書き土器・硯の出土状況は、平面・垂直ともに一般の遺物出土状況そのものであり、墨書土器が特異な状況にあるといえるであろう。これらを考え併せると、墨書土器の本来の位置が壁際で、しかも覆土からの検出が少ないことから、住居廃棄時に墨書土器を置いていくという行為を連想させる。一つの遺跡だけから結論を導き出すことはできないが、本遺跡においては以上のような傾向が看取できた。多くの遺跡で比較することで、より高い確率で傾向を論じられるかもしれない。



第309図 文字集成

竊書き土器

合計17点で、全て+あるいは×である。器種も1点を除いて須恵器坏であり、焼成以前のものである。

硯

全て転用硯で、器種は壺3点、坏2点、蓋3点、長頸瓶1点である。このうち僅かであるが、朱墨痕の付着しているものが3点ある。

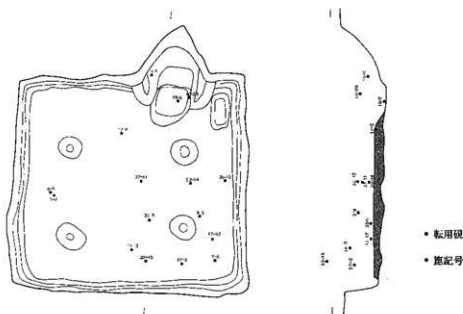
墨書土器に関しては、多くの観察要素があり、まだまだ未開拓な部分も多いと思われるが、文字内容ばかりに注目する傾向にある。どのような内容の墨書であろうと、それ以前の属性や基本的な情報を見落としているような気がしてならない。墨書土器の可能性を考え直すためにも、コードブック渡しは、出発点である発掘現場から始めたほうがいいのではなかろうか。

引用・参考文献

井上尚明「墨書土器の分類と分析」『将監塚・古井戸Ⅱ』埼玉泉埋蔵文化財調査事業団 1988

栗田則久「古代集落と墨書土器」『月刊文化財362号』第一法規出版株式会社 1993

奈良国立博物館『平成5年正倉院展目録』1993



第310図 硯・施記号土器出土位置模式図

天平勝寶八歳六月廿一日
 從五位上行藤原朝臣藤原朝臣 永手
 從五位上行藤原朝臣藤原朝臣 仲麻呂
 從五位上行藤原朝臣藤原朝臣 福信
 從五位上行藤原朝臣藤原朝臣 白土

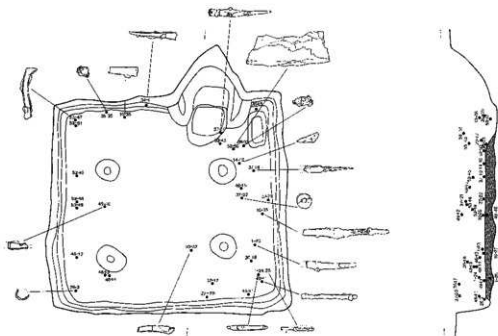
第311図 種々薬硯の福信自署

⑤ 鉄製品とその出土状況

本遺跡から出土した鉄製品には、刀子・鎌・釘などがあるが、ここでは竪穴住居跡から出土したものを、墨書土器で用いたのと同様の方法で模式図化して、出土位置の傾向を探ろうと思う。鉄製品、特に鉄鎌と刀子の出土状況に関しては、最近非常に興味深い指摘がされているので(松村1993)これを意識しつつ鉄製品について考えてみたい。

図示したのは、床面あるいは床面から数cmの出土状態にあった鉄製品であるが、これを含めて平面的な分布傾向は、カマド対面の壁を除く壁際である。特にカマドに向かって右側の壁際に集中するが、カマドや柱穴からの検出例はない。このような出土位置が、鉄製品の使用空間かあるいは収納・保管場所を示しているのかは即断できないが、床面中央部分から出土していないことに注目すると、収納されていたものと見るができる。鉄製品を直に床面に置いておくとは考えられないことから、収納空間としての屋根に掛けられた棚からの転落を想定できないであろうか。前述の松村の建築儀礼としての鉄製品のありかたを考えると、残念ながら鉄鎌は覆土から出土した1点しかないため比較はできないが、刀子にまでこの考えを適用しても、北東の鬼門あるいは裏鬼門に偏在するというような傾向は確認できなかった。しかし、以前から竪穴住居跡から鉄製品が出土することへの疑問があったが、このような視点は新たな可能性として継承されていくべきであろう。

本遺跡では、鍛造切片と砧石が出土した6号竪穴住居跡が鍛冶遺構ではないかと考えられるが、この他にも53号竪穴住居跡から鉄分の付着した、砧石が検出されている。また、3号井戸からは碗形滓が出土しており、鍛冶関連の遺構が集落内に点在していたことが予想できる。出土した鉄製品は58点で、このうち21点が刀子である。出土した種類は一覧表のとおりであるが、このなかで注目



第312図 鉄製品出土位置模式図

されるものとして、轡と鍵がある。轡については別項で述べるので、ここでは鍵について触れておきたい。

31号掘立柱建物跡の鍵は、一般に海老錠と呼ばれる錠前に伴う鍵であり、柱穴8の最上層から出土している。これまで埼玉県内では鍵の手状に曲がった、鎧あるいはクルリ錠の出土は北坂遺跡・今井遺跡・花ノ木遺跡の3例あるが、錠前の鍵の検出は初めてである。全国では、奈良・平安時代に限ればこれまで26例が紹介されているが(合田1992)、このうち10例は平城京跡である。本遺跡例は、平城京S D1300出土鍵と、大きさ形状ともに類似しており、合田分類の鍵2類に相当する。合田の分析によれば、鍵を含めた錠前の出土遺跡について、官衙では記録・文書類の保管箱や、各種の倉に掛けられ、官衙以外では、錠前を必要とするのは財産管理を要する階層であると指摘している。また、錠前・鍵の供給については、官衙では官給品として全国の地方官衙に供給され、有力な寺院では所有する庄に対して、配布していたとされている。出土遺構については東国では、竪穴住居跡が中心であるが、本遺跡では4×2間の掘立柱建物跡からである。(井上高明)

引用・参考文献

- 合田芳正「いわゆる鎧(クルリ錠)について」『青山史学13』 1992
 合田芳正「古代の錠前・鍵」『考古学雑誌78・2』日本考古学会 1992
 松村恵司「鉄鍔と建築儀礼」『山梨考古46号』山梨県考古学協会 1993



鍵のX線写真(原寸)

鉄製品一覧表

遺構	番号	種類	残存	大きさ	重さ	層位	備考
1号住居	23	刀子	先端部欠損		14.76 g	床上5 cm	
	24	刀子	刃部欠損			覆土下層	
	25	刀子	木質残存			床下	
10号住居	36	刀子	木質残存			床	
	37	刀子			5.55 g	床	
	38	刀子			5.41 g	覆土	
12号住居	2	刀子	木質残存	9.7 × 1.1 2.9 × 0.5	7.89 g	床直	
14号住居	10	不明			3.38 g	床直	
22号住居	17	刀子	先端欠損		10.40 g	カマド	
	18	釘			2.65 g	Pit 2	

遺 構	番号	種 類	残 存	大 き さ	重 さ	層 位	備 考
26号住居	3	不明			0.98 g		
27号住居	26	不明		5.1 × 0.85	2.38 g		
30号住居	18	釘		11.1 × 0.5	6.73 g	覆土	
	19	刀子	身部片	1.7 × 4.1 × 0.3	4.53 g		
34号住居	1	刀子		7.6 × 1.2	6.0 g	壁溝	
35号住居	33	刀子	刃部破片	3.4 × 1.7 × 0.5	3.93 g	床下	
	34			1.43 × 2.15 × 0.2	1.43 g	床	
	35			1.2 × 2.8 × 0.2			
	37	簪			1.57 g	床	完形
37号住居	17	鎌		8.1 × 1.9 × 0.34	12.32 g	上層	
	18	手鎌			1.36 g	下層	
	19	刀子			5.17 g		
	20	刀子			9.03 g	上層	
	21	釘			2.92 g	床	
	22						
38号住居	6	手鎌			2.90 g	床	2mm強の孔
	7	釘	皿部欠損		4.28 g	床	
40号住居	10	釘			1.52 g	上層	
	11				2.32 g	下層	
42号住居	2	刀子		9.5 × 1.1	7.71 g	床	
	3			3.2 × 2.5	11.63 g	上層	
46号住居	11	釘		6.6 × 0.5	5.5 g		
	12			5.8 × 2.1	4.82 g		
48号住居	13	刀子	刃部欠損	7.3 × 1.5	10.53 g		
	14	刀子		4.2 × 1.2	4.65 g		
	15				1.02 g		
49号住居	10	刀子	刃部欠損	9.1 × 0.7	2.67 g	床下	
	11				5.13 g	下層	
	12	刀子		3.1 × 0.9	1.74 g	床	
53号住居	42	鉄線		11.7 × 1.3	15.51 g	覆土	
	43	刀子		5.2 × 0.9	3.09 g	覆土	
	44	刀子		2.9 × 1.4	1.80 g		
	45	釘		12.6 × 0.8	22.72 g		
				1.6			
	46	釘		11.1	31.19 g		
	47	釘		8.3 × 0.9	24.0 g		
	48	(釘) ?		4.0 × 0.6	3.20 g	床	
	49	不明		6.4 × 1.3	8.05 g		
	50	鋤先		13.0 × 4.4	168.49 g	床	
	51	鎌		5.2 × 3.1	20.16 g		
10号掘立	10-1	小札 (?)		3.0 × 2.3	4.00 g		
	10-2			8.0			
31号掘立	31-1	鎌		11.5 × 0.6	17.8 g	上層	完形
SD-2	4	刀子	両端欠損	0.9 × 0.3	2.43 g		
SE-3	30	桃形滓		8.3 × 6.1 × 3.8			
グリッド	22	釘				攪乱	
グリッド	23	釘			9.41 g	攪乱	

⑥ 轡について

轡のつくりと類例 本遺跡の第35号住居跡から出土した轡は、出土資料としては良好な状態であり、その構造をよく観察することができる。鏡板は鉄棒を8字状に引回したうえ、先端を細くして巻きつけており、8字が交差する中央の部分で喰および遊金を介した引手が連結している。立聞には金具を設けないが、先端を巻いた間の部分が立聞にあたると考えられる（第313図1）。

遺跡出土の轡のなかで、本例に類するつくりをもつものとしては、東京都八王子市多摩ニュータウン№178遺跡1号住居跡出土例（雪田他1969・東京都埋蔵文化財センター1991）と、青森県八戸市丹後平21号墳周溝出土例（工藤他1991）をあげることができる。

多摩ニュータウン№178遺跡出土例（第313図2）は、本例よりも小ぶりで、鏡板に扁平で角の鉄棒を使用し、遊金を介さず直接引手が連結している。また、鏡板の一方は先端の巻つけがなく完結している。出土遺構である1号住居跡は、柱穴や炉の周囲に鉄滓が付着し、羽口が出土している。鍛冶関連の遺構と考えられ、その時期は十一世紀とされている。

丹後平21号墳出土例（第313図3）は鏡板の鉄棒の撚りの回数が多く、遊金は介さない。引手は2条の細い鉄棒を使用している。丹後平古墳群は七世紀後葉から八世紀前葉にかけて形成された墳墓群であるが、21号墳は他の遺物などから七世紀末頃の年代が与えられる。

また、岩手県北上市上鬼柳Ⅲ遺跡のⅡB1号住居跡からは、中央がねじれた鏡板の一部が出土している（伊東他1991）。鏡板の鉄棒は扁平ではなく、丹後平例に似たつくりをもっていた可能性もあるが、ここでは参考資料にとどめておく。遺跡は平安時代の集落跡で、この住居跡の時期は九世紀後半とされている。

以上の類例と比較すると、丹後平21号墳出土例は2条線引手をもつことから、本例に先行するものと考えられる。これに対して多摩ニュータウン№178遺跡出土例は、後述する杏葉轡と同じく鏡板の鉄棒が扁平であり、本例よりも時代が降る資料と考えられる。したがって、本例はその伴う土器の示す年代である八世紀中頃の作例とみなすのが妥当であるといえよう。

では、本例が歴史時代の轡の中でどのように位置づけられるのか、他の奈良時代以降の出土例から考えてみたい。

奈良時代の出土轡とその遺跡 奈良時代の作例として現存する轡には、正倉院伝承の轡がある。これは「蒺藜（うばら）轡」と称されるもので、眼鏡状の鏡板の中央で喰と引手が連結し、立聞は兵庫鎮で先端に鉤具がつく。こうした蒺藜轡の出土資料としては、石川県羽咋市寺家遺跡（第313図4・小嶋他1988）や、山口県下松市宮原遺跡（第313図5・内田他1973）、および群馬県前橋市他鳥羽遺跡（第313図6・唐澤他1986）に例がある。

宮原遺跡出土例は弥生時代の住居跡の覆土に混入していたものである。周辺に歴史時代の遺構はなく、不明な点が多い。

寺家遺跡は古代から中世における気多神社の主要な部分を占める遺跡で、気多神社が727～922年までの渤海国との遣使交流に関する祭祀を主要な行事のひとつとしていることから、この周辺は渤海の文化影響が強いとみなされている。このような遺跡からこの種の轡が出土していることは興味深い。

鳥羽遺跡は八世紀から十一世紀後半が中心となる大規模な集落遺跡で、800軒以上の住居跡が検出された。その位置関係や内容から、上野国府との結びつきが非常に強い遺跡と考えられている。甕が出土したⅠ区103号住居跡は張りだしをもつ大型住居跡で、他に銅鏡や鉄など特殊な遺物が出土している。共存土器の時期は八世紀後半と考えられる。

また、古墳時代末の資料として知られている「f字状棒状鏡板付甕」も、唐時代の資料との関連から、奈良時代に盛行した可能性が高いと指摘されている（片山1991）。

平安時代の甕とその遺跡 平安時代の甕では鏡が円盤状の「鏡甕」と杏葉に似た形態の「杏葉甕」が代表的である。ともに十二世紀後半に描かれたとされている『伴大納言絵詞』や、十三世紀中頃～後半に描かれた『平治物語絵巻』などの絵巻資料において、武将の馬に用いられているのを見ることができる。

鏡甕の出土資料としては、京都府京都市法住寺殿（1183年焼失）から象嵌の施された優品が出土している（第313図9・寺島他1984）。この甕は甲冑と武具が一括埋納された土壇から出土したが、この土壇は平安時代末の武将の墓と考えられている。

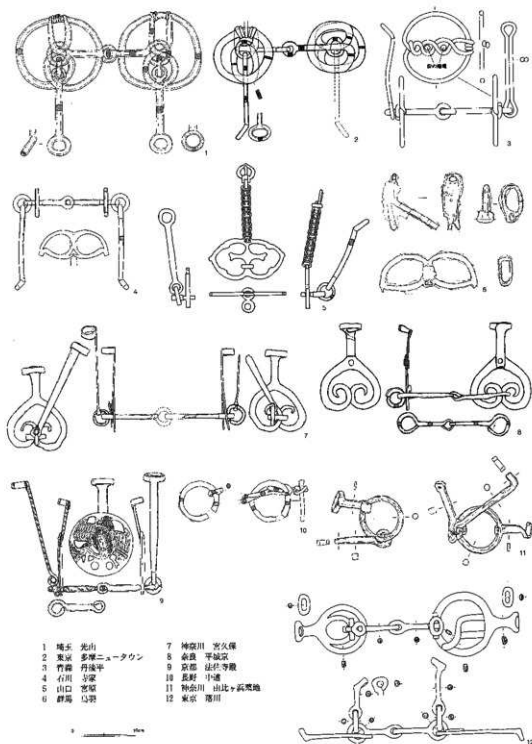
杏葉甕は現在まで伝わる作例は知られていないが、『伴大納言絵詞』などの資料から数種の存在が想定されている（片山1991）。そのうちの1種である鏡板を逆ハート形に交わらせたものが、管見では2例ほど確認された。一つは、神奈川県綾瀬市宮久保遺跡住居跡SⅠ058出土例である（第313図7・國平他1990）。宮久保遺跡は相模川と平行してのびる座間丘陵の南端、傾斜面に立地する奈良・平安時代の大集落跡で、木簡の出土から、官衙に関連する遺跡と考えられている。甕の出土したSⅠ058は共存土器から八世紀第3四半期と考えられているが、覆土上層からの出土であり、その型式からもさらに時代の降るものと推定される。

もう一例は、平城京左京二条四坊二坪の井戸S E41出土の甕である（第313図8・中井・鏡方1989）。このS E41からは十二世紀後半の遺物が出土しているが、調査地周辺は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて、興福寺領荘園（佐保田庄）に含まれていたとみられ、検出された遺構はそれに関連する可能性が指摘されている。

これらの甕は立間を鏡板から高く造り出し、鏡に設けた穴や中央の柱の部分に喰を連結して、これに鏡の外側から遊金を介して引手へ繋ぐ構造をもつ。これは和式甕の基本的な形態とされている。鏡甕や杏葉甕が、当時の武将に好んで用いられたことは、絵巻物からもあきらかであるが、これらの出土遺跡の様相もまた、そのことを裏づけているといえよう。

このほかの出土甕として、鏡甕や杏葉甕にあてはまらないものも散見される。東京都日野市落川遺跡のM-19グリッド第7号土坑から出土した甕は、左右異なった鏡板と引手を持つ特異な甕である（第313図12・福田他1983）。しかしながら、遊金を介した連結や、立間の造り出しといった基本条件は備えているので、和式甕の一種とみなしてよいであろう。落川遺跡は七世紀後半から十一世紀にかけて連続と営まれた集落遺跡で、本土坑の時期は十一世紀初頭とされている。この時期の落川遺跡は武蔵武士の居館とされていることから、この甕も杏葉甕と同じく武士階級に用いられた甕とみなされよう。

また、秋田県秋田市湯ノ沢F遺跡32号土壇墓出土例（石郷岡1986）は錆化が著しいため判然とし



第313図 歴史時代の出土物

ないが、杏葉轡に類する構造をもつ轡と推定される。遺跡は平安時代の土壌墓群であり、十世紀中頃に推定されている。

含轡の出土例とその意義 出土資料のなかでは、環状の鏡板に喰と引手を取りつけた「含（ふくみ）轡」に分類されるものが最も多い。まず、長野県上伊那郡箕輪町中道遺跡20号住居跡の出土例がある（第313図10・伴他1974）。この轡は完形品ではないが、素環の鏡板に喰と引手が鍍金を介さず連結されているものと推定される。立聞はない。中道遺跡は天竜川支流深沢川左岸の河岸段丘上に位置し、牧との関連が深いとされている遺跡である。奈良・平安時代の住居跡は69軒検出されたが、20号住居跡はこのなかでは最大級のもので、共伴する土器は八世紀末頃を中心とした年代が与えられる。

次に、最近の調査で出土した千葉県市原市喜多仲台遺跡の資料もこの範疇に入る（田中1993）。これは断面が扁平な素環の鏡板に2連の喰を直接連結したもので、引手および立聞をもたない轡である。喜多仲台遺跡は村田川左岸の台地上に位置する。平安時代の住居跡は19軒検出されており、轡を出土した住居跡の年代は九世紀前半と考えられている（注1）。

さらに、こうした集落遺跡ばかりではなく、墳墓からも出土例がある。先に触れた湯ノ沢F遺跡の3号と6号土壌墓からも含轡と思われる轡が出土している（石鮮阿1984）。また、時代は降るが、神奈川県鎌倉市の由比ヶ浜中世集団墓地遺跡からは、和式轡に共通する高い立聞を有する含轡が出土している（第313図11・菊川1991）。

含轡は「環状鏡板付轡」として、古墳時代では通有の轡である。にもかかわらず、歴史時代の現存する作例は知られておらず、絵画資料にもあまり描かれていない。このことは含轡が武将級の階級の人々に好まれなかったあらわれと指摘されている（片山1987）。しかし、数は減るものの古代から中世に至るまで含轡の出土資料が存在することは、歴史時代においてもある程度含轡が用いられていたことを裏づけるものといえよう。その出土した遺構の性格をみると、これらの轡は裕福ではあるが、一般庶民の域をでない階級の人々が所持していたと考えられる。単純な構造であり、装飾性も乏しいことなど、庶民の間では比較的流通していた轡であったのではないだろうか。

光山遺跡群出土轡の意義 以上、歴史時代の出土轡について概観してきた。本例のような轡は、従来知られていたものとは異なった、新たな型式の轡として認識しなくてはならないと考えられる。では、その祖形はどこに求められるのであろうか。本例のように鏡板の環が複数となり、その中央で喰を連結する型式の轡は、「復環式鏡板付轡」と称され、古墳時代からその系譜をたどることができる（滝沢1992）。資料がさほど多くないため、その変遷を途切れなくたどれる訳ではないが、本例はこうした前代の系譜を受けた轡のひとつと考えることができる。もちろん復環式鏡板付轡は当時の大陸や韓半島の文化の影響下で成立したものであるが、奈良時代においては、新たに唐から輸入された可能性が高い、「外来」の蒔絵轡とは対照的に、いわば「国風」な轡としてとらえることができよう。

こうした歴史時代における復環式鏡板付轡の展開は、少なくとも含轡のように拡散したものはなかったようである。このことは出土例が乏しいことから裏づけられよう。含轡と比較して鏡板が大きく複雑な構造を持つことから、あまり一般的なものではなく、その流行も限られたものであっ

たのではなからうか。そして和式轡の成立と前後して使用されなくなっていったものと考えられる。言葉を変えれば、本例は古墳時代の轡から和式轡へという馬装の変化のなかで、その中間を占める轡のひとつに位置づけられ、ただでさえ例の少ない歴史時代の轡のなかでも、とくに和式轡の成立を考える上で貴重な資料ということができる。

(瀧瀬芳之)

この稿をまとめるにあたって、馬の博物館の片山寛明、木村李花子両氏には数々のご教示をいただいた。また、大村 直、斎藤 弘、津野 仁、松崎元樹、山口耕一の各氏には資料の実見や文献の入手等に関していろいろ便宜をはかっていただいた。末筆ながらお礼申し上げます。

(注1) 同型式の轡は栃木県芳賀郡市貝町仁王地遺跡の住居跡からも出土している。同遺跡は現在(平成5年10月)町教育委員会で調査中である。斎藤 弘・山口耕一両氏のご教示による。

引用・参考文献

- 石郷岡誠一「湯ノ沢F遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会 1984
- 石郷岡誠一「湯ノ沢F遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会 1986
- 伊東 格他『上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第161集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991
- 内田 悟他「宮原遺跡・上広石遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告第20集』山口県教育委員会 1973
- 大谷 猛「住居址出土の馬具」『学芸研究紀要』第1集 東京都教育委員会 1984
- 片山寛明「日本の轡—奈良時代—江戸時代」『馬の博物館研究紀要』1 根岸競馬記念公苑 1987
- 片山寛明「和式轡の展開」『日本馬具大鑑』第3巻 中世 日本中央競馬会 1991
- 唐澤至朗他『鳥羽遺跡G・H・I区』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 群馬県教育委員会他 1986
- 菊川 泉「鎌倉出土の武具・馬具」『中世都市研究』第1号 中世都市研究会 1991
- 工藤竹久他「丹後平古墳」八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集 八戸市教育委員会 1991
- 國平健三他「宮久保遺跡」Ⅲ 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 神奈川県立埋蔵文化財センター 1990
- 小嶋芳孝他『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター 1988
- 滝沢 誠「復讐式鏡板付轡の検討」『史跡森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』更埴市教育委員会 1992
- 田中茂良「喜多仲台遺跡」『第8回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター 1993
- 寺島孝一他「法住寺殿跡」平安京跡研究調査報告第13輯 財団法人古代学協会 1984
- 東京都埋蔵文化財センター「資料目録」6 1991
- 中井 公・鎌方正樹「平城京左京二条四坊二坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』奈良市教育委員会 1989

伴 信夫他「中道遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上—伊那郡箕輪町—昭和48年度』
長野県教育委員会他 1974
福田健司他「日野市落川遺跡調査概報」Ⅲ 日野市落川遺跡調査会 1983
菅田 孝他「多摩ニュータウン遺跡調査概報—昭和44年—」 多摩ニュータウン遺跡調査会 1969

⑦ 桃の種子について

埼玉県内における桃の出土状況は、本遺跡のように台地上の集落などでも見られるが、沼地、湿地、低地、河川付近の自然堤防上に比較的多く出土している。

遺跡の立地地点

小針北遺跡……………沼地
寿能泥炭遺跡……………入間川、利根川に挟まれた低地
新ヶ谷戸遺跡……………荒川旧河道の自然堤防上
鍛冶谷・新田口遺跡……荒川左岸の自然堤防上とその周辺の低湿地
小敷田遺跡……………低地部で湧水点の多い湿地
小沼耕田遺跡……………自然堤防のある低地
六反田遺跡……………利根川支流小山川と志戸川の合流地点

県内10例中、7例が、沼地、低地、湿地、自然堤防上の何処かに当てはまり、県外でも京都市の烏羽離宮遺跡のように、池の汀線沿いに出土している。

桃が出土する遺構についても、井戸、溝が多く、10例中、8例がどちらかである。時代については、遺構によって様々で、光山遺跡群からは竪穴住居跡を含め11点出土している。光山遺跡群の場合、住居から6点、井戸から1点、溝から2点、土壌から2点出土しており、井戸と溝以外の桃の核は、全て炭化している。また、井戸、溝出土の桃は他の遺構出土のものに比べて大きい。桃と桃以外の出土遺物の関連性は見出せない。

文献に現れる桃について紹介すると、年の瀬をいろいろ年中行事であった追儺で桃の杖、桃の弓が使われている。追儺とは、大晦日の夜、悪魔を払い疫病を除く儀式で、古くは中国に始まり、『論語』、『周礼』などにみられ、宮中だけでなく社寺、民間に行われた。その儀式は「晦日の戌の刻、王御着座、陰陽寮から、桃の杖、桃の弓、葦の矢を王御に配布、天皇紫宸殿に出御、黄金四ツ日の仮面をかぶり玄衣朱裳をまとい、右手に柝、左手に盾をもった方相氏の役（中務省の大舎人の中から身体の大きな者が選ばれた）が仮子20人（後に8人）を率いて参入、王御は侍従、大舎人などを率いて方相氏の後ろに列し、陰陽師は斎郎を率いて月華門より入り祭を行い呪文を読み終わると、方相氏は大声を発し、柝で打つこと三度、群臣これに呼応して、桃の杖、桃の弓、葦の矢で東西南北に分かれて疫鬼を駆逐する。」（中村1991）というものである。宗慄の『荆楚歳時記』の正月一日の条に、「長幼悉く衣冠を正し、次を以て拝賀す。椒柏の酒を進め、桃の湯を飲み、屠蘇酒と……」『殿暦』嘉元1年（1106）の五月七日の条にも元旦に桃の湯を飲む事が記されている。「今日初めて沐浴せり。（湯に桃の木を入れる）是れ、陰陽師並びに医師の中せし所なり。」と湯に桃の木を入れる例もある。現在でも、夏の土用中に桃の葉を入れて沸かした湯は、汗疹を治す効果があるといわれ

る。またヤマモモの皮の煎じ汁は染料だけでなく薬用としても用いられる。

その他に、桃蒨といい、ももの棒に葦の穂を結びつけて箒状にしたものが、不祥を払う力があることや、桃梗または桃人ともいい、桃の木を彫刻して作った人形が、一種神秘的な力を持ち、それを門戸に立てたりした。また、桃の棒を門に突き刺す例もあった。同じようだが、桃爰といって桃の木で作った棒を帯に付け、邪からのがれる意もあった。また、『日本書紀』の一書では、伊弉諾尊が道のほとりの大きな桃の樹の下に隠れて、実を採って、追ってきた雷どもに投げつけたら、退散したとあり、それが桃に呪力があるといわれたものと記されている。中国では、新年に災厄をさけるため、門扉や門柱に、桃符を貼る風習があったといわれる。古くは、桃の枝を門に挂けることに始まり、次第に魔除けの護符の一種となった。

桃に呪力があるといわれる由縁は、中村氏の諸説をふまえていくつか挙げてみたいと思う。まず最初は、桃独特の薬味が辟邪の力を持っているということ。そして桃は陽気の花で陰気を逐う力があるのではないかと。また桃の実が女陰に似ているから、あるいは植えやすく、早く花が咲き、実が多いこと、そしてその字は「兆」にしたがい多産の象徴であったのではないかと。「逃」と「桃」は、同音でともに追い払う意に通ずるから凶気を払う呪術として用いられたのではないかと。

『宇多天皇御記』に「……正月十五日の七種粥、三月三日の桃花餅、五月五日……」と桃花餅がみえている。桃花餅の実体は明らかではないが、現在では、三月三日に桃酒を飲むならわしがある。桃花が水に流れたのを飲んでから気力さかんとし、寿命が300余歳に及んだにあやかっただという説がもとである。三月は農事上でも啓蟄の時期にあたり、桃の花を供えることで物忌みや穢いを行い悪鬼を払ったのではないだろうか。

桃に関する県内の民俗例を上げると、上尾市の原市町では、四月三日、四日を節句または雛の節句といい、三月十五日過ぎには、出居（主人の居間兼応接間）に雛人形を飾り、四月三日に菱餅を作って祝う。菱餅は、白と草の餅を重ねたもので、初節句には、これを親戚中に配った。人形は節句が終わると早めにしまわれた。人形の市は三月の三と八の付く日に行われ、毎年1個ずつ小さな座り雛を買い足すのが普通であった。同じ地域でも家によって、親元、親戚から贈られる家もあれば、町内の人形を売る店で買う家もあり様々である。壊れてしまった人形は鎮守様に捨てるものであった。節句のお祝いを頂いた家には、草餅、紅白餅となにかをつけて返した。家によっては食紅を使った紅白餅の代わりに桜餅を返す場合もあった。前述の桃花餅も桜餅と同じ様に御返しとして使われたのではないだろうか。坂戸市では、三月二十七、二十八日頃の良い日に雛人形を出した。初節句は親元、仲人、親戚、組合から祝ってもらい、御返しは、菱餅と瀬戸物、衣料品等の記念になるものであった。毎年、雛人形を1個ずつ買い足して雛壇に飾り、大正時代頃には、雛人形を贈ることやもらうこともあったという。菱餅は、食紅を入れた紅白餅と草餅の三色餅であった。尚、雛人形を長く飾っておくと嫁にいけないといわれている。

桃というより自然界への信仰からはじまったと思えるような節句は形を変え、目的を変え現代まで受け継がれている。光山遺跡出土の桃については、遺構、遺物との関連性は見出せないが、11点のうち6点は住居から出土している。6点中、2点は出土位置が不明であり、残りの4点はいずれも、炭化しているのにカマドから出土していない。28・35号住居では、床に近い面から出土してい

る。17・48号住居では柱穴付近で出土しており、床からはかなり高い地点で出土している。

これまでに遺跡から出土している桃は、決して少ない数ではないが、特に注目されることもなく見過ごされることが多かった。しかし、前述したように食用以外にも儀礼などに利用されていた可能性もあり、出土状況など検討課題は多いと言える。また、時期についても、概観したところでは古墳時代から中世にかけてが主体で、遺跡の性格も古代中国の桃の儀礼と同様に宮中から民間にまで及んでいる。

(中島令子)

引用・参考文献

- 浅野晴樹『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会 埼玉県立歴史資料館編 1981
- 上尾市教育委員会『上尾の民俗Ⅱ』1992
- 井上尚明『将監塚・古井戸』古墳・歴史時代編Ⅰ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 岡田文男『鳥羽離宮発掘調査概報』昭和60年度(財)京都市埋蔵文化財研究所 京都市文化観光局
- 岡田文男『鳥羽離宮発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局
- 岡田文男『平安京右京三条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990
- 北畑彰男『附島遺跡』坂戸市教育委員会 1987
- 粉河昭平『平城宮整備報告Ⅰ』奈良国立文化財研究所
- 斉藤国夫『小針北遺跡』行田市遺跡調査会 1981
- 坂戸市教育委員会『坂戸の民俗Ⅱ』1993
- 鈴木三男、能城修一他『小敷田遺跡』河川跡遺物編 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 田中正夫『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 田中信『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』1989 川越市教育委員会
- 利根川彰彦『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 中村義雄『魔よけとまじない』稿新書 1991
- 西口正純『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 邑田仁『寿能炭炭屑遺跡発掘調査報告書』自然遺物編 埼玉県教育委員会 1982

⑧ 漆の付着した土器

内面に漆付着土器が8点、竪穴住居跡から出土している。器種は須恵器坏7点と土師器壺が1点で、量の多少は別にして内面に付着しているものである。2号・4号竪穴住居跡のように、調査開始後まもなく検出されたものは、漆の可能性は考えていたものの、植物性の繊維質が炭化した皮あるいは油煙ではないかと考えていた。しかし、その後秋田城跡などで漆紙や栃木県多功南原遺跡(註1)で同様に漆の付着した土器を実見し、本遺跡における漆の存在を認識した。以後出土する土器については慎重に観察し、8個体の土器を摘出したものである。

付着の状況は、17号竪穴住居跡出土例のようにかなりの量が塊状に残存しているものや、2号竪穴住居跡1のように乾燥するとばらばらに風化してしまう例、あるいは14号竪穴住居跡例は油煙のように土器に密着状態である。このなかで注目できるのは、30号竪穴住居跡のカマドから出土した

土師器壺である。これは内面全面に痕跡が点在するもので、口縁部直下までこれが観察できる。器種自体も本遺跡では唯一の土師器壺であり、漆の容器としての用途を想定できないであろうか。30号竪穴住居跡からは、この他に2個体の漆付着須恵器環が出土しており、このうち1点は壺付着の漆と色調や性質が類似している。また、この環は漆を掻き取ったような痕跡も見られ、漆壺とその取り皿の関係は成立しないであろうか。

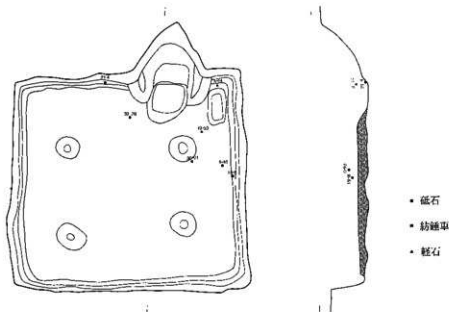
漆については、その認識自体に問題があるため、発見されたからすぐに特殊な遺跡であるとか、その性格を論じることはできないと思う。しかし、今後漆の認識が進めば、漆の存在が一般的であるかどうかは判明していくであろう。現状では、特定の遺跡の特定の遺構からしか出土しないのではないかと考えている。推論すれば、漆工人の存在・漆の流通に関わる集落という結論が抽出できるだろう。

(註1) 栃木県埋蔵文化財センターの大金宣亮、山口耕一両氏の御厚意により実見させて頂いた。

⑨ 石製品の出土状況

石製品には、砥石・紡錘車・軽石があり、竪穴住居跡出土以外にも含めると各々4・6・2点となる。この他に鉄の付着した砧(かなとこ)が2点出土している。ここでは、個々の遺物について述べないで、模式図化した出土状況についてのみ見てみたい。平面的な分布は、砥石・紡錘車・軽石ともにカマドの周辺から出土しており、偏在する傾向にある。砥石の場合、鉄器の出土状況と重ね合わせると、ほぼ重複するような位置関係にある。紡錘車は言うまでもなく糸を紡ぐ道具であり、さらに多くの資料を検討することで、作業位置を特定できる可能性さえ有しているのではなかろうか。

以上のように、各種遺物の出土位置の検討をしたが、これにより、住居内空間の利用形態や屋内祭祀の様相などを検討する、有力な情報を得ることができると考え模式図化してみた。しかし、一遺跡で論じるには、利用できる資料が限定され過ぎ、時代的にも限られたものになってしまったので、傾向の一部を指摘できたに止まった。遺物については、遺構から切り離してそれだけの存在に注目する以前に、現場での出土状況の把握という、基本的な姿勢が重要視されなくなりつつある。私の場合には、各種電子機器を導入した遺物の全点ドットによる記録が、比較的容易にできるようになってから、全点ドットによる安心感と慢心からか、細かな観察が御座りになっている。さらに、ドットの有効な利用であるが、本遺跡においても膨大なドットによる記録を、どの程度活用できたか疑問である。全ての記録と資料を報告書に具現化するのは不可能ではあるが、それを取捨選択するのは我々であり、その責任を再確認しておきたい。



第314図 石製品出土位置模式図

⑩ コップ形土器について

1号竪穴住居跡から、コップ形をした須恵器が出土しているが、この他に実測不可能な細片が9号竪穴住居跡に1点ある。この種の土器については、坏・鉢などと呼称されている場合もあるが、ここではその形状から、コップ形土器と呼ぶことにする。コップ形土器は本遺跡を含めて、これまで全国で43遺跡、75個体が出土している。東北地方から九州地方までのほぼ全国に分布し、時期的には八～九世紀に限定される器種である。この土器の用途については、特に指摘も分析もされずに至っているが、平城京右京五条一坊五坪と唐招提寺境内経蔵前井戸から量銘墨書が記されたものが出土したことで、計量器である可能性が浮上してきた。我々が一般に理解している計量器は木製の枡であり、古代でもこれまで秋田城跡などで7点が確認されている。しかし、木製品の発見が増加している最近の情勢のなかで、7点という数は非常に少ない。また、枡の出土遺跡が官衙などを中心にしているため、通常の食生活や流通などに使用された計量器としては、他の材質・形状のものに目を向けざるをえないであろう。そこで注目されるのが、コップ形土器であるが、これも特定遺跡の特定の遺構からしか出土しない器種で、ほとんどの竪穴住居跡から出土する、坏や甕のような一般的な器種ではない。量銘のある土器はこれまで3点が確認されており、1点は長野県中道遺跡出土の坏である。坏とコップ形土器の総量と考えた場合、希少な器種であるコップ形土器に2点の量銘があるということは、確率としては比較にならないほど高い。個々の土器を観察すると、共通して焼成・整形がよく、胎土も良好で、口唇部が平坦に調整されている場合が多い。また、内面も使用痕跡が希薄で、日常的な頻繁な使用や表面が摩滅するような用い方はしなかったようである。

次に、埼玉県におけるコップ形土器の出土遺跡について概観してみる。県内では生産遺跡である

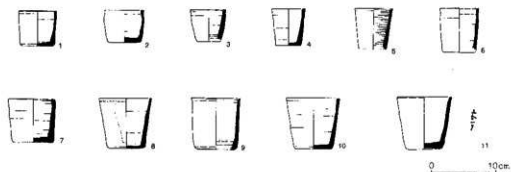
鳩山窯跡群を含め、15遺跡から出土しているが、このなかで本庄市・児玉町将監塚・古井戸遺跡、坂戸市宮町遺跡、同稲荷前遺跡、鶴ヶ島市若葉台遺跡、狭山市宮ノ越遺跡、そして本遺跡は地域の中心となるような集落で、部分的には官衙的な様相さえ見られる遺跡である。将監塚・古井戸遺跡は、馬具・帯金具の出土や企画性のある建物群の配置などからは、郷の中心とも呼べる集落である（井上1991）。宮町遺跡は勝呂廃寺に近く、『路家』の墨書、棹秤の出土で駅のような交通路との関係が指摘されている。稲荷前遺跡は、鳩山窯跡群とは越辺川を挟んだ対岸に位置し、古墳時代から平安時代さらには中世へと継続する拠点集落で、郡名墨書や帯金具など多くの遺物も出土している。若葉台遺跡については、以前から入間郡衙の可能性を指摘されるなど注目されている遺跡で、周辺にも有力な集落が展開している。宮ノ越遺跡は入間川左岸の台地に連なる遺跡群のひとつで、馬具・馬骨や鈴が出土しており、側溝を持つ道路遺構も検出されている。

以上のように、主なコップ形土器を出土する遺跡の様相を見ると、その属性は宮町遺跡に代表されるように、交通路との関係を考えることができる。つまり、交通の要衝に相当する遺跡から、コップ形土器が出土する傾向を看取できるのである。さらに、宮町遺跡出土の目方を測る道具である棹秤からは、流通や交易が行われていたことを想定でき、このような遺跡の性格からもコップ形土器も流通・交易で使用された量を計る道具、つまり、計量器として位置付けられよう。

なお、コップ形土器については別稿を用意してあるので、詳細な分布や規格性などについては、そちらを参照頂きたい。

引用・参考文献

- 井上尚明『将監塚・古井戸遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
井上尚明「郷家に関する一試論」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
大谷 徹『宮町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
小淵良樹他『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会 1982
斉藤 稔他『若葉台遺跡群C地点』鶴ヶ島町教育委員会 1979
篠原俊次「日本古代の秤」『平安京右京五条二坊九町・十六町』京都文化博物館 1991
富田和夫『稲荷前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992



第315図 コップ形土器集成図

⑪ 土器の胎土について

光山遺跡群出土の土器の胎土分析については、(株)第四紀地質研究所の井上巖氏に委託して下記の4点を実施した。分析の目的は、南比企窯跡群の製品である資料3と、資料1のような七世紀代の須恵器や土師器との関係を科学的に比較するためである。井上氏より詳細な分析報告書を提出していただいたが、用語や固有名詞など専門的な部分が多いので、私なりに理解した範囲で分析目的に沿って解説したい。なお、井上氏の御厚意で他の遺跡、とくに鳩山窯跡群や前内出窯跡群・東金子窯跡群の土器も分析し、対比していただいた。

最初に、分析した土器について、特徴と肉眼での観察を列挙してみる。資料1は蓋受けのある七世紀中頃に位置付けられる坏で、本遺跡では53号堅穴住居跡出土と2例しかない。胎土中には白色針状物質を含まず、本遺跡出土の一般的な南比企窯跡群産の須恵器に比べ、黒色味がやや強く胎土も緻密である。2は八世紀中頃の土師器坏で、焼成・整形とも丁寧で堅緻な仕上がりである。胎土には含有物が多く、特に白色針状物質が含まれている点で注目できる。3は2と同じ堅穴住居跡から出土した須恵器蓋で、本遺跡では最も多い南比企窯跡群の製品である。肉眼観察における最大の特徴である白色針状物質を含み、焼成の良好な部類である。4は所謂比企型坏と呼ばれる土師器坏であり、胎土中には鉄分を含んだ赤色粒子が含有され、内面全面と体外外面が赤彩されている。時期的には1とほぼ同じである。



第316図 分析資料

南比企・前内出・東金子の各窯跡群の資料と、本遺跡の資料4点の分析結果の概略は、以下のとおりである。

石英-斜長石の相関

資料1は南比企が集中するグループに属する。2は斜長石の強度が高く異質。3は前内出グループと共存。4は南比企と共存。

化学分析

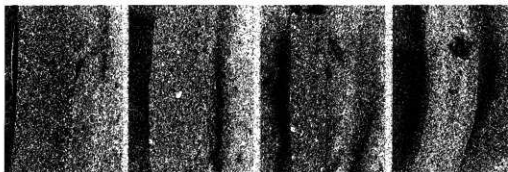
1は南比企と東金子の中間が混在するグループに属するが、南比企に関連する。2は南比企グループに近いがやや異質。3は南比企に近いグループ。4はどのグループにも属さず異質。

この結果をまとめると、1の蓋受けのある坏は南比企窯跡群産の可能性があり、これまで発見されていないより古い支群の存在が考えられる。南比企窯跡群の製品であっても、器種等によっては白色針状物質が確認できないものもあり、全く否定はできない。2の土師器坏は分析では異質という結論となったが、当初白色針状物質からこれを南比企産ではないかと想定していた。しかし、最近川越市南西部の東下川原遺跡で、土師器生産に関連するらしい遺構が調査されており、八世紀前

半を中心とした時期に操業していた可能性がある。結論は詳しい報告を待たねばならないが、電ケ関遺跡や本遺跡を含めて、入間郡や高麗郡に供給されていたと考えられる。3は石英・斜長石の相関では前内出、化学分析では南比企企となっているが、報告書の結論でも井上氏が南比企に近いと述べているとおり、肉眼観察でも南比企産であることが確認できる。4の比企型坏については、南比企に近い要素もあるが、どのグループにも属さず異質としている。この土器は名称のとおり比企地方を中心に武蔵国に広く分布する土師器であるが、2の土師器坏とは様相が異なっている。

今回は僅か4点の土器の分析であり、結論めいたことは引き出すことはできないし、傾向を語ることもできない。しかし、1の須恵器が南比企産の可能性があることが判明しただけでも大きな成果といえるであろう。最近は多くの発掘調査報告書で、土器の胎土分析を含めた各種科学分析の項を設けているが、私自身この成果を利用したり対比したことはない。それは、委託して分析した結果をそのまま掲載しているためで、理解できない科学的な専門用語やグラフ・表などが多く、分析の成果を考古学へ還元している例も少ないからである。

今回は分析点数も少なく、前述のような分析に対する意識もあったため、井上氏の詳細な分析報告書を掲載しないで、私なりに咀嚼した部分を記載してみた。内容に誤認等があれば私の理解不足によるものである。



分析資料の断面写真

4 光山遺跡群の評価と歴史的位置付け

これまで述べてきたように、光山遺跡群の調査では七世紀中頃から八世紀後半にかけての、堅穴住居跡55軒、掘立住建物跡40棟、柱穴列2基、井戸3基、土壇12基、溝3条が確認された。Ⅲ章の2で図示したように、集落はさらに東西に広がり、今回の調査で全体の2割程度が明らかになったに過ぎない。しかし、本遺跡の遺構・遺物については、事実記載や本章の考察でその特徴について述べてきた。ここでは、光山遺跡群の発掘と整理の担当者として、これまでの作業を通じて得られた知見をもとに、遺跡の歴史的な評価をして本報告の終わりとしたい。

光山遺跡群は、現在は川越市笠幡と日高市下高萩に所在し入間郡域になるが、新編武蔵国風土記

稿によれば、高麗郡笠幡村と高麗郡高萩村に相当する。律令期の高麗郡域については確定的な資料はなく、考古学からは宮ノ越遺跡での指摘（駒見他1982）がある位で、積極的な分析はされていないようである。しかし、風土記稿だけからの情報で郡域を設定し、竈ケ関遺跡や入間郡との境界に位置する若葉台遺跡を高麗郡に含めることが妥当であるか、躊躇せざるを得ない面がある。また、郡内の開発や集落の造営は建郡以降であるという従来の考えも、説得性があるように見えるが、續日本紀の一面の解釈のみで論理的な根拠はとくにない。現状では、考古学の成果からは、問題となる遺跡を個々に検討し、それらの蓄積を待って総合的な分析をするしかないであろう。

それでは、光山遺跡群は高麗郡との関係でどのように位置付けられるであろうか。これまで、高麗郡の中心は、高麗本郷という地名や高麗神社などの存在から、固定的に見られがちであった。しかし、ここ数年来の日高市域での発掘調査成果からは（中平1993他）、女影から高萩地区にかけて律令期の遺跡が多く発見されており、郡衙の比定地も女影廃寺・若宮遺跡の周辺が有力になっている。距離的には本遺跡から若宮遺跡まで2km強であり、女影地区に郡衙が存在した場合は光山遺跡群を高麗郡に含めることはさほど無理なことではない。建郡以降に開発が限られることについて、否定的な意見を述べたが、古墳時代以前からの遺跡の分布を考えると、的場地区以東には上組遺跡（黒坂1990）や御伊勢原遺跡（立石1989）等の弥生時代以降の集落が増加し、その様相は以西に比べてかなりの相違が見られる。現状であえて東の郡界を設定するとすれば、弥生時代から断続的にも集落が存在する的場地区と笠幡地区の間に線を引けないであろうか。このような推測からすれば光山遺跡群は高麗郡の東端に近い部分に位置する集落で、遺構・遺物の内容からは郡内でも重要な位置を占めていたと考えられる。

それでは、この遺跡に具体的にどのような性格を与えられるであろうか、遺構と遺物から検討してみたい。集落の初源は七世紀中頃で、やや時期が空いて七世紀末から八世紀初頭に、今度は台地の上位面と下位面にかけて広く集落が営まれるようになり、以後八世紀後半まで継続している。出現期である0期から、大型竪穴住居と大型掘立柱建物も伴う可能性もあり、小畔川に近い部分に狭い範囲に分布している。この大型竪穴住居からは、大形の釘が3本出土しており、一般的には寺院などから出土するような大きさのもので、さらに鉄が付着した台石も検出されている。大形掘立柱建物を含めて、計画的・目的的な性格を感じさせる集落である。この時期は当然高麗郡の建郡以前であり、建郡に先立つ50年以上前に出現した計画的な集落を、どのように考えることができるであろうか。北武蔵への渡来人の移住は、六世紀末頃までさかのぼり、それが本格化したのは、七世紀後半からであることが指摘されている（原島1987）。後に高麗郡となる地域に、魁となって進出した集団の拠点となる集落を、光山遺跡群に求めることはできないであろうか。大形釘の出土からは寺院建設に関連していることも想定でき、女影廃寺の造営時期を遡る可能性を指摘しておきたい。

I期以降の集落は継続的に存続し、I期は建郡前後に位置付けられるものである。日高市教育委員会の調査でも、建郡前後の資料として神明遺跡1号竪穴住居跡（中平1989）などがあり、文献だけに頼っていたこの時期の様相も、遺構・遺物からも明らかになっていくだろう。0期の集落を先駆的な集団としたら、I期以降はどのような性格を語るができるだろうか。個々の遺物等については既に述べたので、これらをまとめて光山遺跡群の評価をしてみよう。遺物では、馬具・鍔・

漆付着土器・『馬』『契』の墨書土器・コップ型土器を参考として考えると、いくつかの共通点を看取できる。列挙すると、(1) 馬具・『馬』・漆・コップ型土器からは交易・流通や主要な交通路の存在、(2) 鍵・『契』からは政治的・宗教的な要素、を感じることができる。(2) については、帯金具や瓦などの出土はなく、直接的に官衙・役人や寺院・僧侶の存在を肯定するのではなく、間接的な関連性を指摘するに止めたい。(1)については、さらに遺構や立地からも検討してみたい。0期の大型掘立柱建物を除くと、官衙的とも呼べるような大型の建物や総柱建物は見られないし、規則的な配置ではあっても、堅穴住居を含めた小規模な遺構群でしかない。しかし、これまで日高市域では、掘立柱建物跡の検出例は数例であることを考えれば、40棟の建物の存在は特異であり、有力な集落であることを示していると言えよう。また、遺跡の立地を見ると、小畔川に向かってやや突出した低地との比高差の少ない台地上で、2km上流には女形庵寺を控えている。渡河地点や水上交通の要衝としての条件を備えているとは言えないであろうか。さらに、遺跡の東には鎌倉街道の、奥州道あるいは柏原街道などと呼ばれる中世の古道が南北に走っており、光山遺跡群の北に位置する鶴ヶ島市の新山遺跡(註1)では、側溝を持ち硬化面のある道路遺構が発見されている。時期的には、確実な硬化面は九世紀以後であるが、平行して数本の溝も走っていて、通る可能性もある。このように、光山遺跡群を南北に通る陸路と、小畔川の水路が交差する地点に発達した、あるいは交通路を意識して計画的に造られた集落と考えると、遺物の理解もしやすくなる。物資が通過し集積され、各階層の人間がここを利用することによって、流通・交易も盛んになり、市が開かれていた可能性も充分考えられる。

この光山遺跡群が平安時代まで存続せず、八世紀後半には消滅する原因としても、交通路の問題が大きく関わるのではなからうか。近年交通路の研究も盛んになり、遺構としての道路の認識が進むにつれ、各地で官道を中心とした道路遺構の発見が相次いでいる。埼玉県では所沢市東の上遺跡で東山道武蔵路と思われる遺構が調査されており、武蔵国府からここまでのルートはほぼ確定的である。東の上遺跡の道路の最古期は、本遺跡の0期に相当し、出現に関しては時期的に一致する。東の上遺跡以北では、最近『驛長』の墨書と木簡が出土した、本遺跡から4.5km東の川越市八幡前・苅宮遺跡が注目されるが、道路を含めて遺構からの検証はできていない。明瞭な道路遺構が検出されていない現在、遺構や遺物から推定すると、東の上遺跡から宮ノ越遺跡や小山ノ上遺跡を含む柏原地区を経由して、本遺跡を通過するルートが有力ではなからうか。新田駅までについても見通しとしては、これまでの熊谷を通して北上する説(木本1992)とは異なり、深谷を通過するルート(註2)を考えている。

さて、宝亀二年(771)に武蔵国は東山道から東海道に所属替えになるが、これに伴って東山道武蔵路がルートを含めてどのような変化をするのか判明していない。光山遺跡群の集落の終末もほぼこの時期に重なり、両者を関連付けて考えると、武蔵路の廃止かルート変更による光山遺跡群の存在意義の消滅を指摘することができる。埼玉を含めて関東地方では、奈良時代から平安時代へと続くか、あるいは平安時代の集落は一般的に見られるが、奈良時代に姿を消す集落は多いとはいえない。光山遺跡群のような有力集落でありながら、継続しないで消滅していく理由を、交通網の変化という、政治的・経済的な要因に置くことはできないであろうか。

これまでも述べたように、今回の調査は遺跡の一部であり、本報告書も集落遺跡の持つ多面的・複合的な性格の一面を提示できたに過ぎない。また、高麗郡の問題についても触れた程度で、光山遺跡群と連動して検討できなかった。今後の課題としておきたい。

(井上尚明)

引用・参考文献

井上尚明「北武蔵の古代交通路について」『研究紀要10』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993

木本雅康「宝亀二年以前の東山道武蔵路について」『古代交通研究創刊号』 1992

黒坂慎二「上総Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989

駒見和夫他『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会 1982

立石盛司『女堀Ⅱ・東女堀原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987

中平 薫『若宮・稲荷・神明』日高町教育委員会 1989

中平 薫『新宿・若宮』日高市教育委員会 1993他

中平 薫『向谷・宿方』日高市教育委員会 1993

中村倉司「武蔵国における渡来人の軌跡」『土曜考古16』土曜考古学研究会 1991

原島礼二「第三節渡来人の活躍」『埼玉県史通史編1』埼玉県 1987

(註1) 光山遺跡群と同様に首都圏中央連絡自動車路の路線内に位置する遺跡で、平成4年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査した。

(註2) 深谷市八日市遺跡で、南北に走る側溝を持った道路遺構が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって調査されている。(平成5年12月現在)

追記

整理期間中の懸案であった、日高市道部分の調査が平成5年の12月に開始・終了し、年末に遺物が搬入された。調査の結果は、新たに竪穴住居跡1軒(56号竪穴住居跡)が発見され、35・39号竪穴住居跡と27号掘立柱建物跡の未調査部分を確認することができた。しかし、既に本書の編集は終了していたので、その内容については掲載することはできなかった。この部分の報告は平成6年度以降にはなされるであろうが、出土遺物を概観したところ、これまで本書に記載・および本書で検討した内容を大きく変更したり、左右するようなものは見られないようである。また、日高市教育委員会により周辺の調査が進められているようであり、光山遺跡群の全容もしだいに解明されていくことであろう。

なお、発掘当初は担当者を含めて僅か数名で始まった調査であるが、しだいに補助員の人数も増え、整理を含めると実に多くの人達の協力を得ている。これらの方々全ての氏名を記すわけにはいかないが、巻末ではあるがお礼を述べて本書の終わりとしたい。

(井上尚明)